宗教學目次

第一編　序論
第一章　宗教學の意義……一
第二章　宗教學研究の歴史……三
第三章　宗教學は如何なる科學なりや……八
第四章　宗教學に對する世の所謂宗教家の誤解を辨す……一一
第五章　宗教とは如何なる事實なりや……一五
第六章　宗教は確乎たる事實なり……一八
第七章　宗教學研究の基礎……一九
第二編　本論
第一章　バビロニア及アッシリアの宗教……二一
第二章　埃及の宗教……三三
第一節　動物崇拜……三六
第二節　諸種神格の崇拜……四一

第三節　死に對する埃及人の觀念……五三
第三章　支那の宗教……五八
第四章　古代日耳曼族の宗教……七六
第五章　希臘の宗教……八七
第六章　羅馬の宗教……一〇〇
第七章　印度の宗教……一〇七
第一節　吠陀の宗教……一〇七
第二節　波羅門教……一一三
第三節　佛教……一二二
第八章　波斯の宗教……一三五
第九章　イスラエルの宗教……一四五
第十章　回々教……一六四
第十一章　基督教……一七七

宗教學正誤

一頁十三行　「內」は「外」の誤。
同　科學の下「的」を脫す。
三頁　三行　Comaraptive / Comparative は Comparative の誤
同　H及Rは共にh及rの誤
同　宗教學の下に「は」の字を脫す。
同　五行　「なり」は「より」の誤
四頁　七行　「終」は「至」の誤
同　宗教の下「を」を脫す
五頁　一行　「をりし」の下「もの」を脫す
同　「宗教の事實的」は「宗教てふ事實の」の誤
五頁　六行　「學」は「筆」の誤
六頁　一、五行「ま」は「未」の誤
七頁　一行　「果して」は「頗る」の誤
八頁　二行　「擢ん」は「進み」の誤

宗教學第二册より第五册に至る正誤

行	誤	正
一〇 二	ヰゥセンシャフト	ヰッセンシャフト
一〇 七	社會學者	社會學等
一一 一二	Jmerhlb	Jmerhalb
一一 一二	grenzen	Grenzen
一一 一四	公開の上に	「の」を脱す
一四 九	舊思想	新思想
一四 一〇	新衣裳	舊衣裳
二四 四	崇	祟
二四 一〇	せる	さる
二六 五	ことはの下	「元來バビロニアに於ては」を脱す
二六 一一	く	かりしに由りて之れを知る可く
二七 三	アッカデア	アッカヂマ
二七 五	ダウキナ	ダヴキナ
二七 八	ミリッガ	ミリヅガ
二九 二	せらたる	せられたる
二九 二	燬所	燬く所
三〇 一二	女怪を	女怪と
三〇 一二	その	そを
三七 一二	崇拜せしが爲め	崇拜し之れが爲め
三七 一三	而も之れを同類の他の動物	而て之れと同類に屬する所の動物
三八 一	主	亘
三八 六	互	遂
三八 七	對象なれば	對象となれり
三八 一一	の旺んならざりし	の何人も皆な一樣に重んぜざりしと云ふとは
三九 六	クメム	クヌム
三九 一四	有ゆる	を削る
三九 一四	動物の特	を削る
四〇 一四	夫々	をして各その地方特有の

宗教學（第一冊より十冊三至ル）正誤

頁	行	誤	正
四一	一〇	且つ斯	且つ實際斯く
四六	八	國主	國王
仝	九	女神は	女神への
四八	四	初めて	初めな
仝	五	常	掌
四九	六	崇	稱
仝	三	崇	崇
五〇	一二	万物創	万物の創
一一	一二	學	に於ては
五三	一三	柳	仰
仝	仝	原始	太古
五四	二	未	末
仝	一〇	推	惟
仝	一四	崇	崇
仝	仝		と
五五	一三	推	惟
五六	一四	稱す	稱ふ
五七	一二	横	識
五八	一三	排斥	排外
五九	一八	もの	宗教
六一	一四	の權	の教權
六三	九	深遠	深遠
仝	一〇	ものありて	ものとありて
六四	五	一重	丁重
仝	仝	生命	生命
六五	一四	同名	同者
六六	二	しき	しん
仝	一四	靈魂崇拜	第二、靈魂崇拜
六七	四	天と	天を
仝	五	に大	に大
仝	六	祖靈	第三、祖靈
仝	七	そ	こそ
六八	五	文	又
仝	七	體	體
六九	六	爲りし	爲し
七一	一	獨り無	獨り獨無
仝	三	せんと……在り	するを得可しと考へたり。
仝	四	讀	談
七二	七	になる	仁なる
七五	五	後五	死後五
七六	六	とす	さ。
仝	一〇	見よ	見る
仝	一二	人交	人文
七七	四	な者	なる者
仝	五	崇拜	崇拜
七八	一三	トルヤ	トルや
八〇	二	等兎	等は兎
仝	一〇	希	卜占
八一	八	とは	とは
八二	一三	此橋	虹橋
八三	六	エッ	エル
仝	七	發音	發育
仝	一四	オウン	オヴン
八四	一	オウン	オヴン
仝	五	オウン	オヴン
九五	一三	廣大	擴大
九六	三	希臘	希臘

宗教學

文學士　加藤玄智

講義錄は館内の講義と異なり、紙數自ら制限ありて、教場にて講話する如く、充分余の希望を滿足せしむる能はず、然れど是れ實に止むを得ざるの事情に出で、又如何んともする能はず、仍て本學年の講義錄に於ては、館内の講義に多少參酌して從來の比較宗教若くは比較宗教史の躰裁に由り、メンヅース氏の宗教史を基礎とし以て宗教學の概要を講述するとゝ爲す、讀者之れを諒せよ。

第一編　序論

第一章　宗教學の意義

宗教學とは、佛教若くは基督教と云ふが如き、或る特種の宗教に於ける、教義の攻究にも非ず、一宗一派に所謂宗乘餘乘の穿鑿にも非ずして一切の宗教に亘り而かも各宗教以内に獨立したる、宗教そのものゝ科學研究なり、換言すれば獨り一宗一派に偏せず、直に宗教そのものゝ宗教現象てふ經驗的事實に照して、研鑽攻究し正確

なる事實の資料を基礎として、宗教そのものに向ひて、成る可く統一的説明解釋を附與せんと欲するもの是れ宗教學なり。然れば宗教學は、個々特種の宗教の教理を説明解釋するを以て目的とするものに非ずして、宗教そのものを以て、直ちに研究の對象と爲すと雖も、宗教學は宗教を科學的に研究するものにして、決して宗教の哲學的研究を爲すものに非ず、換言すれば宗教學は、宗教の科學にして、宗教哲學に非ず、宗教哲學は宗教科學の研究の結果を待ちて、初めて到達せられ得可きもの、然れば宗教學は、宗教哲學に進むに必要なる一階梯なりと謂ふ可きなり、尙ほ之れを詳言すれば、宗教學は宗教てふ現象、即ち宗教てふ事實を捕へ來りて、その宗教てふ確乎たる事實を基礎として、その上に建設せられたるものなるが故に、決して個人個人の思辨的空想より割り出せる、宗教説とは同一視す可からざるものとす。然りて而て最近の宗教學に在りては、宗教てふ事實を捕へ來りて、單にそを記載的に叙述するに止らず、又或は世界各國の宗教史を對照駢列して、某々の國民の宗教は斯くの如くなりしと記載敍述するのに止らずして、各國の宗教史は勿論、その他諸般の宗教上の事實の世に存在するもの、例之は野蠻未開の人民中に存在せる宗教的信

念等をも、成る可く廣く收集して、之等の宗教的現象に、統一的説明解釋を附與せんと期するもの、則ち是れ最近に於ける宗教學の採れる方針なりとす、換言すれば最近の宗教學比較宗教(Comparative religion)若くは比較宗教史(Comparative History of Religions)に一歩を進めんとしつゝあるものにして、他語以て之れを謂へば、最近宗教學の潮流は、漸く記述的科學なり、進みて説明的科學たらんとするに至りしものとす。

第二章　宗教學研究の歴史

前章に於て論明せるが如く、宗教學の研究が、斯かる發達を爲すに至りしは、極めて輓近の事にして、そは僅々二三十年以後の事に屬す。然れど宗教學がその曙光を洩發するに至りしは、西洋に在りては、亞剌比亞の哲學者アヴェロエス(一一二六—一一九八)にして、印度に在りてはアクバール帝(一五四三—一六〇五)なりとす。蓋し此の兩人は自己所信の宗教以外に各國宗教の比較的價値を承認せしを以てなり。然れど、彼等が各宗教を取り扱ひし方法は、極めて非科學的にして、此點に於ては、未だ以て嚴密に宗教の科學的研究の當時に起りたりと稱するを得ず。然るに、十八、九世紀

の交に於て、漸く科學的方法に由れる宗教の研究、換言すれば、兎に角宗教も人智の範圍内より研究することを得るものなりとの立脚地より、宗教を論議すると初まり、彼の所謂宗教は人智以上の神の啓示に出づるが故に、到底吾人々智の研究し得可き所に非ずてふ、中世紀以來の偏見僻説を排除するに至れり。則ち之れを先きにしては、英國の自然神教學者にその端を發し、獨逸に於ては、ライプニッツ、ライマール、ス等の唯理論的宗教説にその曙光を發し、延いてカントヘーゲル、シュライエルマッヘル等に終はれり。彼等は宗教全然自己の哲學的立脚地より解釋せしものなり。以上數氏と相前後してレッシング、ヘルデル等、又宗教の歴史的發達に着眼して、宗教の科學的研究の端緒を開き、之れに續いで、十九世紀に於ける東西交通の便益々增大するに至りしより、言語學神話學社會學民族心理學民間信仰の研究等は、著大なる進歩を爲し、その材料の豐富にして多樣なる、之等の材料に基き比較的研究の方法を諸種の宗教に應用して、その研究を全うするを得るに至りしより、先づ宗教の事實を記述せし、各國の宗教史は、大にその長大の進歩を致たし來り、終に今日にては從來比較宗教史、又は比較宗教など呼びて、廣く宗教てふ事實の收集記述にのみ

努めをりしより宗教學研究の風を一變し、宗教學は單に宗教の事實的記載にのみ止らず、尙ほ進みて宗教學てふ一つの説明的科學たらんと期するに至れり。

斯くの如く最近に於て、宗教が箇樣なる地位に迄、進歩するに至りしは、吾人實に之をマックス、ミュレル氏の功に帰せざる可からず、氏は現今實に七十有餘の頽齡に達し、今や病羸の革まらんとするものあり、近年著はせる印度の六派哲學なる書物は、恐くその絶筆ならん、吾人後進豈に悼惜に堪へんや。彼のベンジャミン、コンスタント氏が、千八百二十九年に世に公にせし、宗教の起原形式及び發達てふ表題の書物は、或は比較宗教學上の著書として、恐くその嚆矢ならんと雖も、ソーセイ氏が、獨りマックス、ミュレル氏を目して宗教學の創設者と稱するの至當なるを主張せしは、眞に偶然に非ざるなり。吾人實に、宗教學が科學として、その存在を、世間に認めらるゝに至りしは、その功實にマックス、ミュレル氏の在りて存せしを記憶せざる可からず。（此稿を記し了るに當り俄然余はマックス、ミュレル氏の訃音を手にせり眞に斯學の爲め痛恨に堪へず）

然れどマックス、ミュレルの當時に在りては、その所謂宗教學なるものは、その發達極めて幼稚なるものにして、唯僅に宗教の比較史、若くは諸宗教の事實の積集的記載

に過ぎずして、宗教學はまだ説明的となり、統一的の解釋を期するに至らざりき、而て此宗教學が漸く説明的になり來りたるは、極めて最近の事にして、マックスミュレル氏が、初めて宗教研究の事業に手を下だしたる當時に於ては、今日宗教學が致したるが如き、進歩は、夢想だも及ばざりしなり。彼の私資を投じて、宗教學者の研學に供せし、英國のギフォード公の如きは、尚ほまだ宗教學たる名稱さへも用ゐず、依然之れを自然神學(Natural theology)と呼びをりしなり。マックス。ミュレル氏の如きも、千八百七十年英京ロンドンに於ける、ローヤル、インスチチューションにて、宗教に關する學術講演を開き、後ち之講演を宗教學入門と題して世に公にせり。然るにマックスミュレル氏が、宗教學入門の序文に於て云へる所を見るに、氏の所謂宗教學なるものは、今日吾人が目して以て、宗教と稱するものとは、聊か趣を異にしをるものあり、氏は先づその序文の劈頭に於て、本講演は、世界に於ける主なる各宗教(Principal religions)の、比較研究の入門に供せんが爲めに、ものしたるものなりと謂ひ、又當時本講演の開始せらるゝや、學者或は諸宗教の科學的研究なるものゝ、果して成立するや否やをさへ、疑へるもの多く、斯かる學問の、畢竟せる無益の徒勞に飯して止まざら

んかを抗辯するありて、氏の見に反對せし者、果して多かりしと云へり。然ればマックスミュレル氏の當時に於てさへも、尚ほ未だ眞に宗教學即單に某々宗教の比較的對照的敘述に止らずして、吾人の今日期しをるが如き、最近の宗教學なるものは、未だ成立しをらざりしや明かなり。否な諸宗教の科學的研究なるものゝ、果して成立するや否やをさへ、疑へる學者ありしなり。特に當時英國は、基督教の勢力、中々侮る可からざるものあり、少く自由思想を有するの學者は動もすれば輙ち世間より排斥せらるゝ傾あり、是れギッフォード公がそのギッフォード講演なるものを開始し、年々專門の學者を聘して、宗教上の事項を、自由に談論せしむるの便を與へんとせしときに當り、氏が世上に公にせし、趣意書の第五條に照しても明かなりとす、斯くの如く、宗教の科學的研究なるものは、前途遼遠にして、暗黑なる雲霧中に包まれつゝありしが、十九世紀文明の賜賚として、東西の交通は愈々頻繁を致し來り、その結果アールヤ民族の宗教、特に印度の宗教の研究勃興し、之れと相駢びて、セム民族の宗教、特に基督教聖典の批評學的研究は、その氣焔を高むるに至れり、之と同時に、又現今世に存在しをる、野蠻人の宗教研究も起こり、遂に宗教の科學的研究上に、至大なる進歩

を來たし、以て宗教學研究の今日の盛觀あるを致すに終れり、歐洲列國中、和蘭の如きは夙に擺んで、その大學に宗教學の講座を設け、チーレ博士之れを擔當し、ブルセル、又、之れに倣ひ、佛國にてはコレーヨ、ド、フランス及びエコール、デ、チュード、レリジエーズにて、宗教學の研究熾んに興り、延いて獨英より羅馬に波及し、亞米利加の大學亦旺んに宗教學に心を傾くるに至れり。然れば今より凡そ二十有餘年前、即ち千八百七十年に於て、マックス、ミュレル氏が、宗教學入門と題して、その著書に於て、諸宗教の比較的敘述を爲したるものと、千八百九十七年に、チーレ博士が、宗教學要論と題して、その宗教學を世に公にし、以て宗教の科學的統一的説明を施したるものとを比較し來らば、宗教學上に來たせる進歩の、何かに著大なるかを見るを得可きなり。

第三章　宗教學は何かなる科學なりや

以上、宗教學成立の歴史を略述せり。斯くの如く宗教學即ち宗教の科學なるものは、創立以來日尚淺きが故に、人或は斯かる科學の成立をさへ疑ふ者あり、曰く、宗教の科學即ち宗教學なるものは、果して科學として成立す可きや否やと。然れど宗教なるものは、或はそが唯一眞神の啓示に出づるか又或は僧侶政客の詭計に出づるか

は姑く措き、宗教なるものは、兎に角確乎たる事實として、世に存在せるものなり。宗教なるものはその由りて來る所の本源何れに在るかは姑く之れを不問に附し措くも、兎に角宗教なるものゝ、儼として世に現存し、そるとは、何人も否定す可からざる事實なり、故に今此事實を、成る可く多く收集し來りて、之れを分科彙類し、之れに一定の組織系統を附與すれば、之れを以て一科學なりと稱するも、何んの不可か是れわらん、何んとなれば、科學とは元來正確なる事實に基ける、包含的にして、系統組織を有せる、合理的智識を指すものたるに外かならざればなり。此に於てか、宗教の科學的研究、即ち宗教學は成立し得可きなり。若し又斯かる宗教的事實を捕へて、そを統一的に或る原理の下に説明し去るときは、宗教學は又明かに説明的科學として、成立し得可きなり。こは後ちに至りて自ら明かなるが如く、實に是れ現今宗教學の採りつゝある針路にして、宗教學は將に單に記述的科學たるのみならず、更らに説明的科學たらんとしつゝあるものとす。勿論余の此に科學と云ふは、英語のサイエンス Science 即ち狹義に用ゆる科學、尚ほ他の語を以て之れを云へば、自然科學の意味に非す、余は自然科學は、云ふ迄もなく、精神科學をも含有せしめて、而て之れを

哲學と區別し、以て吾人の或智識を科學と稱する場合に適用せる意味の科學即ち廣義に用たる科學の謂にして、獨逸語のヰッセンシャフト(Wissenschaft)の義なりとす。果して然ば、科學なる者は、外界に表はれたる、天然自然の物的現象は勿論、吾人內界の事實たる、精神現象即ち心的現象をも併はせて攻究するものにして、一切是等の研究を稱して、科學と名けたるものとす、故に宗教の如きも彼の倫理現象や社會現象と同く、一つの確乎たる事實にして、その倫理現象を研究する倫理學社會現象を研究する社會學者が、一個獨立の科學として、現に成立しをるが如く、宗教現象を研究する宗教學、即ち宗教の科學の成立し得可きは固より明かならん而て倫理現象や社會現象が、心的現象なるが如く、宗教亦吾人の心的現象にして、吾人々心の產物たるに外かならざれば、此精神現象たる宗教を研究(科學的に)する者、吾人茲に之れを彼の心理學倫理學社會學等と同く、心的科學中に屬せしめて、之れを宗教學と稱するものとす、故に余は、此に宗教學を指して、一科學なりと稱するも、物理學鑛物學の如き、物質現象を說明する物的科學の謂ひには非ざるとを記憶せざる可からず、故に科學は之れを大別して、二と爲すとを得可し、曰く物理的現象を說明する科學

即ち物的科學と心理的現象を說明する科學、即ち心的科學と是れなり、物理學の如きは、前者に屬し、宗教學の如きは、後者に屬するものとす。

第四章　宗教學に對する世の所謂宗教家なる者の誤解を辨ず

前章に於て、論明せるが如く宗教學即ち宗教の科學的研究なるものは、その名の示めすが如く、宗教なる現象を取りて、之れを科學的に研究するものにして、そは科學として、成立するとを得るものなり、然り宗教學は、既に科學として、成立する所以を論明せり、然れば、宗教學の成立に關しては、最早や寸毫の疑無きものとなりしも、此に宗教學が、洋の東西を問はず、國の內外に別無く、古今とも、大に世間より、誤解せられ、特に宗教家なるものが、宗教學の研究を以て、眞正なる宗教を荼毒するものなりと爲し、之れを蛇蝎視するもの多きは、學者の早に熟知しをる所なりとす、純粹なる宗教學者に非るも、カントの如きは、その著宗教論(Religion innerhlb der grenzen der blossen Vernunft)の發行を禁止せられ、フィヒテ亦、その宗教思想を以て、無神論を主張するものなりとして、痛く世の擯斥を蒙り、英國に於ても Hibbert Lectures 公開せらるゝ

や、ヴヰームス、マルチノーのマックス、ミュレル等、當時錚々の聞えある、十八人の學者は一同に連署して、宗教の科學的研究の必要なる所以を稱道せり。今彼等が協同して、宗教の科學的研究の道を開かんと企てし時の意見書は、載せてマックス、ミュレル氏の宗教の起原及び其發達(Lectures on the Origin and Growth of Religion)なる書冊の序文に在り、以て英國に於ける、宗教學研究の如何に世人より嫌忌されをるかを見る可き也。

其他、日本の佛教者が、兎角宗教學者を嫌忌し、宗教學者を目して、眞正の宗教を傷く者なりと爲すが如き、比々皆な是也。Tieleの如きも、其著宗教學に於て、世の批難を免れんが爲めに、成立宗教に對しては、迂餘曲折、百方その論鋒の、到り及ばんとを避けんとしつゝあるものゝ如し、然れど、宗教學の科學的研究は、眞正なる宗教の存立を斯く迄害するものなるか、宗教學者は、基督教の敵にも非ず、又佛教に仇せんと欲する者にも非ず、唯その依る所は、確乎たる宗教上の事實にして、唯その要むる所は、宇宙の眞理なり、宗教學者、豈に事理を曲解して成立宗教に災ひせんと努むるものならんや、何んとなれば、斯くの如きは、他を誣ゆるの甚しきものにして、眞理の爲めに、宗教を科學的に研究すと揚言しをれる、宗教學者自ら、その自殺を謀ると、一般な

るもののあればなり、蓋し他を曲解譏誣するが如きは、眞理と相距ること、天淵霄壤も啻ならざるものにして、斯くの如きは、實に眞理を愛し、眞理を目的とするものゝ、能く忍びて、爲し得る所のものに非れはなり、而かも世の所謂宗教家の惟へるが如く、彼れ宗教學者にして、成立宗教の眞正なる所以を、曲解譏誣せんとす、是れ豈に、宗教學者自ら、自己の頭を斷ち、自己の唯一目的(眞理)を、絶滅せんとするものに非ずして何ぞや。若し果して斯くの如くんば、既に彼れ宗教學者なるものは、眞理を要めて進まんとして、却て自ら眞理そのものを傷らんとす、自家撞着も之れより甚しきあらんや、宗教學者豈に斯かる愚を學ばんや、世の宗教學者を忌諱するの輩、宜く心を安じて可なり。然れど、之れと同時に、宗教學者は、その目的、一に眞理に在りて存するが故に、縱令如何に、歴史的關係を有せる、古宗教古教權と雖も、そが苟も眞理ならざる以上は、遠慮會釋無く、その然る所以を明かにして、之れを學術界に公にせざる可からざるなり。然れど、之れと同時に、成立宗教と雖も、その眞理なる部分は充分之れが發揮宣揚に力むるは、又宗教學者の、自ら好みて任ずる所なりとす。故に世の所謂宗教家なるものは、自家所信の宗教にして、苟も眞理の化身、眞理の權化たるを確信して

疑はざる以上は、そを以て、單に獨斷的に獨り自ら自己所信の宗教が、眞理也と主張しをるに止らず、宜く自ら進て、そを公平なる宗教學の審判所に呈出して、眞に彼れ等所信の宗教が、眞理なる所以の證認狀を、公平無私の宗教學の判決に請ふ可き也、否な宗教學は、彼等宗教家が、來りて之を請ふを待たずして、自ら進みて、成立宗教の科學的研究に從事し、成立宗教が、果してそを信奉する教徒の云ふが如く、眞理の權化なるや否やを檢して、その證認狀を與へんと望みつゝあるものなり、然るを彼等宗教家、果して何人ぞ、彼等所信の宗教が、彼等の謂ふが如く、眞理なる所以を發見せんとしつゝある、宗教學者を忌諱する、彼等の如きとは、吾人豈に長大息せざるを得んや、然れど宗教學は、一言以て彼徒に告ぐ可きあり、そは新酒を古瓶に盛り、舊思想を覆ふに、新衣裳を以てして、時世を瞞過せんとするが如きは、到底不可能にして眞正に眞理是れ愛し、眞理是れ目的とする、學者宗教家の爲す可き事に非ざると是れなり、余は今宗教學を忌諱するの輩に向ひて、既に一世紀の昔時に於て、カントに由りて喝破せられたる、その著、純粹理性批判の語を以て、彼等の面前に呈し、以て彼等愚頑の徒輩の、頂門に加ふる一針たらしめんと欲す、曰く、

今や是れ批評の時代なり、天下何にものか能く批評の審判を免るゝを得んや、國家の法律も、最早や衰龍の袖に匿くれて、その尊嚴を保つ能はず、宗教も神護の聖權を楯として、その生命を全うする能はず、斯くの如きは、偶以て、その法律なり宗教なりが、自己の命運に關する一世の疑惑を招くの因由を養成するに過ぎず、要は唯理性の判官をして、その法律なり宗教なりを、眞率聲實に、審判せしめて、その價値を發揮し、以てその眞價に對する適當の尊敬を、世人に要求するの外、又他に何等の善巧方便あるを見出す能はざるものなりと、

第五章　宗教とは如何なる事實なりや

既に知る、宗教學は宗教なる、確乎たる事實を取りて、之れを研究するものなるが故に、又確に成立し得可きものなるを、然れどその所謂、確乎たる事實てふ宗教とは、果して何ぞや、

今此宗教とは何ぞやとの問題に答へて、遺憾なからしめんとするは、宗教學全部の研究を終りたる後ちに非ずんば、到底その充分なるものを、與ふると能はざるものとす、何となれば、宗教學は、宗教を科學的に研究して、その性質を明かにし、宗教とは

何ぞやとの概念を、明晰ならしめんとを以て、その目的とするものなればなり、故に宗教の定義の如きは、寧ろ宗教學研究の結尾に於て、初めて得可きものとす、然れば余は今此に、宗教なる概念に關して、或は自己の定義を提供し、又は各學者の定義を臚列し來りて、徒らに學びの徒の思想を混亂するを止め、唯此には世に宗教的現象と呼ばるゝものと宗教的現象の名を蒙らざるものとを、對照比較して、以て宗教的現象、若くは宗教とは、凡そ何かなるものなるかを、學者自らをして、その心裏に髣髴せしむる所あらんとす。

父母に孝に、兄弟に友に、君上に忠に、朋友に信なる、人之れを呼びて、倫理的現象と稱して、宗教的現象と稱せず。學校に於て、教師の生徒に教授し、裁判所に於て判官が罪人を判決し、醫師の患者の疾病を診斷するが如き、人、誰か之れを以て、宗教的現象なりと謂はんや。然るに今耶蘇教者のバイブルを讀み、佛教徒の經文を誦し、或は教會に祈禱し、或は寺院に護摩を燒き、或は說法を聞き、或は懺悔を爲す等、一に皆な是れ、吾人の宗教的現象と爲す所のものなり。その他野蠻人が、木石偶像に跪拜し、日月星辰を禮拜するが如き、天理教道門教徒が、或は神水に病氣平癒を祈り、或は異言行

者の如く、秘怪なる咒文に、印を結びて、佛前に加持祈禱するが如き何人も皆な之れを目して、以て宗教的現象と稱するに躊躇せざる可し、然り、吾人は實に、以上列擧せし如き、倫理的現象にも非ず、教育的現象にも非ず、法律的現象にも非ず、醫術的現象にも非ずして、一種の現象、此に之れを宗教的現象と稱し、是等の現象及びその現象の由りて起る所の原因に對する、或關係は、一切之れを總括して、宗教てふ名稱を附せるものとす。則ち彼の印度支那日本に亘りて、幾多の僧侶と寺院と聖典とを有せる佛教や、猶太に起こり、歐洲の天地、至る所に、その教會の尖頭巍峨として、天を擎せるものありて、林立せるものを有し、更らに大西洋の浩波を蹈破して、北米の野に、天文を讃するの讃美歌に、聽者をして、耳聾せしむる所の、基督教や、アラー (allah) の名に由りて、火と劍とを以て、その教を弘宣し、代々のカリフは、東西にその教陣を布いてその教勢の強大を競へる、回々教や、その他波羅門教、猶太教、波斯の拜火教等、一に皆な是れ、世人の宗教と稱する所のもの、然れば斯かる宗教を拉へ來りて、斯かる事象を研究し、宗教とは果して何ぞやとの概念をして、明晰ならしめんとするものは、即ち宗教の科學的研究にして、獨逸の詩聖、シルレルの所謂、諸宗教の雲霧の被覆の眞

に、宗教の眞月藏くれ存する所以を認め、宗教そのものゝ本性や、その發展の由來を攻明せんと欲するものは、則ち吾人の宗教學の本領なりとす。亦以て宗教及び宗教學の何にものたるやを畧ぼ想見し得可きなり。

第六章　宗教は確乎たる事實なり

次ぎに宗教てふ事實の、何にものたるやは、吾人粗々之れに通曉するを得たり。然れど、斯く吾人の認めて以て、確乎たる事實と爲せる所の宗教てふ現象は、果して斯く確實なるや否や、そは或は吾人の妄想に由來せるものには非るか、如何ん。吾人は今や、此問題に向て、回答せざる可からざるの運に至れり。然れど此問題たるや、元來認識論上の問題たるものにして、宗教學の能く回答し得可き所のものに非ず、此問題に向ひては宗教學は何等の答辯をも附與すると能はざるものなり。宗教學は世に宗教てふ事實の存するとを確認し、その宗教現象に、統一的說明を附與せんと欲して、起これるものなり。宗教學は單に斯かる宗教てふ事實を、事實として初めより、その確實なるとを假定し、而て此假定の下に、宗教研究の、科學的研究の步武を進めつゝあるとは、恰も物理學が、物理現象なるものゝ、客觀界に存在する、確乎たる事實なるとを假定して、而てその物理現象てふものゝ間に存在する一定の法則を發見解釋せんと努め、倫理學が、倫理現象の確實なるとを假定して、而てその倫理現象より飯納して、吾人の道德的行爲の規矩繩墨を論定せんと努めつゝあると一般なりとす。然れば宗教てふ現象が、確實なるや否や、或は吾人の妄想に出づるに非るか如何んとの問題は、全く認識論の問題にして、宗教學の得て關與する所に非ず、此問題や、若し最もその普遍的形式の下に之れを謂ひ表はすときは、當に左の如くなる可し。曰く、吾人の眼底に映寫しをる此世界は、實在なるや否やと是れなり。然れど、是れ全然科學の範圍を超越して、認識論の範圍に入り來りたるものとす。然れば此の問題に對して、宗教學は、その解答を宗教哲學、若くは宗教的認識論に讓りて、宗教學自らは、何等の解答をも附與せず、又附與し能はざるものとす。然れど、余をして一言此に之れを附加せしむれば、宗教なる現象も、亦他の倫理現象や、物理現象が、確乎たる事實なりと謂ひ得ると、同一の權利を以て、その確實なる所以を保證され得可しと（東京博文館出版拙著宗教新論第三編第三章第六節參照）。

第七章　宗教學研究の基礎

宗教學は、之れを研究するに、如何なる研究法に由る可き乎。曰く他無し、宗教學が、元來科學にして、經驗の範圍を超絶する能はざるものなれば、唯心論者が曾て試爲したるが如き、先天的に、又主觀的に、概念發達の規則に照らして、客觀的なる宗教てふ事實を説明解釋し去りて、寸毫も遺憾無からしむるとは、到底企及し得可からず、そは畢竟蓬萊山に、不老不死の仙丹を求むるものたるに過ぎずして一個の空想なり。然れど宗教は縱令そを經驗的事實なりとするも、元來宗教なるものは、吾人の精神上の事實なるが故に、自然界物的世界を説明解釋する、物理學化學等の、物的科學を研究すると、同一の方法を以て、研究する能はず。引力則が、宗教的事實を説明する能はざるは、獨り識者を待ちて後ち知らざるなり、宗教の科學的研究は、化學の如く、某々の藥品の調合に由りて、その現象を實驗室内に於て、目見て手驗するを得ず。或は電氣を掛け、望遠鏡上顯微鏡下に觀察し得可からず、そは吾人の内的經驗の事實なり、故に苟も斯かる吾人の内部經驗の事實たる、宗教を研究せんと欲せば、吾人は先づ、吾人自身の宗教的意識に内省し、之れと同時に、宗教の歴史的表現に鑑みて、内外の兩方面より、その研鑽攻究を完うし、宗教てふ一大人文現象に、統一的の説明解釋

を施さゝる可からず、是れ實に宗教學の任務なりとす。

以上論明する所、之を要するに、宗教學は、その研究の方法や、倫理學社會學の如き、所謂心的科學に於て、一般に用ゐらるゝ所の方法に依據し、而してその研究の資料は、之れを最も廣き意味を以てせる、宗教史の提供する所を執りて、之れと自己の宗教的意識とを比較對照して、心理的説明解釋を施さゝる可らざるものとす。

(尚ほ本章に關しては、拙著宗教新論第二編第一章第三節より第六節迄、及び第三編第三章第六節を參照すべし)

(序論終)

第二編　本論

第一章　バビロニア及びアッシリアの宗教

バビロニアの宗教は、その根本に於ては、アッシリアの宗教と、少なからざる類同を有しをるものにして、此兩者は、頗る他の諸國の宗教と、その有樣を異にしをる者なり。而してその起原の遥遠なる、遙に支那及び埃及の宗教を歴し、埃及及び支那と同しく、當初より、單獨孤立の發達を營爲せり。バビロニアは、西歴紀元前三千七百五十年頃、サルゴン王元帥の下に、セム民族の征服する所となりしも、其宗教は、依然と

して、セム民族の宗教中に、吸收せらるゝとなく、以てその獨立を持續せり、然れども
バビロニアの宗教が、小亞細亞及び歐羅巴に、その感化を及ぼすに到りしは、全くそ
が、セム民族の宗教に接觸して、大にその影響を蒙りし後ちにありとす。イスラエル
人は、早く既にバビロニアの思想の影響を蒙り居りしことは、明かにしてアブラハ
ムか、カルデアのウルより、カナアンの地に來りしは、舊約書の吾人に敎ゆる所、代々
の預言者又バビロニア人の商業家たりしことを說き、バビロニアの兵士又パレスチ
ナに來りしことあり、而かもそは實に、イスラエル人の、バビロニア追放以前の、上古
に於て之れを見る。希臘人亦フオエニケ人の媒介を經て、バビロニアの思想に親炙
せり、埃及人の宗教も、バビロニア人の宗教に少からず酷似せるものあり、埃及の神
殿は、その源をチグリス、オイフラテスの河畔に發し居りしことを知るべく、埃及人
はその神殿の建築と共に、紀元前五千年以前に於て、早く既にバビロニアの天文學
を輸入しをりしと謂へば、バビロニアの宗教の起原は頗る遼遠なるを察し得可き
なり。

セム民族が、バビロニアを征服せし以前に於ては、バビロニアは、スメリア人とアッ

カデア人との、二人種を以て占有せられ前者は邦の南方に住し、後者は北方に住し、
而して支那人と同しく共にチユラニアン族に屬し、セム民族とは言語及び血緣上の
關係無かりき。バビロニアの人民は、既にセム民族に接觸せざりし以前に於て、早く
文字を有し、その楔象文字はバビロニア最古の記號文字に續いで使用せられ、永く
神聖文字として、尊重せられたり、彼等は彫刻術に長じ、そは埃及の彫刻術と全然同
一形式なりとす。

バビロニア。アッシリアの宗教に關しては、古代の希臘人及び羅馬人の記錄の斷簡
零墨あるに止りしが、今世紀の後半より、バビロニア。アッシリアの遺墟を探りて、聊
か新智識の資料を得しも未だ充分なるものを獲る能はず、然れども余は今左に、現
今最も依據するに足ると思惟せられたる所の、事實より、バビロニアの宗教を敍述
せん。

バビロニア人亦支那人と同しく、靈魂の崇拜旺にして、之れをチと呼び、自然界は悉
く皆靈魂を以て充足せられ、その魔力の不可思議にして、靈魂の人形を執りて表現
し來るを信じ、從て靈魂と人との交通は、魔術に由りて行はるゝに至れり。靈魂の信

仰は、バビロニアに於ては、實に太甚しくその勢力を有し、將來バビロニアに於ては、一層高尚なる神格の表現し、そを倫理的色彩の下に、寫象するに至りても、尙且つ太古の靈魂崇拜は、依然として行はれをるを見る、疾患病苦一に之等靈魂の所作なりと信じ、そを掃ひ除けんことを努め、靈魂中その力强きものに向ては、弱きものゝ崇を追ひ除けんことを祈願し、時に天地の靈魂は、疾患病苦の惡魔を掃除けんことを祈願せらるゝあり、要之バビロニア當時の宗教は、生氣教の(Animism)の少しく進步したる、シヤマニズム(Shamanism)の階段に在りしものと謂ふ可きなり。

セイス氏は、バビロニアの宗教の古形式は、動物崇拜なりと謂ひ、大に此說を主張せり、勿論埃及及び希臘に於けるが如く、バビロニアの神々は、動物の形式を以て表はせる、翼ある牡牛、鷲頭人躰の神あるに至る是れなり、是れ吾人が埃及の宗教に於て、目擊するが如く、その崇拜たる、太古の宗教に於ける、神が初めは動物にして、尋いで半人半獸の時代に遷り、最後に人形的に、寫象せらるゝに至りし、階段を指示せるものと謂ふ可きなり。バビロニアに於ては、神が獸形よりして、人形に進轉する、中間の歷程に於ては、神は初めに、その神と同一視せられをりし、動物の背上に坐するもの

として、寫象せらるゝをつねとす。アッシリア人の崇拜せる、ダゴンは、その頭肩は、魚鱗を以て覆はれ、またその男神女神、共に人形にして、羽翼を具ふ、翼龍あり、人頭にして翼ある大牡牛あり、そは惡鬼を驅逐するを掌る、その他羚羊(カモシカ)、蛇、山羊、豚、禿鷲は、又その崇拜の神と、相關係すると頗る密接にして、吾人は當時、バビロニアの宗教が、神獸同形時代よりして、神人同形時代に、轉進しつゝありしを見る可きなり。

バビロニアの宗教も、亦太古各國の宗教と同じく、一も統一せる信仰を有せず、各地方々々に從て、夫々その地方固有の神を崇拜し居れり、埃及に於ても亦然り、是れバビロニア埃及等に於ては、其の社會組織が、トテム崇拜に淵源せしに由りてなり、何んとなれば、太古各部落の人民が、各自その祖先として、崇拜せるトテム(トテム崇拜の說明に就ては拙著宗教新論一八九頁より一九二頁迄を參照せよ)を有し、而してその部落の勢力、次第に隆盛に向ふや、此に初めて、その各地方の部落の、嘗て崇拜し居りしトテムも、亦漸々進化して、各地方特有の神々と爲るに至るは、自然の理なればなり、是れ又後世、バビロニア帝國の隆盛と共に、その各地方々々に、特有せる、宗教を一統せんと企てしも遂にその成功を見ざりし所以なりとす。

然るに、之れより一層進歩したる、バビロニア人の宗教思想に、表現せる神格は、靈魂にも非ず、動物にも非ずして、天然現象を神化せるものに在りて存す。然れど、そはセム民族の宗教の如く、家族制に淵源せる、君父の思想より來りしものに非ずして、尙一層普遍的性質を具有せる、自然力そのものなり、そは天地萬物の創造者なりとす、而して、バビロニアの宗教が、セム民族以外の宗教思想たりしことは、その神々には一も女神無く、却てバビロニアの男神、ベルに對して、その女神ベリットを生じ、男神アヌより、女神アナットを生ずるに至りたるは、全くセム民族のバビロニアに侵入せし以後の事なりとす。

ベルシア灣頭の一市、エリヅにて崇拜せらるゝ、エア神は、海の神にして、後世之れをオアンチスと呼ぶ、半人半魚の怪物にして、海より來りて、人間に學問美術を敎へたりと、傳ふ、アヌハ下オイフラテス河畔エレクの神にして、天の神なり、否エレク人は支那人と同じく、天そのものを以て、至上神と觀じ、萬物の創造者統御者なりと思惟せり、唯バビロニアに於ては、その思想支那に於て之れを觀るよりは、少しく無形的に精神化せるものあるのみ、傳へ言ふ、世界大洪水の時に於て、アヌの住所は、諸神の

棄りてその難を避くる所となれりと、後ちアヌハ、又天地間一切の萬有は勿論、神々をも造れりと傳へらる、ベル又ニプールより起りて、バビロニア人の尊信する所となれり、アッカデアのムルリル神と全然同一にして、下界の神なり、然れども、エア、アヌ、ベルハ、各異なる地方に起りたるを以て、未だ密接なる關係その間に生ぜざりしも、エアとその女神ダウキナ（地の神なり）と其見ヅムチ（太陽の神なり）とは、バビロニアに於ける三位の神なり、而して此三神の外、バビロニアに於ては、斯かる密接なる神々の親族關係を形成せるもの無く、こは一の例外なりとす。エアの兄神ミリヅッカ即ちメロダック、埃及人のオシリスと同一視せられ、太陽の神なり、ミリッッカ及びオシリスの兩神は、共にその妻にして、姉妹たる、女神を有し、ミリヅッカは、イスタルを妻とし、オシリスは、イシスを娶れり、その他セルクルに於ては火神サヴルあり、クダに於ては、死神ネルガルあり、リムモンは風神にして、マッは鼠の神なり、諸神の敵チアマートなる龍神亦崇拜せらる。

太陽太陰は至る所に崇拜せらる、各市曾その、日月二神を有せり、游牧の民が、一般に月を尊べる、バビロニアに於ても、亦此風俗にして、月神は日神より強大にして、その

父神なりと想像せられたり、カルデアのウルに於ても月はその主なる神なり、然れども又ラルサ、シッパラ等の諸市に於ては、太陽を第一位に置き、以て之れを尊信せり、日月の外に星辰の崇拜、亦熾に、カルデア、バビロニア等、一に皆な然らざるはなし、特にバビロニアに於ける神殿は、畢竟觀星臺にして、其建築や、主として天躰觀側の、便否上より打算せられたる、設計に係る、而して之れを掌る者は、一に祭司僧侶にして、僧侶は同時に學者たりしなり、故にバビロニアの文明は、一に宗教に淵源せりと謂ふも過言に非るなり、今日天文學上に用ゐらるゝ、黄道の記號も、又紀元前四千年以前の太古に於て、早く既にバビロニア人の規定せし所にして、猶太教、基督教の安息日の制も、亦アッカデアより來りしもの、そは多分月の盈虧、若くは彼の一週日の、依りて以て命名せられたる、七星に關するものならん。

バビロニアに於ける神話は、バビロニアの宗教中の最近の發明に係るものゝ中、その最も興味あるものなり、吾人は既に魚神の、日々海より出で來るを說き、太陰の太陽の父神にして、エアと、その見子たる太陽、ダヴキナ、の親族關係を一言せり、而して此エアとダヴキナとの神話は、將來バビロニア宗教の發達に、頗る重要なるものあ

りて存す、ダヴキナはツッ又はツムタと呼び、バイブルに所謂タムムッなり（以西結第八章十四節）タムムッは婦人に愛せらたる、春の太陽にして、夏日の炎熱の燬所となりて、六月に至れば、斃死す、然れども、秋天白露降落の候に至れば、タムムッは、再び蘇生すと云ふ、タムムッはエリッ市附近の、エデンに住す、エデンには、世界の一大樹あり、世界の中心は、その根底を有し、エア自ら春に至れば、そを培養す、是れ恰もチュトン人種の宗教に所謂、イグドラシル樹に等しきものなり、而して時に此樹木の兩側に、ケルブの其果を拾ふを、蓄けるものあり。

タムムッに次いで來る可きは、イスタルなり、イスタルは、古代バビロニアの女神中、最も著明なるものなり、イスタルはその初め、地の女神にして、太陽の母たると同時に、妹妹なりと傳ふ、故にイスタルは畢竟ダヴィナと同一なりしならんイスタルはその夫、タムムッをして、再生せしめんが爲に、冷水を求めて、下界に赴けりと謂ふ、時にイスタルは、地獄の女王、ニンキガル即ちアルラトの爲に、その粧飾品を剝奪せられ、疫病の神、ナムタルの爲に、諸種の困難なる疾病を以て、苦めらるゝに至れり、然るにイスタルの、一たび此世界を去るや、人間は勿論、下等動物の間に至る迄、愛情の稱

約漸く綾みて、世は乾燥無味の世界と化し去りしかば、使者此世より冥府に至りて、イスタル及びタムムヅを、此世に迎へ復さんとせしことありき、然れど極めて上代に在りては、イスタルは夕辰にして、月の從者なり、雖然イスタルの本性は、愛の神にして、イスタルは、その愛夫を求めんが爲に、下界に降れり、之よりイスタルの、フォニケ、シリア等の諸國に於て、セム民族の宗教に化し去るに至りては、アシュトレトとなりて、淫祀を成せり、又イスタルは希臘に於ては、愛の女神として、アフロヂテーと同化し、武勇の女神としては、或はアマッゾン國人の尊崇する所となり、以て希臘のアルテミスと同化せられたり。

イスタルの神話より、尙一層原始的なる神話は天地創造の說話にして、その數諸種あり、その一に曰く、太古エア神あり、諸種の巨怪を以て、天地未開の混沌界に住せしめたりと、その他或は神と世界との生成を談ずるあり、或は天地未開の混沌界を以て、女怪を觀じ、その災惡を生む龍蛇と觀じ、善神は災惡暗黑と戰ひ、光明の世界を、克復するを以て、その目的とせるものと說けるあり、之を要するに、バビロニアの天地創造說は、之れを書約書の創世紀に比するに、一層朴素的思想の產物なりと謂はざ

るべからず、然れどバビロニアに於ける世界洪水の說話と、アルク船との譚話は、舊約書の思想と、全然符節を合はせたるが如きものありて、必ずや、非常に密接なる、交互關係を、具有しをりしや明かなりと雖も、その何れが、他より古くして、他に影響を及ぼすの原因となりしかは、到底今日の、考古學上の、智識を以てしては、判決する能はざるものとす。

吾人が聖書の記事を以て、バビロニア、アッシリアの宗教を察するに、そは實に、此二大王國の、壯嚴華麗なる崇拜を成しをりしを想像するを得可く、そは祭司等の手に由りて、その原始的落寞の狀態より、豪奢なる拜崇を生起し來るを知れり。バビロニアに於ける、ベルメロダックの神殿の如きは、今日尙世界の人口に膾炙せり。メロダックは、バビロニア、アッシリアなる、大帝國の國神なるが故に、一切諸神の上位に居り、國君の保護者なり、その兒子ネボは、預言者にして、又智識の神なり。メロダックがバビロニアに於けるが如く、アッスール神、又アッシリア國に、その權威を振へり。アッスールは、實にアッシリア王國の、固有なる國神なりとす、斯くしてアッスールは、その外形の華奢と共に、その內的精神の要素を發揮し來り、初めはその神々たる國

王の保護者たるのみなりしが、今や諸神は、道德上の一勢力として、寫象せられ、そは單に、國王のみならず、世界萬國の民を問はず、等しくそを崇拜する、一切の人々に、幸慶を與ふるものなりと考へられたり、メロダックは、慈心に富み、國王を戰爭に援け、疾病を癒治し、悔み悛むるものを赦し、死者を生かしめ、その歸依者の靈魂を導いて樂土に至らしむ、是れ實にバビロニアの宗教が、セム民族の宗教的影響に、感觸せし所の形相にして、その懺悔の讃歌の如き、バビロニア固有の魔術的宗教思想を超脫し居るものなり、然れどその所謂懺悔の如きも、精神的にその罪を悔み改めんよりは、己れの罪に對する、神罰を悲歎するに外かならず、是れ實に、舊約書に見えたる宗教と、全然その趣を異にせる所のものなり、然れど兎に角、人々その自己の罪罰を畏怖するに至りては、頓かてその宗教は、國家的たるを脫して、個人的たるに至りしを見る可きなり。

以上是れ實に、バビロニアの宗教に對する、吾人智識の概要なり、その詳細なるものに至りては今日到底之れを知る能はず、而も以上に於て、吾人はセム民族の宗教以前に於て、又セム民族の宗教以外に於て、バビロニアの宗教の、存在せしを知る、然れど彼のアッスール、又はベルの如き神が、決して彼の劣等なる、靈魂崇拜をして、痕をバビロニアの地に絕たしめず、埃及に於けるが如く、バビロニアに於ても、純乎たる精神的宗教の樹立は、到底之れを見るを得ざりき、バビロニアの宗教は、決して唯一神教たる能はざりし、バビロニアの王ナボニドス、亦一たび、メロダックを、諸神の首長として、神々の系統躰制を建設せんと試み、之れに由りて、一國の宗教に、平和を沽はんとせしも、遂に失敗に終はれり、蓋しバビロニアの宗教の崇拜は、各地方々々に於ける、群雄割據の有樣にして、到底多神教的偶像崇拜たるを免れず、されど從來、世人の想像せし如く、バビロニアの宗教は、必ずしも占星術なるのみに非ずして、靈魂崇拜より漸く進みて、國家及び個人の理想たる、神格の崇拜に到達するに至りしは、疑ふべからざる事實なり、されど一たびバビロニア。アッシリアの兩國が、波斯王の征服する所となるや、ベルの崇拜ナボの禮拜、亦再び興る可くも非ず、世界は最早やそれより一層高等なる宗教的意識に到達し、斯かるバビロニアの古宗教を、要せざるに至りしの時代を現出しをりしものとす。

第二章　埃及の宗教

埃及の開化は、その起原遼遠にして、優に支那古代文明を凌駕し、而して歐洲の開化は、又實に埃及の學問美術に負ふ所頗る大なり。然り而して、近世學問の進歩は、又埃及國に關する、諸般有益なる發見を致し來りたりと雖も、而かも埃及國人種の由來に關しては、杳として知る能はざるは、今も昔に異らざるものなり。埃及古代の人民は、或は亞非利加内地より移住し來りたりと謂ひ、或はセム民族の遠祖と、頗る近親の關係ありと謂ふの說、大に勢力を博し來り、學者往々言語上、之の事實を證明せんと企てたり。然れば太古埃及の一國民を成しゝは、幾何年の昔時にして、又それは如何にして、何人の手に由りて、完成せられしかは、現今尙ほ明瞭なる解答を、與へ得る能はざるものなり。埃及國は、既に紀元前四千年の昔時に於て、早く一國民の躰裁を成し、文物典章の美、頗る見る可きものありしと云ふに止まる特に埃及の宗敎に關する問題に至りては、頗る不明なるもの有りて存し、古代に於ける、埃及人の崇拜せる、神々の特質及び神々の相互の關係に至りては、到底今日之れを知るを得可からず、埃及の宗敎に關しては、學者間、その說の徑庭異同せるもの勝て算ふ可からざるなり。或は曰く、埃及の宗敎は、唯一神敎に淵源すと或は曰く、その宗敎は動

物崇拜に始まれりと、要するに埃及の宗敎は、吾人のそを知るを得るに至りたる時代は、その宗敎の頗る發達せし後世に在りて存し、而して同一宗敎にして、頗る相撞着せる分子を包含しをるは、又その一大特徴たらずんば非ず。然れば吾人は、到底埃及の宗敎に關して、之れを一宗敎として、全躰に互りて、統一ある說明を施す能はず、吾人は唯、その部分々々の研究を遂げ、僅にその間に存在する、相互關係を知るを以て、滿足せざる可からざるものとす。

埃及國は、古代より幾多の小地方に分かれ、各地方は、夫々その獨立を保持しをりしものなり、而して是等獨立の地方は、その數上下埃及を併はせて、四十の多きに上れり。然れど此上下埃及を併はせて、之れを統御する同一主權ありて存し、その王は之れをメナ又はメヂスと謂ひ、歷史上實際の存在者たりしなり。國王メナは、少くとも、紀元前三千二百年の太古に在りて存せしものとす。斯く埃及國は、國王統御の、同一主權の配下に從屬すと雖も、各地方は、常にその獨立を謀り、地方々々各々その特別の首長を戴き、軍隊を有し、租稅を徴集し、宗敎を保有し各地交替して、その盟主となり、彼の有名なる、ラムセス二世や、耶蘇聖典の創世紀に記せる、ファラオ王朝

の如きは、第十九王朝に屬せるものとす。

埃及の各王朝隆盛の跡は、今日その殘これる、遺物に徵して、之れを知るを得可し。即王宮の美麗、殿堂の莊嚴王廟の宏大なる、殆んど他にその類例を見ざる所のものにして、夙に文字の發明ありて、之れを用ゐをれり。現今埃及の畫文字發見は學界に貢献する所頗る大にして、今此文字の、歐洲人の手に讀まるゝに至りたるは、埃及の宗教を知るに、頗る恰好の手引草にして、是れに因りて、之を考ふるに、埃及人は、頗る保守的思想に富める人民たるを知る可し。例之は彼等が早く既に、金屬の使用を知りし後ちに於ても、尙石製の小刀を使用し、その遺跡は今日歷々として、之を木乃伊匣中に發見するを得可く、音文字即ち符號文字の發明ありし後に於ても、尙彼等は之れと共に、依然として、畫文字を用ゐ、特に宗教上の事項を記述する場合を以て然りとす、則ち宗教上の事項を記するに當りてや、彼等は必ず新古兩種の文字を使用しをりしや明かなりとす。

第一節　動物崇拜

彼の耶蘇紀元の前後に於ける、希臘羅馬の學者の記述せし所に由れば、埃及の宗教

は、當時一に動物崇拜より成立しをるものゝ如く、此動物崇拜の現象は、一に彼等の一驚を喫せし所なりしか如し。希臘の史家ヘーロドトスに從へば、鰐魚のシープス市に於ける、海馬のパプレミスに於ける、皆一に動物崇拜ならざるは無し、ルキアノス。アレキサンドリアのクレメント及びケルス等の謂ふ所を見るに、埃及人は莊嚴美麗の殿堂中に、猫猿等の動物を崇拜したるを知る可し、而してその崇拜さるゝ所の動物は、その崇拜熾んなる國に在りては、之れを殺傷することを嚴禁せられ、その肉を食するを許るさず犯すものは、縱令外國人が、その國禁を知らざりしの過に出づるも、尙之れが爲に死刑に處せらるゝものとす、而して甲地方の神聖視しをる動物は必しも他の地方に在りては之を崇拜しをらざりしが故に、その結果、兩地方互に相嫉視し、干戈の災を惹起せしこと、亦少からすとす、是れイスラエル人が、埃及に在る間は、動物の犧牲を奉りて、ヤーエーを祭祀する能はざりし所以なり。

埃及に於ける動物崇拜は、或る動物を以て、之れを神として、崇拜せしが爲めに、殿堂を設けて、祭祠し、而も之れを同類の他の動物は、一切その肉を食ひ、殺害を施すことあること無く、特別の保護を得つゝあるものなり。前既に一言せるが如く、埃及に

於ては、その崇拜せらるゝ所の動物は、地方々々に由りて異りたるも、埃及全國に至りて、一般にその崇拜の對象となりし動物あり、例へばメムフィスのアピス。ヘリオポリスのメネビス。メンデスの山羊に於けるが如き是れなり。勿論是等の動物と雖も、その最初に在りては、一地方にのみ限りて崇拜せられたる、特有の動物なりしならんも、その地方人民の、漸次勢力を埃及全國に及ぼし、全國の盟主となるに至りしより遂に盟主の崇拜せる神格たる、該動物は又互に全國民の崇拜する所となりしなり、その他犬猿鼠蛇蛙を初めとして、諸種の魚族亦崇拜の對象なれば、甲虫の崇拜亦燒んなり、喬木灌木も亦崇拜されしも、獨り奇なるは棕櫚樹の崇拜曾て之れなきと是れなり。

然れど茲に注意す可きは、以上陳述せる埃及の宗教は、頗る後世に於ける發達の景況を叙せしものにして、その太古遼遠の昔時に在りては、動物崇拜の旺んならざりしことは埃及國の僧侶國王の記錄中に、その記事の存せざりしを見ても明かなりとす、蓋し動物崇拜も太古より或は之れ有りしならんと雖も、僧侶王侯のそを重んぜざりしや疑ふ可からざるなり、此動物崇拜が既に太古より存せしことは、紀元前

三世紀の頃に出でたる、埃及の僧マネトが動物崇拜の既に太古の第二王朝時代に在りて存すと謂ひしに徵しても明かなりとす。

埃及の遺物に徵して之を考ふるに、太古埃及の宗教は亦實に動物崇拜と鮮からざる關係ありて存するを認めずんば非ず、則ち女神ハトールは牝牛の角を有し、男神セブ像亦鷲をその頭に戴けり、ホルスは鷹頭にしてバストは猫頭なり、オシリスは牛頭なり、クメム及びアモン又羊頭を有せり、その他フォイニックスを以て頭と爲すものあり、半人半獸に非ざる全身獸形の神躰も亦之れあるを見る、然るに第十二王朝以後に至りてはホルスを表はすに全身鷹形を以てせしものあり、要するに斯かる事實より類推しゆく時は、埃及太古の宗教は、動物崇拜なりしと疑ふ可からざるなり、唯後世特に埃及人のそを重んぜしは古代思想の復興と見るも可ならん。

埃及人は何が故に斯く動物を崇拜せしかとの疑問に關しては、諸說紛々頗るその種類に富めり、請ふ左に之れを列擧せん。

その第一に曰く、埃及人の動物を崇拜せしはインカ以前のペル國に於けるが如く各動物の有ゆる特種の顯著なる動物の特性が人類に勝さるものあるより此に之

れを神視し崇拜するに至りしものにして、犬の家を守る癒準の沖天益に疾飛する牝牛の乳を與へて人生に資せる、恰も慈母のその子を鞠養するが如く然かり、故に埃及人はそを神視神事するに至りしなりと。

その第二に曰く、之れに反して埃及人の各動物を崇拜するは各動物そのものを神視せしに非ずして、各動物が各自或神々を代表し居りしに由りてなり、例令狐はアヌビス神を代表し猫はベスト神を代表し鰐魚はセベク神を代表し居りしが故に、此にその諸神を拜するの意を以て或は狐或は猫或は鰐魚を崇拜せしなりと、然れど此說は埃及に於ける宗教の後代に現はれたる事實を說明するとせば或は可ならん、然れどこはその原始時代に於ける動物崇拜の事實を說明するに足らざるなり、何んとなれば宗教はその原始時代より早く既に斯かる齊整したる組織を有しをる可きものに非ればなり。

その第三に曰く埃及太古の諸王戰爭攻伐の際に當り、某動物を擇びて以てその軍旗の徵表と爲し或は各々分離せる各地方人心の一致團結を謀らんとの目的を以て各地方夫々一動物を擇びてそれに神事せんことを命じ以て地方の人心を一點

に集注せんとせしに由り、此に動物崇拜生ぜりと、或は曰く太古の神々は皆動物の形狀を以て地上に來降せり、是れ各動物の神事さるゝ所以なりと。

その第四に曰く、神は元來無形なるが故に有形のものゝ躰内に宿りて表現せざる可からず、然れど神にして若し人躰を假りて表はれんか人間は各自頗る相類似しをりて容易に區別し易からざるが故に、異同多き動物の形を假りて表現せり、是れ埃及に動物崇拜の行はれたる所以なりと。

之れを要するに、以上の諸說は未だ之れを以て埃及に於ける動物崇拜の起原を說明するに足る充分の學說なりと謂ふを得ず、蓋し彼の埃及僧侶の哲學的頭腦を有せる、彼の太古よりその國内に行はれゐたる動物崇拜をも、そを記號的に解釋せるに非ずんば到底之れを崇拜する能はざる程の智識の度に進み且つ斯くなしつゝありしならんも斯かる哲理的思想に富める僧侶が何を苦んで特更自ら新に動物崇拜なるものを創始せんや、さりとて又彼等が万有神教的立脚地よりして動物迄も神格としてそを崇拜するに至りしを說くの穩當ならざるや明かなり、何んとなれば萬有神教と動物崇拜とは思想上天地雲泥の相異あるものなればなり、要する

に動物崇拜が學識ある僧侶等の創始せし所に非ずして尚一層太古遼遠の昔時にその起原を有しをりしや明かなしとす。

然るに、現今に至り宗教を人類學の側より研究せる學者は、埃及の宗教もシュエナル、ヂオドロス等の古代埃及の宗教に付て學者の記する所を讀むに埃及宗教もインカ以前のペルの宗教の如く、又現今の亞米利加印度人の宗教の如くトテム崇拜なりしならんと云ひ、今此學説大にその勢力を得來るに至れり。

第一節　諸種神格の崇拜

埃及に於ては、以上の動物崇拜と共に天然崇拜の幷び行はるゝを見る、太陽は光明の神にして正善の神なり、然れど是れと同時に少くとも吾人の知る所にては吾人は太陽を初めとして、幾多の諸神は皆な動物の形相の下に崇拜せられつゝあるを見るものなり、ハトールの牝牛に於ける、ホルスの鷹隼に於ける、アヌビスの狼に於けるが如き是れなり、然れば斯かる動物崇拜は埃及宗教の退化なるか、曰く否な、果して然らば動物崇拜の如き劣等なる宗教よりして、天然崇拜の如き高等なる宗教は胚胎し來りたるか、曰く是れ又必しも然りと答ふる能はざるなり、蓋し余を以て

之れを見れば、埃及の宗教は或は動物崇拜より天然崇拜の來ると説き、或は天然崇拜より動物崇拜の來ると説かんよりは、寧ろ此兩者は個々別々にその發達の基原を有すと説くの穩當なるを認めずんばあらざるなり。

埃及の諸神はその神話を有すると頗る僅少にして、單にそが天然諸神にして活動あり生命あるの存在者なりと謂ふに止るものなりしが、その後埃及の古記錄の歐洲人の手に讀了するを得るに至りしよりその神話の數も大に增殖するに至れり、然れど埃及の神話は皆千篇一律の構造にしてそは皆な太陽神話なり、而してその諸神も希臘に於けるが如き順序次第ある神統を有せるものに非ず、全く個々孤立の有樣にして、唯同一太陽諸神も各地方々々に由りてその地方的特色を保有し居るに過ぎざるものとす。

天然諸神も動物諸神と同く、各地方々々に限りてその崇拜の對象を成し、一地方の神は他の地方に於ては特別に崇拜せられざるを常とす、セトはオキシリンクスの神にしてナイトはサイスの神なり、然れど一神以上の神々の同一地方にて崇拜せらるゝことあり、此場合にはその數三あり、然れと又時にその數の增加せるとあり

ラーの如きは啻に一地方に限られたる崇拜に非ずして、その崇拜は諸多の地方に及び、十四の地方に崇拜せられ、ラーは實にその神體十四の多きに及べり、換言すればラーは地方に由りて十四の異なれる形相を以て寫表せられたり、斯く一神が諸地方に於て崇拜せらるゝか如く數多の諸神相合して一神を成し、以て崇拜の一對象を成すとあるに至るものとす、要するに埃及の宗教は斯くその神々の數は增加せしも毫も一定の體系的神統を有するに至らざりき。

埃及の各地方々々の神殿には三神を祀るを常とす、その三神は夫婦の神にして他の一はその兒神なり、而して此兒神は更らにその母神と婚してその繼續者を擧げ、以て己れを續かしむるを常とす、蓋し女神は太陽を神化せしものに非す從てその性質不死なり、之れに反して男神は太陽の神化にして自ら自己を生み、而て自ら又その繼續者を生むものとす。

各地方の三神

地名	神名
シーブス	アメン、ムート、コンス
メムフィス	プター、セケット、イムホテップ
アビドス	オシリス、イシス、ホルス
オムボス	セベク、ハトル、コンス
エドフー	ハルハト、ハトール、ハルセムタ

埃及の宗教は、その至上の主だる神は原的卵子より生れ、諸神の一族はセブ及びヌートの兒子なり、セブは地にしてヌートは天なり、但し地神セブは男神にして天神ヌートは女神なりとす、諸神は埃及王家の遠祖にしてラーの治世は凡て正義と幸福と相一致したる埃及國の黃金時代なりと稱せらる、その他物理界人事界を說明する幾多の說話口碑ありて存し、一定の場所に於て神に關する一定の說話を談ずる時はその咒力に由りて奇特の功德顯はれ、或は害毒を消滅する效ありと考へられたり、此太古神政の黃金世界に尋いで來る所のものは、爭鬪の時代にして神も人も共に從來の神の政治に滿足せずして鬪諍是れ事として毫も寧日あると無し、斯かる神話は埃及古代の野蠻時代を抽出する反寫鏡なりとす、而して斯かる神話中

に表現せしものは動物に非ずして人間なり太陽諸神なりとす、換言すればそは毎日出沒上下する太陽の暗黑と戰へる神話に外かならざるものとす。

埃及の神々は王朝の變動と共に遷移しつゝあるものにして、此際前後神格の間には頗る强大なる爭鬪を釀生せるを見る、ヘリオポリスのラーは太古より埃及の主要なる神にしてチニス即ちアビドスのオシリスも亦その崇拜旺んなるものなり、然れどその最も盛大を致しゝは尙後世の發達なりとす、メムフィスのプターも太古熾んに崇拜せらるる所となり、之に尋いてアモンの崇拜又熾んなるに至れり。

太陽ラーはヘリオポリス即オンに住み、その初めは國主にして後ち又暗黑の蛇アペプを刺殺するの戰士となれり、ラーは毎日その虞淵に沈むや西天の女神はトールの慰むる所となり、而してホルスの仇する所となれり、ホルスとは有翼にして年少の太陽なりとす、ラーは天上の神たると同時に地下の神なりラーは二艘の小舟を有し、毎夜下界に航下すと傳へらる、此神話は後世オシリスの神話と相結合してラーのアムヅアト即ち下界行の神話となれり、人の靈魂亦ラーの導く所となりて下界に至りてラーに由りて賦與せられたる土地を耕作し毎夜ラーの地上より來

りて下界に下だれるを見るを喜ふと云へり。

オシリス又アビドスに於ける太陽の神にして、下界の神オシリスと混同せざるを要す、オシリスは埃及諸神中最も著明にしてその研究は頗る興味あるものなり、その神話はプルタルクの既に吾人に敎へし所なりとす、プルタルクの說く所に由れはオシリスはセブ、ヌートを以てその兩親と爲しその當初より妻にして又姉妹なるイシス及びその兄弟セトと共に生れたり、而かもセトは常にオシリスと鬪諍をのみ是れ勤め而してその兩者何れも勝敗あること無かりき、オシリスは自然界及び道德界に於ける善神にして、セトは暗黑沙漠南風疾病等の害惡を表はせるものとす、セトは勿論セム民族の宗敎より輸入せられたる神格に非ずして埃及固有の神格たるや勿論なり、唯セム族の埃及に入るに及びてその思想の特に自己の宗敎思想に適するの故を以てそを至上神として崇拜せしに止るのみ。

ホルスは幼少にしてその母神の腕に抱かれをるのホルスと、復仇者たるホルスと、その父の繼續者たるホルスとの三階段ありて存するを見る、而してホルスの神話に至りて光明と暗黑との二大原理は道德上の善惡の思想を胚胎するに至れり、プ

ターはメムフィスの神にして牡牛アピスはプターの再生なりと謂へり、而して後者は無形なる前者の下界的感覺的表號なりとす、プターとは造作者の義にして希臘人は之れをヘファイストスと同一視せり、後ちプターは太陽の神となれり、然れどプターはその當初に在りては、一切の生物を初めて成せる温熱の神なりしが如し、プターはラー及びオシリスと同しく下界の神なり、プターは死を裁判するを常とり又地上に於てもエルの主と呼ばれ正義の神なり、元來エルなる名讃は埃及國に特に必要なる疆域測定の義より來りしなり。

プターの見子にイムホテプあり、希臘人は之れを神醫と爲しアスクラピオスと同一視せり、女神セケトはプター、イムホテプと共にその三神を形成しバストの名稱の下にブバスチスの地に於て崇拜せらる。

以上は是れ埃及建國以來埃及の第六王朝に至る迄の主要なる神々にして、第十二王朝の時代に至ると、以上の諸神はその形を收め、シーブス等の諸地方の神々之に代りてその主權を掌握するに至れり、アモン(シーブスの神)、ケム(農業の神)、ムント(ヘルモンチスの神)の如きその主要なるものなり、アモンは自然力を變化せるものにしてラーと共に拜びて表現するを常とす。

以上は實に埃及の僧侶國王のその尊敬を表せし諸神なり、然り而して埃及人は天上光明の崇拜より漸く移りて一神教に向はんとせり、今その第十八王朝の當時即ち紀元前千五百九十年頃に埃及人が諸神に獻りし讃歌は實に此事實を確證せるものとす。

ホルスに獻る讃歌。

諸神は普遍の主を認む、……彼れホルスは己れの意志に從ひて世を治め天地は彼れに從ふ、過現未の三世に亘り內外の國人皆なその命を奉ず、太陽の循環より風や水や草や木や一に彼れの指揮に從へり、……人は皆な彼れの至善を讃し彼の惠は我が腹を覆ひ彼れの愛は我心を充たして大なり。

アモン、ラーに獻る讃歌。

汝(アモン、ラー)を恭敬す、万物創造者、法の主、諸神の父、動物を造りて食物を與へ穀物を生するの主、……一有りて二無きの主、……汝は諸神中唯一の王なり。

尙此外にナイル河を頌せる讃歌等諸神の讃歌あり、要之是等の讃歌の作者は實に一神敎の思想をその胸中に髣髴せしめ居たるや疑ふ可からざるなり。

ル、バーシ、ルヌーフ氏は尙埃及宗敎の一神的思想を明にせんが爲めに左の讃歌を引けり。

我(神)は天地の創造者なり、一切の神々にその靈を與へたるの神なり、我れの眼を開くや此に光あり、我れの眼を閉つるや此に暗黑は來れり、朝には我れケベラたり晝にはラーたり夜にはツムたり。

ルーシエ氏は埃及は耶蘇紀元に先つ五千年以前に於て唯一神敎たりしとを主張せしも、埃及の宗敎が唯一神敎なりとの說は到底成立するを得ず、蓋し以上の讃歌は何れも皆な主なる一神を說くと雖之れと同時にそは決して他の諸神を否定せしに非ればなり、然れば埃及の宗敎に於ける進步せる此方面は唯一神敎と云はんよりは、寧ろ單一神敎と稱するを適當なりとす、斯くして又埃及の宗敎學全然多神を排斥して一神のみ優秀なる位置を占むるに至らずして多神の間に幾多の調和は行はれ餘多の諸神は同一神の表現として考へられたり、換言すれば埃及の宗敎には折衷主義旺にして而して此諸神の折衷主義は頓かて凡神敎と化し去るに至れり、蓋し埃及に於ける諸神はその性質著るしく相類似し居りて、その中少しく優秀なる一神中に他の諸神を吸收し去るは易々たるの業のみ、而してシーブスの太陽神ラーは實に幾多他の諸神を自己中に吸收し去れり、ラーは自生自存永久不變にして其異れる諸形式は一切諸神の諸形式にして天地万有の諸形式に外ならず、斯くラーは諸有他の諸神を總括しそを自己中に藏むるの神格なりと雖他の諸神はその勢力を保有し從てラーは唯一全能の祖格たるに至らざりし、是れ埃及の宗敎が唯一神敎に非ずして凡神敎なりし所以なり、然れば埃及の宗敎思想が唯一神敎たりしは獨り學識ある僧侶間にのみ止りて民間の信仰に之れを見るを得ず、而かも僧侶の唯一神敎も永く彼の動物崇拜を排して民間信仰をして自己の唯一神敎に歸入せしむること能はざりき。

埃及の殿堂は信者會合の場所に非ずして神の住居たり、然れど又そは市場として使用せられ敵軍の攻圍を守るの城壁たりしものなり、神殿は庶民の參拜を許すと雖神殿中に入るを得るものは獨り僧侶あるのみ、神殿中にはアルク(日本の厨子の

如きもの)を安置し以て神體を表し之れに犧牲を獻る、堂の周圍に懸かれる諸神の
像の崇拜の對象に非ずして神をして任意其諸種の形象中にその神躰を托せしめ
んが爲にして彼の方尖石標の如きは太陽の憑りて住する所のものとす、神躰や神
を表せる動物の行列は時に莊嚴美麗に執行せらるゝあり、一地方擧りて此祭事に
狂奔す故に埃及の宗教は個人々々の私事に非ずして國家の公事なりとす、埃及は
實に神政々治の最も發達せるものなり、歴代の諸王は神の子孫にして帝王自らも
亦その祭祀の對象となり、人民の犧牲を享く、斯く神孫たるの帝王はその神に事ふ
ること頗る慎重にして時に自ら犧牲を神に獻ることあり、戰事にありては神はア
ルクに乘じて共に戰場に至るが故に、戰爭は又實に單に人事たるに止らずしてそ
は又神事なりとす、僧侶祭司は國家の公人にして大なる權能を有し彼等は公租を
免除せられ文學美術は彼等の掌握する所たり、果して然らば斯かる國家の拘束あ
る宗教が自由なる獨立の發達進歩を成遂し能はざりしや固よりその所、埃及人が
一方には斯かる形式的公の宗教を有すると同時に精神上私の宗教を併せ有し居
りしは又疑ふ可からず、埃及人の崇拜せる神格は主として善神なりしも、セトの如

き惡神無きに非ず、各地方の人民は各地方々々に於てその神聖なる動物を保護し
魔術を信じ疾病あれば必ず巫祝を聘して之れを拔ひ除けしむ、吉辰凶日を忌むこ
と大にして咒術の信仰又熾んなりき。

第三節　死に對する埃及人の觀念

世界の人類中埃及人程死の觀念の發達しをりしものは未だ嘗て是れあらざるな
り、故に生者は死者に對して充分慎重なる注意を表し、死者自らもまたその死後に就
て計畫設備する所又頗る大なりとす。

埃及人は死後その靈魂の存續を信し、その存續せる靈魂は再ひ生前の身躰中に歸
來するものなりと信ぜり、是れ埃及人の夙に死者の身躰の保存法に勞せし所以な
り、人類の婚嫁もその目的亦一に自己の子孫を止めて死後自己の身躰を保存せん
ことを委托せんが爲めの用意にして、人死すれば諸種の事物はその死躰と共に埋
藏せられ、以てその靈の用に供し、常に供物を墓前に獻りてその靈の來り饗くるを
待つ、靈魂存續は實に原始人類の一般に通有せる所の信抑なりと雖とも、埃及人は
此思想に基きそを擴張して死躰の木乃伊を造るに至りては、他國に絶えて見ざる

所の特種の發達なりと謂はさる可からず、彼等は死後靈魂がその生前に於ける諸作用を營爲し得るの目的を以て、死者の四肢五躰に毫未の缺損を與ふること無き樣之を保存し、死躰をして世界の終末に至る迄寸毫の變動なからしめんことを期しにき。

斯くして埃及人は人の死後永く存續する所のものを以て或は心なりと謂ひ或は靈なりと謂ひ、その說種々雜多なりと雖、要するに死後に至る迄存續する所のものはその死者の我躰以外の自我たるカーに外ならず、埃及人は彼死者のカーは食物を要し敎養を要すと爲しその敎養を全うせんが爲めに墓碑の四壁に書畫を掛け若くは木乃伊の匣棺中に書畫を納むるを常とす、加之死人も亦幾分か娛樂の具を要し社會の必要を感じ良政を要すと思推せられたり、故に王者の木乃伊は宏大なる三角塔中に藏められ、貴族の木乃伊は石を以て築かれたる壯大なる築造物マスタバ中に埋葬せらる、然れと貧民の木乃伊は瓦造の墓碑を造りて之を藏めらるゝを常とす。

以上說明せし埃及人の死後存續の思想は天躰崇拜の思想を著るしき密着なる關

係を有し、太陽の朝に光明の世界を出でゝ暮に暗黑の地に沒入するが如く、死人の靈が蒙れる運命も又實に之れより甚しき他の異ありと考ふるを得ず、彼等の靈は死後暗黑の下界に赴くと思推せられたり、故に木乃伊はナイル河西の地に持ち行きて此に之れを埋藏し、以て太陽の西沒に擬せり、偖てナイル河西の地は豺狼の出沒甚だしきが故に死躰は豺狼の神アヌビスの監督に一任し以て本神の座下に至らしめんとせり、下界には諸種の部分ありてその一方には諸種の魑魅罔兩住し而して他方には又無數なる幸福快樂の存するものありて充滿せられ、若し死人自ら生前の用意及びその友人の後に遺これるものゝ手段方法にして果して適當なるものを得ば、死者はその幸福快樂の恩波に沐浴するを得可く、此に死者は不老不死の壽を得て何等の恐るゝ所無くそが嘗て地上に於て享受せしが如き生活を反復するものと考へられたり。

死者が太陽神に導かれて下界に降り而してその保護の下に生活するものなりとは、埃及に於ける太古の信仰の一にして此信仰はラー、オシリスと共に相關聯して存せり、然るに死者とオシリスとは其思想相關聯し來りて死者と下界の王オシリ

スとは全然同一視せらるゝに至れり。

埃及文學の最も著名なる遺書は死人の書なるものにして、そは死人の靈か下界に旅びする狀況を記せし極めて古代より存立せし奇書なり、此書の記する所主として彼の靈魂が下界に至る時に用うる案内とその心得とを記せしものなり、加之その死人の書中に記する所の文字は奇特なる咒力を有して死人のそを稱する時は幾多の障礙を攘斥し去るの功德あるものなれば、人は生前よりその書中の文句を暗誦しをくを要す故に人死すれはその文句は或は墓壁の上に刻せられ或は木乃伊の棺の中に藏め納れるゝを常とす。

以上叙し來りたる所に由りて、之れを考ふる時は人類の死後の生活は全然此死人の書の敎ゆる咒力のみに由りて左右せらるゝものなるが如く見ゆると雖、又必ずしも然らず、固より死人の書の大部は斯かる傾向無きに非ずと雖、死者は單に咒文の力に由りて外部の障礙を排除するに止らず、又その精神の垢汚を洗滌して生前の罪を免除せらるゝを要するものなり、死人の書中第百二十五節に記する所を見るに一人の死者四十二人の判官の面前に立ちて生前に何等の罪惡をも犯しゝと

無かりしとを誓へり、曰く我は盜を爲しゝとなし、曰く我は謀反を企てしこと無し、曰く我は神を瀆しゝことなし、曰く我は神聖なる動物の皮を剝ぎしことなし、曰く我は奴隷を虐待せしことなし、曰く我は僞善を行ひしことなしと、此に至りて埃及の宗敎は漸次その外形的供犧主義より遂に內面的倫理道德の思想上に反省し來るに及べり、宗敎は今や單に國家の公事たるに止まらずして又私人の精神上に重大なる位置を占むるに至れり、斯くして人はその自己精神の淸き結果初めて能く極樂アアルの野に出入するを得可きものとす。

斯の如く埃及の宗敎は單に淺薄なる外形の儀禮主義のみに非すして、內部精神の道德的要素に回想し來りしと雖、而かも埃及の宗敎は遂に迷信の弊竇に陷るを防ぐこと能はざりき、爾來埃及の宗敎には魔術の勢力益その猖獗を致し來り、僧侶の跋扈は前代未だ聞さる所、而して僧侶の宗敎は漸々凡神的神秘的に流れ信仰の主眼は咒巫妖術の流行の外を出づる能はざるものとなり、人民の道德的意織は幸に退化せざりしも國民の元氣は著大なる銷沈を來たし、宗敎の改革進步の事得て期す可からざるに至れり、唯埃及の宗敎的美術はフォィニケ人に影響して間接に

希臘に及び、オシリスの神話の變形と埃及人が來世に關する思想とは、希臘人亦その基因を埃及に假り來りしことは吾人之れを想見するに難からず、羅馬人亦イシス及びセラピスの思想を受容せり、之れを要するに埃及の宗教は希臘羅馬人をしてその不可思議的神秘說に驚嘆せしめ、近世の學者をしてその嘗て一たび發達の希望を有せし宗教も、遂に迷信の暗霧中に退化し銷沈し去るを知らしむる好資料を提供するものならずんば非るなり。

第三章　支那の宗教

支那は夙に鎖國攘夷獨り中華を以て自ら居りて、その文明は支那固有の特種の發達開展を有し、之れを印度若くは西洋の文化に比較するも、決して劣るなきの程度に迄進捗せるものあるを見る。火藥及び印刷術の發明等は歐羅巴人に先ちて夙に支那人の手に由りて起され、此點に關して支那人は優に世界の文明國中の冠位に列するを得可きなり。然れどその地勢の上より云ふも、人民の性質保守固陋なる點より考ふるも排斥思想常に高く容易に外國思想の交通を許るさず。實に匈牙利人、芬蘭人等と同じく支那人種の祖を爲せる蒙古族は諸種の點に於て他の民

族と異ることの甚しき、人類學者中蒙古種を以て他の人種に全然別種の民族なりと主張するものあるに至る又故あるなり。支那人の特性として獨創的想像力を缺き、形面上の哲理に精しからず、唯實際方面の事務に長じ、勤勉にして模倣性に富めり。その言語が一綴語にして語尾の變化無きは以て抽象的哲理思想や詩的想像を自由に表識するの具となすに足らず。然れど斯かる言語を有せる支那人が理論想像の方面に缺如しをるは又敢て怪むに足らざるなり。

今日支那に行はれ、その國家の公許を得居れるものを儒教、道教及び佛教の三者と爲す。此中儒教はその最も重要なるものにして佛教は印度より輸入せられ、道教は原來一種の哲學なりしに、後ち退化して淺薄卑近なる仙術と化し去るに至れり。儒教は支那特有の宗教にして先王の古代より存せる國家的宗教なれば、支那人の特性は最も能く儒教に於て之を見ることを得可し。然り而て儒教も一たび長足の進歩を以て發達せしと雖、中古再び萎靡不振その國家人民と共に沈滯に歸し去るに至れり。

支那人種はその太古遼遠の昔時に在りて早く既に西方より當地に移住し來りし

の微證暗々裏に隱見するものあり。今日に至りては學者概して此說に一致するものゝ如し。而して當時その君臣の關係は恰も父子の如く然り。國王は諸般の藝術を發明して人民の生活に資せり。支那人は既に紀元前三千年の頃に於て文字を記するの術を知り居りしと雖、その歷史の信を措くに足る所のものは實に紀元前二千年頃に初まれるものなり。現今西洋學者の研究せし結果に由れば支那人はその文明の源をメソポタミアに獲得し來り、宗教思想亦メソポタミアの地に得たりと謂へり。バビロニアの宗教と支那の宗教とが少からず相肖似したることは人の能く知る所、然れどもその國史の初まる邊は既に業にその人民の性格、習慣、制度の確定するに至りたるの後ちにして既に組織ある宗教を有しをりしなり。人民はその君主を見ること恰も子の父に對するが如く、君主も亦國家施政の誥謨を規定して之れを人民に與へぬ。されど時世の推移と共に明君賢相次第に相ひ逝き、暴主汚吏その私慾を肆にするもの相踵ぐに至るや、此に放伐廢立の事漸く熾んならんとす。此に於てか耶蘇紀元前十二世紀に於て周起こり、之を須くして列國對峙、群雄割據となり、紀元前第六世紀には孔子の列國に歷遊して先王の道を誘

說せらるゝあり。紀元前第三世紀には周亡びて秦起り始皇帝僭して帝と稱し萬里の長城を築き武威赫々として四表に光被せり。始皇は周の封建制を打破せんと力めしも遂に成らず、紀元前二百六年漢起こるに及びて、始皇が咸陽の一炬に盡に歸せしめたる前聖往賢の聖典の殘簡零墨を收集し以て先王の道を復興するに至れり。然れば吾人の今日叙せんとする支那古代の宗教は實に資料を此諸聖典に採るものと謂はざる可からざるなり。

嚴密に之れを云へば支那人はその宗教に關する一つの聖典をも有せず、基督教に用ふる聖書の如きは吾人到底之れを支那人中に見出す能はざるなり。支那に所謂祭司僧とは則ち他國に所謂學者にして、その宗教上の書籍とは賢聖の古典に外かならず。その古典は則ち孔子の集むる所なり。されどそは特別に神の啓示に成りしと說くものに非ずしてそは唯古聖前賢の遺書として尊崇するに止る、而かもその尊崇せらるゝや毫も他國に於ける宗教上の聖典に劣らず。支那人が古聖前賢の遺書を重んずるは世界列國他に比類なき所、そは實に支那人の思想を支配する唯一の權なりとす。

抑々儒教の中心は之れを孔子に求めざる可からず。而して孔子は或は古聖前賢の遺訓をその儘祖述憲章せりと云ひ、或は多少改竄してその時世に適せざるものは之れを除却し去れりと說くものありと雖余を以て之れを見れば、縱令孔子が如何に古聖前賢の遺訓なりと雖も既に時世に適せざるに至りしものは之れを保存せんと努むるともそは自然の結果孔夫子の聖、尙ほ到底能くせざる所のものならずんばあらず。然れば孔子も恐く先王の遺訓中その意自ら道理なりと承認せる所のものゝみを特別に鼓吹稱道せしは亦疑ふ可からず。而して孔子の當時に極力主張し、而て後世の龜鑑に供せんとせし古聖前賢の道こそ、眞に支那古今の宗教思想の眞髓骨子とも見る可きものたるは又辯を待たざるなれ。

されど大體上より之れを云へば、孔子の教は批評的に非ずして主として先王の遺教を祖述憲章せしに在り、故に孔子の手に由りて支那の宗教は至大なる變動、特別の革新を蒙らざりき。而して今日にては孔子を祭祀するの風は支那人の間に行はるゝ所なりと雖。そは又孔子を祭祀するの故を以て支那の宗教に著大なる變化を來たすこと無かりき。儒教はその當初より早く既に劣等なる宗教の階段を。

脫して不合理的迷信の分子を有せず。そは又神話をも有せざりき。天と地との婚嫁てふ太古一般に通有なる神話は支那にも亦その痕跡を認め得ざるに非れども多神教的擬人的神格は既にその蹤を支那人の信仰界に隱くせり。宗教的儀式も不道德にして殘忍なるものなく、人身供犧の實證として見る可きもの唯一例あるのみ。要するに支那の宗教程常識に富みて奇怪荒誕ならざるもの未だ嘗て是れあらざりしなり。

然れど之れと同時にその宗教や、又極めて發達進步したるものと謂ふを得ず、その思想は尙ほ依然太古素朴の風を止め、神學の組織無く、聖典の據る可きなく、僧階の規定無く、神像の拜す可き無し。その深遠幽遠なる教理の重要なるものと頗る意味曖昧せるものありて學者之れを如何樣にも解釋することを得可し。要するに支那の宗教は一に外形の儀禮のみその宗教の全部を占め。教理の見る可きもの無く、宗教上の法規の組織なるものあると無く、一に古代の先例習慣に由りて神事を執行するのみ。是れ支那の宗教がその太古に淵源し而してその發達も亦夙に停止し去りて以て彼の神話や、教理や、儀禮や、宗教文學の發展を見るに至らざりし

を證明して餘りあるものとす。

支那の宗教に於ける崇拜の對象は之れを分ちて三種と爲すを得可し。曰く天。曰く鬼神。曰く祖靈是れなり。請ふ左に逐次之を説明せん。

第一、天は支那人の夙に崇拜せる所の唯一の神格なり。支那人が一切儀禮の一重を盡して祭る所のものなり。天とは蒼天の義にして日月高く懸り星辰の燦爛として無限の妙趣を人類に寄與し、晝間は常にその惠ある日光を送りて萬物を育し、二六時中常に吾人の周圍を離れずして我れを守るの神なり。そは怒りの神に非ずして平和の神なり。疾風怒號の天にも非ざれば陰雨濛漠の天にも非ざるなり。天そのものは生ける神なり、從ひて天上に神靈ありて住するが故に天を崇拜するに非ず。天即ち吾人の眼裏に映寫せる蒼天そのものを生命あるの神として崇拜せしなり。當時支那人は未だ物質と精神とを區別するを知らず、故にその祀事せる天はその儘既に一切を治め一切を知る神なりとす。

支那の古典を繙くときは早く既に蒼天を稱して帝又は上帝即ち主と稱せり。果して然らば支那人は天と主即ち上帝との兩者を同一視せしが、又は後者を以て天

上に住するの人格的神なりと考へしかは疑問なり。加特力教の僧侶の夙に支那に布教せるものは、支那人の上帝を以て全然その所謂天とは別種のものと爲し、そを以て基督教の神と同一視し、支那人は夙に唯一神教の思想に到達し居れりと主張せり。然れど支那人自らは決して斯かる意味に於て上帝なる語を用ゐず、その所謂上帝と天とは異字同義に用ゐをりしなり。孔子亦單に天と稱して上帝なる人格的命名を用ゐざりし。されどレッグ博士は惟へらく支那人の宗教は單純に蒼天崇拜に、初まりしと雖、そは有史以前の事にしてその歴史を有するに至りたる後は既に業に上帝の存在を信じ、明かに吾人の眼前に横はれる蒼天の外に別に一神の思想に到達しをれりと、然れど孔子は既にその國人の到達せる高等なる發達の宗教的形式を用ゐて上帝を説かず却て太古の蒼天の思想に止住しをりしや事實なり、されど支那人が多くの鬼神や祖靈を崇拜する如きはその上帝崇拜の一神教の退化なりと。

上帝は天地間一切萬物の間に遍在してそを支配し、自然界、道德界に亘りてその勢力及ばざる所なし。支那人は物理界と人事界との區別を全然混同し、此兩名の間

何等の區別あることなしと思惟せり。故に天言はず人をして言はしむと謂ひ烈風鳴り、豪雨降り、大旱、洪水、兇年、饑歲共に是れ施政者の國事に怠りしと冥々の裏に天の罰する所のものなりと解し、自然界の現象は直ちに人事界の事實を反照しるものにして物理界と道德界とは密接不離にして交互關係を有せる同一世界たるものなりと思惟せしなり。支那人は甚皆敎の如く神の天啓奇蹟攝理等の思想を有せず。而して之れに代ふるに人々皆な天命なるものありて既定的に一生を規定せられをる所以を信ぜり。是れ實に支那宗敎の特色なりとす。天を祭るの禮は一に君主の勤めにして是れ君主は實に天の命名その一身に懸かれるものあるに職由せずんば非ず。君主は天意に聽きてその國政を料理し、祭祀を行ふを職とす、此に到りて祭政の關係頗る相密接せり。甚しきに至りては人民若しその君主にして國政を料理するに天意を奉承せず、天命に背逆すと認むるや、直ちにそを弑逆放伐して天命を受けたりと認むる新君主を以て之れに代ふるに至るは人の能く知る所なりとす。

靈魂崇拜は又早くより支那人の宗敎的本務と爲りぬ。されど靈魂はその算無數

にして一定の形態を有せず、天地間森羅萬象皆なその靈魂を有す。日月星辰雲雨山川等一切の自然現象は皆その中に靈魂を有し萬人皆な之れを崇拜所願す。然れど土地山川の靈魂は獨り侯伯の祭る所にして庶人之れに與かるを得ず、而して天を拜するは一に天子の職と爲す。之れを要するに支那に於ては天と崇拜するに大自然崇拜に屬し、幾多の靈魂を崇拜するは所謂靈魂崇拜を爲せるものなり、而して一切の靈魂は皆善神の性質を有し惡神あること無し。

祖靈崇拜亦庶民一般の信仰にして支那人は靈魂の死後存續を信じ人一たび死するやその靈再び復歸し來らんとそを所願すること頗る切なり。然れど支那人は死後靈魂の人格的存在の思想を有せず、未來賞罰の信仰も甚だ明瞭ならず要するに支那人の宗敎には天國地獄の思想あることなし。人死すればその人は未來如何なる所へ赴くかはその問ふ所に非ずして亡靈は尙永く此世界に止りてその家族と共に幽冥の裏に生存するものなりと思惟せしなり。各家族皆な祖靈のその一家と共に存在しをるものを祭る。その儀式頗る羅馬人の宗敎に類し、一家の大事ある毎に必ず之れを祖先の靈に告げて以て之れを祭り夫婦相共にその祭祀に從

ふ。斯くの如く婦の夫を助くるは宗教上缺く可からざるものなりしが故に、太古に在りては結婚は頗る重要なる宗教上の義務を爲せり。

家に在りてその祖靈を祭るは頓がて家人の宗教的饗宴にして神と人と相共に宴會の歡樂を與にするものとす。祖靈崇拜は單に庶民の私事たるのみならずそは文帝王の公事にして、帝王はその皇祖皇宗の靈を拜するは又缺く可からざる帝王の宗教的義務なりとす。或は祖靈に向て犧牲を献じ、或は繁雜なる儀式を執行す。春夏秋冬の季節や、帝王の踐祚等に際しては必ずや繁文褥體を以て皇祖皇宗の靈に告げて、そを祀るを常とす。故に支那人の祖靈を崇拜するは恐怖の情に發するに非ずして感謝的行爲たるものとす。而して支那の宗教には厭世的禁慾主義の痕あること無くそは一に現世的なり。神に祈るは人の來世の希求を滿足せしめんが爲に非ずして現世の願望を要めんとするに出づ。その神々に献る所のものは主として動物性の犧牲より成り、又時に果物を用う。若し神に祈る事件の重大なるものある時は最も貴重なる供犧を奉じて神意を迎へ切にその幸慶に沐浴せんと努め、音樂を供して神意を樂ましむ、而かもそを職とする特別の祭司僧侶なる

もの嘗て存すること無く、何人も親らその祭に與かることを得。支那に於てはその宗教や、聖典あるなく、教理の定まれるものある無く、祭儀の式は一に口碑習慣に由りて之れを執行するのみなり。

孔子は嚮に既に一言せるが如く支那に於ける宗教の革新者に非ず。孔夫子は務めて宗教上の教理を談論するを避け、寧ろ支那古代の宗教の既に永く人民の風俗習慣を爲りし者に遵由して風教を作振せんと企てしものとす。然れば孔夫子の教へし所のものは主として現世の道德政事に在りて存し、一も來世の信仰を說かざりしや明かなり。而かも孔夫子は或は先王を祖述して遺書を輯めしが故に、不知不識の間、遂に支那に於ける宗教の教理にその基礎を與へ、後人孔子を目して支那宗教の開祖と稱するに至りしものとす。

諸宗教の開祖中獨り孔子のみはその傳記生涯の比較的に知る可きものあり。孔子は七十三歲にして歿し、その言行は當時親しく孔夫子の左右に侍べりし孔門の遺弟に由りて輯錄せられ、之れを論語と稱す。凡て世に宗教の開祖と稱せらるゝものゝ傳記は不可思議たる怪說を以てその生涯を粧飾せらるゝものなりと雖も、

獨り孔子のみは斯かる虛誕なる妄說、荒廢なる神秘的口碑の其の生涯を着色するものあることなし。唯時に或は夫子の聖德を理想化せるの痕跡無きに非ずと雖、是れとても極めて僅少にして吾人今日その遺書によりて孔子の人と爲りを想見するに恰もカントの性格を想起せずんば非ざるなり。

孔子は耶蘇紀元前五百五十一年に生れ、家名門を以て顯はる。然れど孔子は貧困の中に人となりて世に知られず。然れば後世夫子が博せし名譽は一に夫子聖德の結果ならずんば非ず。幼にして聰明、嬉戲の間常に俎豆を陳ね禮容を設く、年十三市めて詩書禮樂を修め、長じて先王の道を天下に行はんとするの志あり。然れど周末戰亂の世、夫子を容るゝの地なく、暫く蟄屈して吏の職を五斗米の間に奉ず。或は料量平かに、或は畜蕃息し、君臣父子兄弟夫婦長幼各その所を得て政見る可きものあり。四方皆之れに則り刑措いて用ゐられざるに至る。孔子常に天下に大志あり、東奔西走南船北馬荐りに列國の王侯に遊說して席爲めに暖かなるを得ざりき。斯く孔子が列國の王侯に遊說せし所のものは先王の道にして君主自ら身を以て民を率う可き所以を諄々として敎へしに外かならず。上流清まずんば下

流何ぞ獨り無からんとは孔子の極力主張せし所のものなり。孔子は君臣父子の大義名分を正し、斯くして人々各その本務を盡くすを得ば、刑罰を廢し、法政を止め、拱手して以て天下國家を平治せんと欲せしに在り。

孔子の說く所は極めて實際的にして思辨的の空理を讀せず秘的神力を說くを避けたり。その敎うる所は平正穩健の道德主義にしてその說く所のものを以て親ら之れを身に實踐し、その躬行する所を以て之れを人に說き敢て宗敎界たると道德界たるとを問はず、斬新を衒ひて奇矯の說を爲すを好まず、否なそは寧ろ孔子の極力反對せし所、孔子は怪力亂神を語らず宗敎道德一に先王の遺訓を祖述憲章せしに過ぎず。之を要するに孔子の主眼とする所は一に道德政治の實際的方面に在りて存せし穩當なる思想なり命分を明にして人々各思ふ所その位の宜しきに從ひ中庸を履行せんとするに在り。然れど孔子も亦時に物理界、人事界の關係を談じ、自然界の秩序法則は則ち人事界に表はれては道德的秩序となる所以を主張し、以て支那敎學の大本を樹立し、暗に支那後世の哲學宗敎上の基礎を組成し、多少哲理的に哲學思想を說きしもの無きに非ず。その學說は國家至上主義にして個

人は國家に對して何等の權利をも有せず徒らに堯舜三代の太古に黃金時代を認めて理想を過去に求め、以て現在を卑め尙古に耽りて獨創の見を斥け、社會をして一に沈滯不動に化石し去らしめんとせり。之れを要するに斯かる立脚地よりしたる孔夫子の宗敎は既に太古蒙昧の朴素的不合理的空想を除却せしの効ありしや明なりと雖、之れに代はる可き何等の宗敎的狂熱をも有せず、その宗敎は頗る單調一趣にして冷索無味、既に恐怖心を宗敎の根底と爲しゝ時代を脫却したるも、之れに代はるべき神の愛の宗敎を產出し來らず、その所謂になるものも、之れを基督の愛に比すれば、頗る冷靜平淡聊か物足らぬ心地し、此兩者冷熱の度は頗る相懸隔しをるを認めずんば非ず。孔子が祖靈崇拜を說き徒らにその理想を過去にのみ求めんとせしは支那文明の前途を壅塞せる一大障害を爲せしや覆ふ可からざるの事實なりとす。

孔子の歿するや、その靈廟は建設せられ、孔廟の釋奠は國家的儀式、重大なる典禮と爲れり。秦始皇の狂暴を以て儒者を坑にし孔子の遺書を火し儒敎をしてその跡を世に絕たしめんとしたるも遂にその功を奏する能はざりし。孔子の弟子を孟子(紀元前三七一——二八八)と爲す孔門の俊傑なり、大に孔子の敎へし所を布演し、儒敎の勢力を張りしと雖、その學說之れを孔子に比して一も創見ある無し。然れば吾人は今より儒敎と相併列して當時支那に行はれたる道敎に就いて一瞥を試むる所あらんとす。

道敎の祖之れを老子と爲す。老子は孔子より長ぜること五十歲なりき。然れど孔老二子は互に相見しことあり。孔子は老子を目して頗る尊敬の至情を表せりと云ふ。老子の哲學思想は之れを老子道德經に於て窺ふを得可し、老子も亦孔子と同く何等の哲學組織をも有せず且つそは宗敎を論ぜしに非ずして、主として道德政治を說きしものなり。然れど孔子に反して老子は大に哲理思想を論明し、その哲學上の根本義は直に之れを實際社會の政治道德の上に應用せんと試みしものなり。老子の所謂道とは何ぞや曰く理性なり。自然の規律、天則を指すに外からず。そは人格的神格に非ずして非人格的超人格的なり。天地萬有人獸蟲魚一切の事物に貫通するの大道なり。道は至大至高天地に先ちて存し萬物の始中終なり。道の大義に通じ道を體達實行する是れ之れを眞人と稱す。眞人は天地

の秘萬有の妙を達悟せる人にして毀譽の表に超出し是非の外に悠遊する所の者とす。故に老子の放縱自肆恍惚從容自在なる孔子の如く先王の遺敎なるが故にとてそを口實として之れを以て强ひて人民を拘束するを好まず、先王の敎權を以て唯一の金科玉條と爲し、强ひて禮樂儀禮の末に拘泥することを譏れり。老子は仁義の規矩を排し禮樂の繫文を退け、之れに由りて以て人民を無爲自然天眞の妙致に歸沒せしめ、道の本躰に融合體達せしめて自然の天則に妙契せしめんと期せしものなりとす。

老子の道德を談ずる所之れを孔夫子に比して頗る異色を放てるものあり。孔夫子が思想の平正にして穩健なる、德を以て德に報ひよと敎へしに反して、老の矯峭奇絕なる德を以て怨に報いよと敎へ、或は人に勝つ者は力有り、自ら勝つ者は强し、足るを知る者は富むと說き、或は天下の至柔は天下の至堅に馳騁す柔弱剛强に勝つと道破するが如き一々以て傾聽するに足る。吾人實に道德經を讀みて一とたび此に至れば未だ嘗て一種無限の妙趣を感ぜずんば非るなり。之れを要するに、老子の敎は寧ろ之れを宗敎と謂はんよりは哲學にして而して後世の所謂道敎なるものは老子の根本思想に依據しをるものに非ずして寧ろその瑣末の點を捕へて立ちしものなり。換言すれば後世に宗敎として表現するに至りたる道敎は寧ろ老子の思想を退化し若くはそを濫用せしものと謂はざる可からざるなり。その感應篇なる道書の如きは能く此間の消息を傳へたるものなり。道敎は老子の後五百年にして興る。一は儒敎に對抗して儒の勢力を挫かんが爲めに始皇の大に老を鼓吹したると、一は老子の哲學思想を民間の宗敎ならしめんとして起りたる新運動たるに外かならず。故に道敎なるものは最早や哲學に非ずして仙術即ち一種の魔術に外かならざりし故なり。此に於てか道敎の徒所謂道士なるものはその敎ふる所の道の本義に從て行動云爲すれば不死を得可しと爲し、蓬萊山に不死の藥草を得んとて遠く南溟に航せるあり(紀元前二百二十年秦の世)耶蘇紀元の初世期に於ては道士荐りに仙丹なるものを製して之れを不老不死の仙藥なりと稱して大に迷信を世に流布し、同年佛敎の支那に入るに及びては道敎は更らに佛敎に摸して寺院儀式を製作し以て一宗敎の形を成すに至れり。

斯の如く儒敎道敎共に支那人の宗敎的意識を滿足するに十分なるものなゝ一は

單に政治道德の敎にして、他は不可思議なる魔法仙術に外かならずとせば佛敎の東漸して支那に傳來するに至りしは決して偶然に非りしを知る可きなり。佛敎は印度に在りては無神論にその端を發しその敎主の滅後漸く崇拜の對象を得て宗敎的躰裁次第に發達し來りしが、支那に入るに當りてや釋迦の道德主義たる慈悲は此に人格化せられて女神阿彌陀となれり。或は曰く阿彌陀は波斯より支那に輸入せられたるものゝ如し、波斯にて之れをアナヒタと稱し水の女神なりとす。既に如來阿彌陀の思想あり、淨土の思想の生じ來れる豈に又偶然ならんや、從て又如來淨土の思想は明かに支那の民間宗敎と爲るを得可きものにして而かも支那思想中には未だ嘗て之れ有らざりし所のものとす。

以上論明せるが如く支那には儒道佛の三敎相併存せるものあるを見よ。而かもその人民は此三種の宗敎に思想上何等の撞着も無く歸依しをるは實に他國に比類無き人交史上の一現象にして眞に一奇と稱すべきなり。

第四章　古代日耳曼族の宗敎

太古日耳曼族の宗敎はその淵源遠く中部歐羅巴の森林中に在りて存せるや又疑

ふ可からず。彼の人跡稀れに至るの深林や、彼れ等古代日耳曼民族が神の來り格るの聖地として崇拜せし所、或は動物の犧牲を奉り、或は人身を供犧と爲し、祭司ありて神を戰陣に代表して賞罰を掌どり、神託を以て州事を所理す、又僧侶は神託の來り格れるを占ふに、白馬の嗜嚬を以てす。日耳曼民族は婦人を神聖な者のとして之れを尊崇し、中には妻をも神聖なりとして、之れを祟拜するの習慣を有せり。羅馬の大將タキツスの吾人に敎ゆる所に由れば、紀元前第一世紀の頃に於て、日耳曼民族の宗敎は未だ何等の一定せる系統組織をも有せず、神々の間に在りても未だ一定の上下長幼の次序在りて生せるを見ず、祭司の職階又確定せる者あると無く宗敎の儀禮亦一定の形式ありて存せざりしなり。然れど若し太古日耳曼族の宗敎の何にものたるやを知らんとせば、當時日耳曼族の住せる各地の村落に於て行はれ居たる、宗敎上の祭儀や日碑に徵して之れを考究せざる可からず、是れ蓋し古代日耳曼族の宗敎の眞相を表明しをるものなればなり。則ち今彼等の宗敎的祭儀を考ふるに彼等は犧牲を供して井水を祀り、天仙にその幸福を與へんとを祈り。殆んど吾人の記憶にさへ殘り乘ねたる太古の習俗と共に存し、眞にその人あ

りしやも今日よりは殆んど確知し能はずして、獨りその村落の口碑にのみ傳誦せられたる古英雄を祭りては、宗教的感情に擊動せられ、當時既に存しをれる古代勇者の傳說や天仙の說話に、その宗教心を鼓舞せられ又そを滿足しをれり、之れを要するに古代日耳曼民族の宗教は、上は、太陽太陰より、風の號ぶ獸の吼ゆる天仙や矮人や魔使や、一に皆な是れ彼等の信界を形成せる宗教的要素ならざるは無かりしなり。

然るに南部日耳曼に於ては、基督教の輸入と共に、夙に其日耳曼族の古代宗教の終を告げしが、日耳曼族の古代宗教は尙歐洲北部にその生存を持續せり、則ちそは獨逸の邊冦と共に英國に輸入し、紀元後七世紀の頃迄英國に存續しをりしが、その後古代のスカンヂナヰア人の英國を犯しゝ時、日耳曼族の古代信仰は、一層北方風に化したものゝ、英國に輸入さるゝに至れり、而て此の日耳曼族の古代信仰を英國に輸入せしスカンヂナヰア人は、その後トルヤオヂンの神々を捨てゝ基督教に歸依するに至りぬ、然れどその後ち日耳曼族の古代信仰は英國に於てはその跡を絕ちしと雖も、紀元第八世紀の頃尙フリシアのヘリゴランド島に於て、植物魚族の保護

神たるフルダを崇拜し、或はオヂン又はバルデルと同一視せるフオセテ又はフオルセテなる神格を祭れり、彼等は此等の神を拜するが爲めに、或は森林の中に祀殿を設け、或は人身供犧を獻れり。

日耳曼族の古代信仰はアイスランドに於てその繁榮の至極に達せり、その人民は內外に向ひて戰爭攻伐を是れ事とし、社會は父長制度を以て成り、獨り習慣法のみ存して未だ成文律を見るに至らざりき。此時に當り、アイスランドの宗教は、他のアールヤ族の宗教と同く、祖靈崇拜にして、人死すればその住地の近傍に於ける圓丘又は洞穴中に埋葬し、此に祭壇を設けて犧牲を獻り、地上犧牲の生血を淋漓たらしめ、之れに由りてその供犧の死者をして以て飢餓を醫せしむるを得可しと爲せり。此死者を葬れる圓丘や又頓がてその聖地と變じ、死せる祖先の靈能く生ける子孫に幸す可しと信ぜり。之れに反して惡人の死靈は又惡靈邪鬼となりて、永く善良なる人民に災するものと考へられたり。

死者の靈は永くその埋葬せられたるの地に止るとの信仰と共に彼等は又その靈魂の幽冥の他界に赴く可きことをも信ぜり。ホメロス既に此兩信仰を有せり。ア

イスランドに於てもその死者を埋葬するの禮は、主としてその死者の靈が死後は他界に赴く可しとの信仰上に成りしものにして、彼等死者が死後未來世の永き旅路に向ひて出發するものなりとの想像は、その全力を祖道に盡して死者を慰めんとするに至れり。故に人死すれば死人の兩足に靴を穿たしめ、之れを地獄の靴と名け、乘馬從僕鷹犬を死者と共に火葬して、以て死者に贈り、時にその妻自ら身を殺してその夫に殉すると屢之れあり。

彼等は又井水や瀑布や樹林や巖石をも崇拜せり、天や地や雷霆や亦その崇拜する所となれり、然れど此外人民一般の祭祀たる公の儀式あり、社殿は集會を開き犧牲を獻るの地にして、その神卓上に血を盛れるの器と小箸とを以て之れに備ふ、蓋し希に用うるものとす、金製の指環亦その卓上に横はる、是れ人民の誓盟を爲すの時、若くは祭祀の集會の席に於て佩用する所のものとす。

祭祀の職は主として神に犧牲を獻るに在り、祭りの酒は第一チーダン神に獻り、之れに繼いで餘他の神々より死者の靈に及ぶ。供犧は主として秋收戰勝等の大事ありしときにのみ神前に供ふるものにして、特に人身供犧の如きは、彼の國家社會

の安危の由りて懸かゝれるの際に神を供養する所のものとす。特に朋友の相互にその義を結ぶや、二人の朋友は各その血を地上に流がし、二人の血液を混同し、以て一人づゝ徒歩してその上を渉るを以てその式と爲す。然れどその後ち基督教の彼地に輸入せらるゝと共に、斯かる野蠻殘忍の宗教的儀禮はその痕を收むるに至れり。

スカンヂナヰアの神話はエッダに至りてその發達の頂點に達せり、然ればエッダの思想はスカンヂナヰアの最古の宗教に非ずして、その後世に發達せしもの、そが基督教の影響も少なからざりしとは、學者の夙に承認する所なり、エッダは韻文及び散文の部分あり、韻文のものは散文より古きものなりと云ふ。

エッダの思想は希臘のホメロスと頗る相酷似しをるものにして、ホメロスに於て見るが如く、諸神は各一家族を爲し、諸神は時に相集りて會議を開き、諸神は神たると同時に愛憎好惡等の人間的感情を有し、恰も人間中の勇者たるの觀あり。此神々をアエシルと云ふ、アエシルのスカンヂナヰアの神たるに至る以前に於ては、巨怪の群ありて神權を掌握し、地球は之等巨怪の首長の躰より成れりと傳ふ、然るに

之等巨怪は遂にアエシルの爲めに滅ぼさるゝ所となれり、而かも之等巨怪の靈魂は永く不變にして時々アエシルに冠するものなりと信ぜられたり。

スカンヂナヰアに於ける神話は、更らに又他の方面より世界の起原を説明せり。曰く世界開闢の初めに當りて、火氣と水氣とあり、此中間をギンヌンガと爲す。ギンヌンガの北邊は酉寒にして、その南邊は恒熱なり。今此寒氣と熱氣と相寄り相合して此に生物を生ぜりと。又人間の生じ來れる由來を説明して、人は二個の樹木より生し、晝夜の兩者より生れ、日月の兩躰より生れたりと謂ふ。又世界を大分して三部となし、之れをアエシル神の樂園アスガルドと人類の世界たるミドガルドとミドガルド以外の世界即ウィトガルドと爲せり。アスガルドはオヂン神の住する所にして、オヂンの玉座をフリズクヤルフと云ふ。オヂンは此高御座より、天地に照臨せるものなり。然るにウィトガルドは普通ユッンハイムと呼ばれ、巨怪の住する所にして、此世界の極端に位し、酉寒氷結の僻地なり。神の世界と人間界との通路に一大天橋あり、之れをビフレストと云ふ、即ち此橋なりとす。

諸神は所々にその會合を催す。然れど日耳曼族の神々は又その民族の習慣に從

ひてその集會を榛の樹の下に開くを常とす。斯く神々のその下に集會を開かるゝ榛樹をイグドラシルと呼ぶ、イグドラシルの大さは又實に譬ふるに物無く、その枝葉は天を覆ひ、その根底は一切世界に瀰漫せり。イグドラシル樹の下に泉ありミミルと云ふ、智識の源泉にしてオヂンは日に此泉に飲めり。ミミルの側にノルスなる運命の女神あり、人間の生命を支配し行爲の善惡曲直を判するを掌どる。

ミミルに過現未の三姉妹あり、之れをウルド。エッダンヂ。スクルドと云ふ。此の三姉妹はイグドラシルの根蔕に培ひ之れに灌漑し、以てその發育生長を助く、蓋しイグドラシルは不斷その根を嚙殺するの蛇ありてその根下に棲息すればなり、要するにイグドラシルの神話は日耳曼族の間に於ける樹木崇拜より來たりしものとす。

吾人はエッダの神話に至りて、日耳曼族の太古の神々は、その諸神間に新秩序を得來り、大にその成形を得たるを知る。オヂンは今や優等なる戰勝民族の崇拜する所の神と爲れり、學者或はオヂンを以て人民の化育に努め、世の文化を擴むるを以て、その務とせる英雄の神化せられたるものなりと謂ふものあるも、オヂン即チー

ダンは實に又日耳曼族の間に於ける太古の神にして、嵐の神なり、然れどオヂンは又深く人類に恩惠を與ふるの神にして、エッダに於てはオヂンは北方武勇の民を保護する戰爭の神なり、故に勇者の一たび陣歿するや直ちにオヂンの手に由りて救はれ、ヴルハルラ即ちヴルヘルに移され、その戰創は直ちに癒され、無上の天食は負傷勇士の口腹を樂ますと云ふ、然れどオヂンは元來日耳曼族の野蠻草味の世に初めて想起せられたるの神格なるが故に、時々その思想の下劣なる痕跡を呈露し往々自己の目的を達せんが爲めには動物にその身を變するとあるに至る、然れど後代に進歩したる思想に於ては、オヂンは一切事物の父なり、天地萬物の主宰なり、人間に不死の靈を與へたるの神なり、此世に於てその行爲の正しかりし者は死後オヂンと共にヂンゴルフ即ちヴルハルラに至り住し、之れに反して邪惡なる人は下界の女神ヘラの支配せるヘルに墮落するに至るものとす。

次ぎトール即ちドナールは雷霆の神にして、二頭の山羊を以て引かれたる車に駕し、手にムエルニルなる鐵槌を携へ、胴腹に力帶を纏ひ、その鐵槌を振ふの腕は双手ことを以て覆ふ、トールの敵とする所のものは彼の巨怪の一群是れなり、斯かる勇

猛なるトールも時に或は彼の巨怪の奇計に敗北するとありと云ふ、然れどトールは又一方に於ては農業畊作の保護神にして結婚をも掌どる、斯くトールは雷霆の神なるが故に、自然嵐の神たるオヂンと混淆するに至れり。

エッダのチールはオヂンの男兒にしてチヴ又はチウなり、その語源は希臘のツオイス即拉丁のユピテルと同一なり。

ロキ及びバルヅルの二神は或はオヂンの男兒なりと謂ひ、或はロキはオヂンの兄弟なりと傳ふ、ロキは智略に長じ時に詭計詐謀を逞らすの神なり。基督教のサタンの如く、後ち全く惡魔となり遂に天國を追はれたり。然るにバルヅルは希臘のアポルローンと同く光明の神にして又正義の神なり、ハイムダル亦光明の神にしてアエシルの護衛神たり、虹橋ビフレストの側に立ち、眠ると稀れにして、その明は晝たると夜たるとを問はず、百万里外に及び、その耳は如何なる隱微の間と雖も、亦之れを聽かざる無し、ブラギ亦詩歌雄辯の神を以て知らる。

フリッガはオヂンの妻にして、性嚴肅その智識の殊勝なる議り知る可からず、之點に於ては男神と雖も亦一籌を致さゝる可からず、フリッガは結婚の神にして、子無

き婦人は祈りて以てその兒子を得可し、然れどエッダに於ける女神は、之れを男神に比すれば、極めて不切要の地位に在るものとす。

善神バルヅルは惡神の爲めに殺されたり、神々は奈落の底よりバルヅルを再び回復せんとを努めたり、而かも惡神の爲めに妨げられて果さず。バルヅルの死と共に神の支配せる世界はその終りを告げたり。蓋し神も亦罪惡を以て瀆されたればなり。時にラグナレクなる黄昏の神は來れり、宇宙は一圓火を以て燬かれたり、宇宙は一變せり、他の神の一族は來りて再造革新せられたるの世界を支配せり。蓋し此思想や日耳曼族の宗教をして漸くその多神教より離れて唯一神教に向はしめたるものなり。抑々善神バルヅルの死は基督教思想たる、罪惡の末日審判、善神義死の如き思想を日耳曼族の宗教中に輸入し來りて、遂に基督教の唯一神教を以て、その古代日耳曼族の多神教に代はらしむるの豫程を成せり。然れば日耳曼族の宗教は、希臘の古代宗教が、その多神教よりツォイスの一神に飯し來りて、遂に古代哲學者の唯一神教を胚胎せしと、同一の道途を辿りて、オヂンが一切萬物の父神なりとの思想を擴充し來りて、此邊よりその古代の多神教を脱化して、唯一神教

に推移せしめたるものに非ずして、バルヅルの義死と共、二種濁特の悲劇的進程の下に、唯一神教に發展し去りたるものと謂ふ可きなり。

第五章　希臘の宗教

太古希臘の宗教は、純乎たるアールヤ人種の宗教たる特色を具有し、自然崇拜と祖靈崇拜とより成り、離魂の游行するあり、諸種の神々の出現するあり。山河草木日月星辰一に皆なその靈的活動を有せざる無し。希臘の全國民を擧げてツォイス神を信じ、ツォイスを以て天地の主と仰ぎ、雨露の惠者と讃し、地上に豐饒を播くの神と崇め、神人の父として之れを尊べり、斯くツォイスは希臘人全般に亘るの神格なりと雖も、而かも又此外各家族或は各地方々々に特有なる神格の崇拜せらるゝものあり、ツォイスの如きもその地方々々に由りて特別の名稱の下に呼ばれをるものとす。家内を護る女神ヘスチアは逝ける祖靈の崇拜と共に各社會に崇拜せられ、ツォイスと共にアポルローン。ヘーラクレース亦天の神なり、アルテミスは臘者の女神なり、アフロヂテーは靜穩なる自然界の神にして亦愛の神なり、ポサイドーンは海神にして、アレースは戰神なりとす。更らに進みて希臘人の自然崇拜

は、泉淵にニユムフエーを認め、森林にドリアデースを想像し、花咲きにほふ春と共に、一旦嚴冬肅殺の中に昏眠し去りたる諸神の生命は、活潑々の生氣を復び呼び來るものなりと信ぜり。

ホメーロスの宗教に所謂諸神は、皆な人間的性格を具備し、而かも超人間的能力と神德とを有せり、然れど又之等の神々は同時に人間の有する弱點をも併はせ有せり。之等の神々はその躰力や人間以上に位し、その形や人間に勝さり、その聲や大に、その眼力や敏とく、自己の目的を達せんが爲めには、種々に自己の形狀をも變化し得可く、空中を飛行すると鳥よりも疾く、時に或は全くその形躰を藏くして、人目に觸れざるとを得るものなり。然れど神は人と戰ふに當り克く容易に己れを傷くるとあり、食物を缺きては神命も覺束なきとあり、神自らと雖も自己の命運を豫知する能はず、神酒、神食に不死の命を得、その脉中には神血の流通するを見る、故に神と人間との差異は、その不死の一點に在りて存するものとす、然るに又人間にして往々不死を得て神の位置に到達するとを得るものあり、ホメーロス以前に在りては常に神と人とは密接なる親交を有し、從て神又人事にたづさはることゝ屢々な

りき。

ホメーロスの思想に於ても、吾人は現今に見るが如き神の一族を得る以前に在りては、尙ほ一層草昧野蠻の神ありて世界を支配せしとの思想を想見するに難からず、則ちその劣等なる蠻神は、優等なるツオイス一統の神々の爲めに征服せられたりとの信仰ありて存するを見る。こは吾人實に印度及びアイスランドに於ても亦等しく之れを見る所のものとす。則ちツオイスの父はクロノスにして、クロノスと共に巨怪なる蠻神ありしが、巨怪はツオイスの爲めに下界の最極タルタロスに追ひ去られたり、而て世界はクロノスの三子ツオイス。ポサイドン。ハデースに分與せられ、ツオイスは天とオリユムポス山とを領し、ポサイドンは海を治め、ハデースは下界に主たるに至れり。

ツオイスはオリユムポス山上に在りて諸神を督し、此に神々相集りて共に政を議し、饗宴を共にし、その樣毫も人間に異なると無し、彼等は人間的動機の下に活動し、愛情に打たれ復仇の念强く嫉妬忿恚の情火はその胸中を擾だせり、彼れ等の動作云爲は一々人間的希求慾望に由りて支配せられ、神々の中その强者は弱者をオリ

ユムポス山下に放逐するとあり。要するに之等の諸神は皆な劣等なる神格より漸々進化發達したるものなりと雖も、ホメーロスの文筆に由りて諸神の道德的側面の著るしく秀越し來れるを見る。一切神人の父祖たるッオィスは正義と慈惠の神にして、一切智者なり、創めて社會上の秩序を治め、弱者の守護に力む、ヘーラは品格高尚にして優美駢び無きの女神なり、アポルローンはその父神ッオィスの命に聽順してそを實行するの孝子なり、アテーナーは戰爭を掌どるの女神なり、アフロヂテーは愛の神なり、アレースは勇敢なる戰神にして、ヘーファイストスは跛足の醜男鍛工なり、ヘルメースは神々の使者を以てその職となし、ヘーベーは美少婦なり、ガニユメーデースはその初め人界に生れしも、その容貌の優秀なるの故を以て神が天上界に連れ行きし美少年なり、アフロヂテーを扈從にするものは三美神にして、九文藝女神はアポルローンに伴ふ、その他山河川流島嶼洞窟又等しく之れに隨從せる諸神の住所なりとす。

ホメーロスの詩眼に映ぜし諸神にして果して斯くの如き性格なりとせば、斯かる宗教に於ける神人の關係は如何なるものなりしか。曰く禮拜の神は極はめて簡古純朴にして一定せる祭司の職ありてそを獨占するに非ず、祭司以外國王たり一家の長たる者も亦能く禮拜所禱を執行するを得可きなり、供犧の式亦至る所に行はる。ホメーロスの詩篇イリアスに於ては偶像崇拜なるものあると無く、神は直接に人間の眼前に來格せるものとす。供犧の式は畢竟一個の饗宴にして祭者神と共にその祭肉を伴にするものなり。故に犧牲を獻るは新事業の企圖せられ、又は尊嚴なる盟約を爲すの際に行はるゝものとす、その祈禱の如きも極めて簡古純朴なり。

希臘には元來善惡の兩神ありて存せざるが故に、善惡禍福共に同一神格より降り來るものにして、ホメーロスは苟も一事業を成果せんとするには、必ずや神の冥加庇護を要すと考へたり、故に人は又神々の氣色を損せざる樣努めざる可からず、又は神の怨怒に觸れざる樣中庸を確守せざる可からず。然れど人には、如何に諸神の勢力大と雖も到底動かす可からざる宿命定運なるものありて存し、此宿命定運の神をユリンニユエスと爲す、然れど普通崇拜されをる所の神々は此職に與からず、啻に斯かる神々と、人世に嚴行せる道德秩序とは相異なれるものあるのみなら

ず、神々自らに在りても道德法に背ける行爲あると屢なりき、勿論ホメーロスの詩篇オヂッセーに於ては、ッオィスは人世攝理の神として觀ぜざられたるが故に、既に唯一神敎の萌芽は早く此に兆ざせり。然れどホメーロスの詩中に現はれたる神々は外界の自然現象の崇拜より來りし神格にして、內界の道德律の發動に基きて生起せられたる神格に非ざるなり、蓋しホメーロスの詩中に現はれたる神々の如く、その勢力や有限にして氣隨氣儘に、諸有人間の弱點を具有しをるものたる以上は、到底這般宗敎を以てしては、人世の道義上に著大なる影響感化を及ぼすと能はざるものとす。ホメーロスの宗敎は人心の青年時代を表はせるものにして、その精神や獨り外界詔光の熙々たるを樂みて餘念なきものなれば、枯柳敗荷沈痛なる秋の悲哀を感ずるの內的考想に至りては、蓋し未だしと謂はざる可からざるなり。當時の希臘人は自然力を人化し神視して之れを崇拜せり、然れど自然力以上の勢力の人心そのものゝ中に潛在せるを發揮して、そを崇拜するの意識に到達しをらざりしなり。

ホメーロスの詩想に於ては、死後の狀態に關する信仰も亦必ずしも一樣なりと謂

ふを得ず。彼の壯大華麗なる葬禮の儀式を以て勇者の死を送るが如きものあるを以て之れを見れば、人間の死後存續を信じ、彼等は死後尙生前に於けるか如く諸種の物品を要するものなりと思惟しをりしが如し。然れど死は畢竟生に對しては勢力少く、恰も形と影、像と實躰との關係の如きものなり、地獄は此世に於て神命に違背せし罪人の赴く所にして、タンタロス。イキシオンの如き此適例なり、之れに反して勇士の亡靈は神力に由りて西方エリュシオンの樂土に至り、雨雪の凍餒を離れて安樂の生涯を享受し得るものと考へられたり。

然るに紀元前八世紀の後半に於てヘーシオドスなる詩人あり、ホメーロスと相ひ對峙してホメーロスの學說以外別に一機軸を出し、以て諸神の生成し來たれる所以を敎へ、同時に世界開闢の理を明にし、延て神人の關係を論ぜり、之れを神統記と稱す、又以てホメーロスの詩篇と相並びて、當時希臘人の信念界の狀況を吾人に敎ふるの好材料なりとす。之れを要するにホメーロスの優麗なる華想の下に表はれたる諸神は、從來何等の統一も無く單に一地方々々々々に限ぎりて崇拜せられをりし諸神より脫化し來りてホメーロスの詩篇の愛讀せらるゝと共に漸く國民一

般の崇拜する所と爲り、以て國民的宗教の基を成せり、而て之れと共に宗教的美術は著るしく旺盛するに至れり。

ホメーロスの時代より各神の最高位に在るツオイスは今や益々その至上至極の神格たるの實を表はし、恰も基督教に所謂天父の位置を占むるに至れり。ツオイスは清くして愛なり善なり萬物の主宰者なり世界の救濟者なり一切の啓示は皆なツオイスより來るものなり、アポルローンは光明の神にして、その父神ツオイスの意を人間に傳達するの預言者なり、デルフォイの神託の如き是れなり、故にデルフォイは遂に希臘人に由りて世界の中心點なりと考へらるゝに至り。アポルローンは至純至誠を愛し眞善美の保護神なるが故に、從ひて斯かる神格の崇拜は希臘宗教の最高等の形式にして、又以てその神託が當時の社會人を風化せし勢力の偉大なりしを想見し得可きなり。

然るに紀元前第六世紀に至り、希臘人の思想界は頓みに一變して、その新思想は勃として生起し來れるを見る。蓋し此時に當りてや希臘人は夙に外國文明の影響に由りてその智識の資料を收藏し、加ふるに國家統一の基礎成り、商工業進歩の

結果は、國家も個人も共にその殷富を致し、不知不識人は個人々々にその人格の重んず可きに想ひ到れるの時なりき。此に於てか遂に人々口碑傳說の盲信妄從を翻け、個人の智性に照し、批評的眼光を以て信念界を觀察するに至れり。理性は各人の胸中にその活動を初めたり、多神の存在は疑はるゝに至れり、眞神の唯一なる所以は想定せられたり、アイスヒュロス。ソフォクレース等の詩人は確かに這般の時代精神を反照せり。善人は何にが故に苦み惡人は何が故に不義の快樂に榮へつゝあるか、神の御法は何にが故に斯く各人良心の指示する所のものと背馳するか。這般の疑問にして一たび希臘人の腦裏に喚起提供せらるゝに至るや、その古代宗教は、最早や智識ある社會人心を支配する能はざるに至りしや固よりその所なりと謂はざる可からざるものとす。

今や希臘人はその智識の上より云ふも道德の上より考ふるも到底舊來の宗教を以てしては滿足する能はざるに至れり、ホメーロスの教へたる人間的諸神を崇拜する能はざるに至れり。此に於てかその神の思想や漸々廣大せられ人と神との間には著るしき鴻溝の劃せらるゝに至れり、神は大にして人は小なり神威は畏る

可く昵く可からず、人一たび此精神を以て神を寫象ぜばその神に獻るの犧牲や最早や神人偕に樂むの饗宴に非ずして、人間の褻瀆人間の罪惡の償贖に對して神に獻るの供犧なり、此に於て希臘の宗教に初めて罪惡の思想有りて表現し來れり。然り而て又之れと共に一大新儀式の神を祭るに用ゐらるゝに至りしものあり、之れを秘密修法と爲す、元來此秘密修法の起原を考ふるに、そはアッチカ。ボイオチアア等に於いて、古來農人がデーメーテール。チオニュソス。キュベーレー等の諸神を祭るの儀禮に淵源せしものにして、後ちそは希臘の宗教界を風靡するに至れり。エレウシスの秘密修法の如きその最たるものなり。秘密修法とは神を祭る一種の儀禮にして、先づ此祭典に加はらんとする者は、豫め己れの道心を清くし身に罪惡の濁れを去り、斯くして靜に一種の宗教的作法を行ひ以てその神と交通し神の感應同交を謀らんとするに在るなり。然れば秘密修法は之れに加はる所の行者の何人たるを問はず、何の家族の血統たるやに關せず、その俗社會に於ける關係は毫も與り知る所に非ず、唯その精神にして苟も合同一致する所あるものは、何人も等しく一味平等の秘密修法の行者たるを得可きなり、此に至りて希臘の宗教界には

從前の國民的宗教と全然その旨趣を異にして、人種の異同血統の有無等、一切國家關係を離脱したる、普通的宗教圏躰の形成せられたるを見るものとす、是れ實に希臘の宗教史に於て吾人の特に注意す可きの要點なりとす。

秘密修法は聊か當時人心の宗教的需要を滿足せしめたりと雖も、當時の人心は又他の新需要に向ひて頻に努力しつゝありし所のものあり、何ぞや、曰く宗教々理の組織是れなり、元來希臘に於ては一卷の聖經無く一部の神學も無かりき、然れど希臘人の精神一たびその智的生涯に入り來るや、世界の本躰事物生成の原因を探りて合理的解釋を賦與せんとするに至るは自然の數なり、然れど舊來希臘の宗教は一も彼れの智的希求を滿足するに足るもの無きなり、是に於てか彼等は舊來の宗教以外何等か他に彼れ等の精神的急需を滿足せしめ得可きものを發見せずんば止む能はざるものとす。

希臘人の智界にして一たび開發せられて世界万有に一定の理法存する所以を知り、何等か之れが適切なる解釋を得んと需むるに至るや、古代の神話を資料として之れに由りて世界の本躰を探り事物の原因に合理的解釋を與へんと努めたる者

あり、之れをオルフォイス一派の詩人と爲す、彼等は神々の本性を明かにし靈魂の皈着を解釋せんとせり、此に於てか彼等のツオイス觀や全然万有神教的の一元論と成れり、彼等は謳ひて曰く、ツオイスは始なり中なり万有は皆なツオイスの造る所なり、彼れは男なり女なり、地の基、天の本なり、万物の生氣なり、火力なり、日も月も海も皆なツオイスより出づ、ツオイスは世界の王なりと、之れと同時に彼のオルフォイスが閻王ハデースに降りて地獄の秘奥眞相を探知し、而て閻王ハデースとの約に背きしの故を以て亡妻オイリュヂケーを再び此世に伴ひ還へる能はざるを說きて、人の道德上の責任本務を明かにし、靈魂の輪廻を敎へしが如き、實に當時の宗敎界を如何に風化せしかを想見し得可きなり。宜なる哉その影響の及ぶ所吾人之れをプラトーン哲學及び秘密修法の敎の中に於ても亦そを歷々指點し得可きを。

然れど希臘の宗敎は斯かる方法手段を以てしても、尙能く之れを改良革新すると能はざりき、實に希臘の宗敎改革は之れを哲學者の手腕に待たざる可からざるものとす。雖然當時哲學者の宗敎に對する態度は破壞的なり消極的なり、從ひて彼等は當時の信念に對しては全く懷疑論者たり、神の存在に關しては不可思議論者

なり、翁んや彼れ等の中には宗敎を以て、一に國王僧侶の詭計を回らして案出せしの特產物なりと、冷笑し去るの輩さへあるに至りたるをや、然れど希臘哲學は單に消極的破壞の一方のみならず、又彼等は智識の根底を論明して、眞に宗敎的信念に向ひて積極的効果を寄與しつゝありしものなり。ソークラテース。プラトーン。アリストテレースの如き學匠は皆な然らざるは無し。彼れ等は極力唯一眞神の本性を眞善美に認めて、從來の非道德的多神敎の妄を辨ぜるは、恰も猶太に於ける各預言者の輩出と頗るその軌を一にし、此意味に於て希臘哲學は眞に基督敎の前驅を爲したるものなり、猶太人がバビロニア迫放以後流離殘亡の餘を受けて、神殿無く供犧無く唯眞心の祈禱に神を希求しつゝありしと同く、希臘の思想家亦何等の神殿をも一切之れを退けて用ゐず、獨り熱心なる眞理の愛求者求法の道友をその身邊に集めて、淸新なる一敎團を形成し、その哲學々派中恰も宗敎的形態を取るに至りしものさへあり、斯くして哲學は眞に希臘人の宗敎的信念の核實精髓を成し、以て個人々々の道義を敎へ、倫理問題を研鑽し、神の性質神人の關係を考究して、以て猶太敎が基督敎の前驅を爲しゝが如く、希臘哲學も西洋に於ける基督敎の爲

めに、先づその弘通の敎田を開拓しつゝありしなり。

第六章　羅馬の宗敎

吾人は今羅馬の宗敎を論明せんとするに當り、太古羅馬人が尙未だ外國宗敎の影響感化を蒙らざる以前の有樣を考ふるに、元來羅馬民族の農畊を以て業とせる、彼等の宗敎も亦春播秋收、田畝岡樹の中より發生し來りしものにして、その崇拜せらるゝ諸神は農業畊作の神なり、然れど家族の亡靈を拜し、戰神の崇拜亦全然之れ無かりしに非ざりき。

以上の神々は各その受け持ちの業務を分擔しその守護を掌どるものなり、サツルヌスは春播を護るの神にして、テルミヌスは國境を守るを掌どる、その他シルヴヌスは樹林の神なり、リムファは川流の神なり、サイア。セゲチア。ツチリナ。ノドツスは共に五穀の神にして、春播より秋收に至る各時期に於て各自一定の季節を定めて穀物を保護する所の神々に外かならず、之れと同くクニナ。スダチナ。エヅラ。ロクチウス。アデオナ共に小兒の保護神にして、兒子の幼少なる時より次第に生長してその手を離るゝに至る迄の間を、各時期に小分してその各時期に從

てその小兒を守護するの神々なりとす。要するに羅馬人は自然界人事界の現象を一々皆な不可思議的神力の冥護ありて存するを確信しをるものなり、然れは希臘人は神を觀じて之れを自己と同一に人間化し、羅馬人は人間以上の不可見躰の神格が各事物の裏面に潛在するを認めて之れに神事せしものとす。說を爲す者あり、曰く今此等の諸神の名稱は形容詞にして、元來は同一大神格に賦與せられたるもの、而かもそが年所を閱歷すると同時に各形容詞のみ殘りて、そが個々の神々として思考せらるゝに至りしと雖も、その大本に遡りて之れを考ふれば同一大神力が諸種の事物に表現せし場合に於て、その各方面に發露せる同一神力を、假りに諸般の形容詞を賦與して命名したるものに外かならず、而て今日に至りてはその各形容詞のみ殘これるが故に、八百八万神を現出するに至れりと。然れど吾人は寧ろ斯かる解釋は不當にして、太古草昧の蠻人が斯かる同一大神格の思想に到達しをりしと考ふるよりは、寧ろ以上列擧したる諸神は太古各拉丁民族の中に個々別々に崇拜せられたる所の諸神の遺物なりと解するの穩當なるを認めずんば非らず、蓋し太古羅馬の宗敎は實にタイラーの所謂精靈敎の時代たりしものとす。

抑々他のアールヤ人種の宗教に在りては、吾人の初めてそを目擊するに至りたる時、早く既に人文發達の程度斯かる階級を經過しをりしものなり。然るに拉丁民族に在りては、元來論理思想や想像作用に匱乏せる、他のアールヤ民族に後くれて尙ほ永くその精靈教の信仰を有しをりしものとす、故にラチヌス人種の神は若し正當に之れを謂へば、神と云はんよりは、游魂離魄即ち精靈と稱するを適當なりとす、フェスタの如きユーノーの如き後ちには一大神格として崇拜せらるゝに至りしと雖も、その當初に在りては游魂離魄に外かならざりしなり、マルス。ヂアナ。ヨヰスの如き又皆な然らざる無し、マルスもその初めは五穀の神にしてヂアナは樹靈なりヨヰスは希臘のツオイス印度のドヤウスとその語源を同うすと雖も、拉丁に在りては元來葡萄樹の樹靈たるに外かならず、故に拉丁の神々はその勢力一に皆な個々特別の事物のみに制限せられて、その勢力廣く一般に及ばざるものたるや明かなり、その家族の中より生出せる神たるラレス。ペナラスの如き亦之れと同一の性質にして、ラレスは祖靈にしてペナテスは一家の幸慶を守るの神なり、唯マヂスに至りては個々の人々の亡靈を指示せるに非ずして一般に死者全躰に亘

りてその亡靈に與へられたる神名なりとす。

以上論明せる所のものは羅馬の宗教が未だ外國思想の影響感化を蒙らざりし以前に於ける狀態を想像せしものにして、固より確乎たる文獻の徵す可き無し。彼の羅馬の宗教が歷史上事實として表現するに至りしときは、以上陳述せし如き雜多の小群神は既にその影を收めて幾多嚴然たる大神格の崇拜之れに代はりたるの時なりとす、蓋し拉丁民族が斯かる宗教を獲得するに至りたるは元來諸種の家族互に相合同して部落を成し、各部落の小團は更らに相合して一層廣大なる社會團躰を形成し、遂に進みて羅馬てふ一大都府を勃興せしめたるの時に在りて存するものとす。故に信仰の神デウス、フィヂウスは各團の同盟を神化して生ぜしものなり、又各部族中には互に相酷似せる信仰を有しをるものにして、マルスは羅馬人の戰神なりクイリヌスはサビヌス人の戰神なり、その當初に於ては葡萄の樹神たりしヨヰスも部落の澎漲と共に拉丁全民族の信奉す可き神となり、遂に之れを父なるヨヰス即ユピテルと呼び又之れを至上神即ちオプチムス、マキシムスと稱し遂に戰神マルスを凌駕するに至れり。

羅馬の宗教それ自身に於ては何等の發達をも爲さゞりき、然れど羅馬の宗教は之れより一層高等なる外國の諸宗教より感化影響せられて遂に一大發達を全成せり、羅馬人自らも自己の宗教の劣等なるとを自覺しをれり、故に羅馬人は一般に他國人の宗教に對しては寛容なる態度を以て之れを遇せり、彼等は他國人の崇拜せる諸神を等しく敬禮せり、蓋し羅馬人の思惟したりしが如く宇宙の万物は各自自己の生氣精靈を以て活動しをる以上は、如何なる國如何なる民と雖も各自亦己れ自身の神格を有せざらんや、是れ羅馬人が異人種の宗教を寛容せし理由なりとす、此に於てか一朝彼の哲學美術の上に於て秀でたる希臘人の彼等に接觸し來るに至るや、その宗教は又羅馬人の遵奉する所となりたる亦た實に怪むに足らざるなり。

斯くの如く外國の神々は陸續羅馬に輸入せらるゝに至りしと雖も、そは單に外來の諸神をその儘輸入せしに非ずして、外國の神々は羅馬に來りて大にその性質を變化し羅馬風に化せらるゝに至れり。希臘の諸神は元來人間的にして人的形狀を具へ而かも神的自由を具有しをるの神々なり、然るに羅馬の諸神は不可見的なり希臘の諸神の如く具躰的に非ずして抽象的なり、故に諸多の希臘の神々は羅馬の神々と同視せらるゝと雖も、そは唯外觀上の事にしてその神々の本性を謂へば頗る相徑庭しをるものとす。然れど羅馬人は後ち遂に自家本來の諸神の性質を忘失し以て希臘の諸神を迎ふるに至れり。羅馬人は又希臘の神話をも採用せり、然れど詩的想像の翼を張りて空中を飛翔しをれる希臘の諸神は、沈靜肅烈の法治的思想の產物たる羅馬人の宗教思想とは頗る相杆格せるものあり、遂に羅馬人は希臘の宗教を採用するに至りては、從來彼等が嚴然格守しをりし宗教上の外儀は全然無意味の物理的動作と化し去るに至れり。

然れど又希臘より羅馬に來りし諸神の崇拜中その源を東洋に發せるもの亦少からず、例之ばキュベレの崇拜は當時希臘の本國に熾んに行はれをりしと雖も、そは元來小亞細亞の神にしてヂュオニュソス亦然りとす、特にキュベレ又はヂュオニュソス祭祀の恬活輕快なる、羅馬の宗教が元來冷靜沈痛なるものに比して、著るしき異同ありて存ずるを見る、此に於てか內外の宗教的風習は一時衝突を來たし、政府又無法なる外國宗教の輕佻浮華の風あるものに向ひ、多少の制限を加へしと雖も、そも畢

竟は甚だ行はれ難かりき、此に於てか羅馬共和政の終期に至る頃には、各國の諸宗教は滔々として羅馬府に蝟集し來り、羅馬人又政治上の秩序を紊亂せざる限りは、一切外國の諸宗教を寛容するに至れり。斯く宗教の集團中に在りても、羅馬元來の宗教は尙依然としてその生命を持續せり、然れどそはその宗教に教ふる所の教理の眞理なるが故に非ずして、その教理儀禮の如きは、そを教へそを行ふ祭司等自らに在りても、既に業にその無意味なる所以を充分自覺し、而かも唯そが羅馬の古風を保存し羅馬千歲の國史を尊重するの意を以て繼續され來りしものなり、何んとなれば斯かる歷史的關係を有し國家と密接の關係ある宗教を維持繼續し行くは、眞に國家の福祉を增進し興業一般の希望を滿足せしむるものなればなり、然れど一たび羅馬人が外國思想の餘を受けて哲學を解しその宗教の外儀既に陳腐に屬したるものを自覺するに至るに及びてや、彼等の信仰は到底自家の宗教を以てしては滿足し能はざるものとす、此に於てか曠世の英雄不世出の明主アウグスツス皇帝は羅馬の宗教を刷新改良せんと企圖し、ラレス神の崇拜と皇靈の崇拜とを鼓吹して羅馬の宗教に活潑々地の生氣を賦與せんとせり、リヰウス。ホルギリウ

スの徒又その詩藻文詞に依りて羅馬の古史に基き、羅馬府の古雄の昔を忍びてその諧謔英風を想望瞻仰し、以て羅馬人の天職を普く天下に告知せんと企てしも遂にその功無きに終はれり、蓋し羅馬の宗教は到底斯かる方法を以てしてはその刷新改造を期す可からざる所のものにして、蓋しそは眞個に當に世界的宗教たる基督教の手腕に待たざる可からざるものなればなり。

第七章　印度の宗教

第一節　吠陀の宗教

叙し去り叙し來りて吾人は今や印度の宗教を論明せざる可からざるに至れり。此に於てか首を回らして印度の宗教を以て之れを同くアールヤ人種の宗教たる日耳曼族の宗教に比するに、吾人は此兩者間に存する異同の頗る顯著なるものありて存するを見ずんばあらざるなり。日耳曼民族は朴訥にして勇に長じ印度のアールヤ人種は優美にして文弱に流る、一は活潑々地の生氣に富み一は沈思瞑想に耽醉せり、一はアールヤ民族の古信仰を最も原始的に保存し一は宗教進化の歷程遙にその高度に進めり、故に印度の宗教的典籍はアールヤ民族の信仰を記せ

る最古の簡墨なりと雖も、印度の古典籍が吾人に指示せる宗教そのものは決してアールヤ宗教の原始的形式をその儘に保存しをるものに非ず、是れ實に今日印度の古學專攻家考究の結果なりとす。

吠陀の宗教とは梨俱吠陀なる印度の宗教上の古典籍の名に取りしものにして、それは亦アールヤ人種の宗教に於ける最古の文献なり。彼の四吠陀中梨俱吠陀は最も古く且つ最も趣味深き聖典なり、それは神德を頌するの讃歌にして印度人が吠陀本典の神出を主張する所の聖書なりとす。吠陀の多くは彼のアールヤ人種が半ば土人を征服して印度に攻入し、以て五河の江濱を畧せしの頃に於て生成せしものなり、故に吠陀の宗教は著るしく國民的にしてアールヤ人種はその自己の崇拜せる神々に向ひて頻に自己種族の救護を請ひ、以て自己と言語を異にし習俗を殊にし身躰骨格相貌を別にし宗教を同うせざる劣等人種を征服截定するの援助を祈願せり。這般の征服者たるアールヤ人は決して野蠻未開の人民たるに非ずして、既に金屬の使用を知り家屋を造りてその内に住し多人數相集りて村落を形ち作り農業耕作牧畜狩獵を以てその生涯を送れり、彼等はブランデーの一種たるス

ラー酒を飲み麥酒の一種たる蘇摩を嗜めり、彼等の間には一夫一婦の制嚴然と確立し、妻は家庭内に在りては最高位を占め夫を扶けて犧牲を神に献る、各州皆な國王あり、之れを統御するとは恰もホメーロスの詩篇が描出せる希臘古代の當時に髣髴たるものあり、然れど國王の外に人民は參政權を有し、未だ神殿の設けあらざりしが故に、王は己れの家即ち王宮に於て自ら犧牲を神に献り、以て全部落の利福を祈り、又時に此式に王を助くるの輔佐役を用うるとあり。

吠陀の宗教に表現せる神々は果して是れ如何なる神躰なるか、曰く吠陀の諸神は自然現象即ち天躰現象の多少人化せられたるものとす。印度人は或時は某神を崇拜し或時は他の神躰を崇拜す、諸神は各自皆な自己の歴史を有せり。梨俱吠陀中の神アグニは火の神なり、ソマ神はソマ酒を神化せるものなり、勿論アグニは個々の火に非ずして宇宙の根本的原因としての火躰なりとす、アグニは人間が神に奉りし供物を諸神の面前に持ち行く祭司的中保者なり、家庭内に於ける人間の伴侶なり賓客なり、アグニは森羅万象一切の事物中に貫通し万物の生々は即ちアグニの力に由るものとす、ソマ酒は又諸神の飲料にして諸神の之れを飲みて不死の

勢力を獲得するものなるが故に、アグニと同く普遍的原理を爲せり、その天より降臨して一切世界の事を掌どると云ふソマは、詩人の精神に感應し、祈る者の願を叶へ、アグニと共に太陽と星辰とにその火光を點ぜり。

諸神中最も甚しく人間化せられたるものをインドラと爲す、インドラは當時期に於ける全國民の崇拜を要求せし神格なり、二頭の馬匹を以て駕せられたるの車に乘じ、天の水たる牝牛を捕へて隱匿せるてふブリトラ。アヒの如き妖怪に向ひて常に戰鬪を挑めり。此に於てか善神惡鬼の爭鬪は斷へざるに至れり。インドラは各種の善事を人間に與ふるの神なり、天躰を保全し一切生命の創造者保存者なり、高尚なる思想を人類に皷吹し眞心の所願に答へ賴む者を援け悔ゆる者を救すの神なりとす。

インドラは嵐神マルトの圍繞する所と爲り、絃歌して空中を翔り乾燥せる地上に雨を降らすを掌どる。マルトの父をルドラと爲す、等しく嵐の神なり、雷電を以て惡鬼に當り以て人間を援け、惡事を働けるものを罰し病を癒すの醫師なり。

ヴーダ又はヴーユは風神なり、バルシァヌヤは嵐の神なり、然れどヴルナは實に太空

の浩洋瀰漫を神化せるものなり、ヴルナに献れる讃歌はその數鮮少なりと雖もその讃歌中は宗教的道德的旨趣に富めり、そはヴルナが天地星辰の創造者たることを謳ひ善の保護者にして惡の復仇者なることを頌せるものなり、ヴルナは正義を愛し神聖近く可からずと雖も亦頗る同情に厚きの神なりとす。ヴルナと同くミトラ。ヂシュヌ。プーシァン亦天躰を神化せる神々なりとす。スールヤは人にその眼を閉ざしてヴルナとミトラとに己れの失敗談を話し、生育者サヂタルはその長き黄金の腕を伸べて毎朝眠より一切の事物を呼び起こし而て夕に至れば眠の靜謐を以て万物を覆ふ、ヂシュヌは三歩して宇宙全躰を涉り得可しと稱せられ、プーシャンは常てその家畜の一をも失ひしと無かりし牧人にして世界の旅行及びその最終の旅行に於ける吾人の先導者なりと思惟せられたり、而て主なる神々は一般に無限アヂチの兒子アーヂトヤスなる名稱を以て呼ばる、曙の女神ウシァスは美少婦にして太陽之れを追ひて日々東天に昇り來ると想像せられ、二雙子たる天の御者アシュヂンは車を驅りて日々天空を一週すると思惟せられたり、ドヴシュタールはインドラの雷電を製するの鍛工にして、リブスは人間界より上りて神の列に加り

たるの神なり、ヤマは死の神にして、初めヤマ先づ此世界より超へて彼の黄泉國に至るや、遂に止りて黄泉に王たるに至れりと云ふ、そはアグニ、プーシヤン等の諸神が導いて彼の世に至れる諸亡靈を慰むるの神職に在り。以上の諸神と稍その趣を異にせるの一神あり、之れをブラマナスパチと爲す、ブラマナスパチは祈禱の主にして祭儀を神化せるものなり。

吠陀の宗教は多神教なるが故に、幾多の神々在りて併立しをりしとは以上既に叙述したるが如くなり、然れど是等の神々は隨時隨所に各自の關係を上下軒輊せるものにして、或時はアグニが至上神の崇拜を受くるかと思へば、又或時はインドラは宇宙を支配し一切諸神の父なるが如く謠はるゝとあり、ヴルナが至上の神位を占むるかと思へば又忽ちにしてミトラの最高神位に登れるを見る、その他の諸神に就いて謂ふも亦復是くの如し、然れば吠陀の宗教は多神教たると同時に隨所隨時にその中の一神のみ特に人民の崇拜的對象に上るものとす、然れば此點より之れを見れば宛然唯一神教の觀あり、マックス、ミュレル氏は、斯く印度の宗教に於てはその崇拜の對象たる唯一神格の隨時隨所に變轉するの點より、吠陀の宗教を交替神

教と稱せり、蓋し吠陀の諸神はその個々獨立の存在を確保し、諸神の躰統組織を形成する迄にその個々の人格的獨立性の確成せられたるものあるを見ず、否な寧ろ印度の宗教は諸種の多神を概括して之れを一躰として寫象せんことに努めしなり。今此思想の暗潮を吾人に指示するものを律則となす、律則とは天然界及び道德界の兩者に普ねく行き亘たれるの秩序法規にして一切の事物は皆な此法規天則の外に逸脱すると能はず、そは宇宙間に於ける一切の存在物森羅の諸象に等しく共通せる所のものにして、万物の等しく當さに遵據す可きの法則規律なりとす、此に於てか吾人は吠陀の宗教にはその當初より哲學的傾向ありて存するを認めずんばあらず、そは諸神を湊合概括するに唯一神を以てせんとするに非ずして万有神教觀を以てせんとするに在りしと是れなり。

第二節　婆羅門教

太古印度のアールヤ人種が五河々畔に住して荐りに天然現象を謳歌しつゝありし時代は、更らに彼等が進みて東方恒河の流域に侵入して土人を征服して土地を略し、以て遂に此地に永住するに至りしの時代を以て繼起せらるゝに至れり。然

れば彼等は風土氣候の著るしき變化と共にその思想上にも至大なる變動を生ぜり。此變動は以て明かに彼等の宗教上に於ても之れを認むるを得可し、僧侶は漸次特別なる一社會を形成して隱然勢力の根底を固め、聖典の規定宗教的儀式の煩瑣的增加、及び之れと相駢びて、宗教の哲學的考察亦その歩を進めき。

然れど斯く吠陀古神の勢力減衰と共に、一種の新神は産れ來たれり、之れを最高至上の主神たる梵天即ちブラマーと爲す、ブラマーは實に宇宙の支配者なりとす、抑々此ブラマーとは既に吠陀の宗教に於てもインドラ。ヴルナ等の諸神以外別に一個獨立の地位を占有しをりし所の神格にして、吾人之れをブラマナスパチと稱せり、ブラマーは實にブラマナスパチより發達し來りしものとす。

古吠陀の神話的諸神は漸々抽象的一神に攝飯せられんとするの傾向益々旺んとなり、宇宙世界の最高至上神にして一切萬物の主たるブラシァーパチと呼べり、ブラシァーパチは益々抽象的性質を以て寫象せらるゝに至れり、印度の思想が多神教より漸く一神教的傾向に進み來るやアグニ。ヴユ。スールヤは鼎足的三神を形成せり、諸神の人間的形式を有せるものゝ外に古吠陀の讃歌中には殆んど見るを得

ざりし游魂離魂の此時期に於て現はれ來れるあり、之れ等は恐く印度本來の土種の崇拜せし神々にして、そがアールヤ人と土人と相混するに至りて、土人の神のアールヤ人の宗教中に入り來りしならんと謂ふ、アスラの如きも古吠陀の時代に在りては單に神と云ふに外かならざりしに今や變じて惡鬼となるに至れり。マヌの法典に據れば婆羅門族は最高至上の階級に屬し、そは國家の中心にして一切の權力を掌握す、然れど婆羅門自身の生涯も亦摩菟法典の記載する頗る嚴肅なる法規に從ひて拘束せらるゝを見る。婆羅門の生涯は生れてよりその死に至る迄四期に分かる、即ちその第一期は修學の時期にして師に就て吠陀の聖詩を師するを學ぶ、此聖詩はオームなる秘的神語と共に屢々之れを反復す、此時期に於てはその生徒の師は家父より一層重要なる位地に在るものにして、婆羅門の生徒は鄭重なる尊敬を以て師に對するを要求せらる、第一期の終はるや婆羅門は神に犧牲を獻りて妻を娶り初めて一家を爲す、然れど婆羅門は金錢財寶等の世界的俗事に懸念すると無く足らざるときは人に乞ふて生活す、唯彼等の專心從事す可き所のものは吠陀の聖典を解し神に事ふるの外他に何事をも爲す可からざるものとす、若し

一たび彼等が家督をその兄子に讓り渡たすに足るの教育をその子孫に爲し得たる後に至れば、彼れ等は直に第三期の生涯に入り出家して獨坐沈想に嚴肅なる遁世的生涯を營爲す、而てその第四期に至れば彼等は頽齡の禁慾的乞者比企即出家と爲り、一切の社交を絶ち一切の祭儀を廢し食を乞ひて生き慾を斷ちて自己の眞性を思惟觀察し、以て宇宙の唯一實在たる梵天の本躰に瞑合せんと期するものなり、是れ實にマヌの法典に於て初めて之れを見るものにして而かも吠陀の宗教に於ては未だ見ざる所の道德的理想の完全を描出せるものと謂ふ可きなり、彼等は殺生を禁じ愛執の念を斷ち偏に梵天の大精神の個々の有情に發現せるを大觀し、以て彼等は現世の命終と共に梵天の本躰に瞑合して梵と合一に皈せんと努むるものとす。

以上論明する所を以て之れを見れば、婆羅門教徒の精神は必しも單に外形細末の化石的祭儀にのみ離離しをりしに非ずして、頗る高尚なる精神上の思辨をも努め、嚴肅なる宗教上の克己的道德をも勵行しつゝありしものとす、然れば婆羅門の宗教思想が秋霜烈日、厭世的悲觀の不健全なる印度思想上に築かれたるものたるとは、寸毫も否定す可からざる事實なりと雖も、普通婆羅門の宗教的生活に於ては和氣藹々常に瑟家和樂の春風馥郁として薫ぜるものありしや疑ふ可からず、之れに反して首陀以下の印度民族の如きは日に荒凉慘憺孤城落日の悲運に沈淪しつゝありしものとす。

婆羅門教徒の宗教は一方にては外形的儀式の煩瑣主義に化石し去りしも、亦一方に於ては深遠幽奥なる瞑想沈思に向上一條の活路を求めつゝありしものなり。吠陀の自然崇拜にては最早や彼等の宗教心を滿足すると能はずして彼等の精神は一層深遠なる主觀的內省に轉向し來るに至れり、固より婆羅門教徒の祭儀や祈禱を神聖視し之れを以て神と同一視せしは、畢竟之れを吠陀の自然崇拜と同く、等しくその外界形躰の上に神を求むるの點に於ては同一なりと雖も、從來印度人の思想が一向自己以外に向ひつゝありしものに比して自己內部の經驗上に轉向し來りしは一段の進歩と謂ふを得可く、特にその解脫や一に禁欲主義の勵行に由ると雖も、彼等は又その內部精神上の反省瞑想に由りて究竟的完全に到達せんと期せしを思へば、信仰一轉の機最早や實に隱微の間に磅礴しつゝあるを證するに足

る、蓋し婆羅門教徒はその初め外界に神を認めしより漸く宗教的煩瑣の儀式を介して遂に梵天の眞實躰に想到し、我れと梵天とは畢竟一味同躰なる所以を證悟するに至れり、而て今や思辨的に此理を明にせしものをウパニシャドの哲學と爲す、ウパニシャドは實に哲學たると同時に印度民族の宗教なりしなり。

印度人の思想は既に吠陀の太古よりして、その多神教たる吠陀の諸神を總括する至上神を得んと希求しつゝあるものなり、換言すれば幾多同等の神々の雜多を排して一神に帰入せんと努めつゝありしものなり、故に吠陀の宗教は吾人の最者に說明せしが如く交替神教なり、換言すれば隨時隨所に崇拜せらるゝ所の神の主躰は常に相轉變し某時某所に於ては某の神のみ獨り最高至上の位置を占有せしなり、故に交替神教は又同時に單一神教なりとす、プラジャーパチは万物創造の主にして一切作者たるビシュヴカルマンは万有の能造者なりと觀ぜられたり、是れ實に吠陀詩篇の幾多の神々をプラジャーパチ若くはヴシュヴカルマンの一神に總括帰結せんと努めたるものとす、之れに尋いで彼等は梵天即ちブラマーなる最高至上の神格てふ觀念に想到せり、梵天即ちブラマーなる一神はプラジャーパチ又はヴシュヴカ

ルマンとは大にその性質を異にし智的に寫象せられたる神格なり、梵天は則ち大精神にして不生不滅不變不化寂然として宇宙の生滅變化以外に立つの神なり、精神とは原來呼吸又は生命の義にして後ち之れを眞實自己の精神即ち眞我の意に用うるに至れり、今梵天とは則ち此精神の大なるものにして即ち大我なり、而て人は各自梵天即ち大我の本躰とその性質を同うせる小我なるが故に、自己は即ち小なる梵天にして梵天は即大なる自己なり、然れば今此大我小我の關係を眞に能く躰認悟得せし人を眞解脫の人と稱するなり、婆羅門の理想亦實に此外を出でざるなり。

梵天の思想に至りて多神教は此に一神教たるに至れり。然れど梵天とは何ぞや曰く一切の具躰的性質を離れ吾人思想の抽象の極度に到達したるの時初めて之れに接見するを得可し、故に梵天とは畢竟言說の相を離れ名字の相を離れ心緣の相を離れたるものにして、本來不可得なり、梵天とは畢竟不生不滅至完至全常住にして恒存なる眞實躰なりとす、然れど今顧て此世界を觀察するに世界相無常なり、人生は不完不全にして失望と悲嘆との窮谷なり、果して然らば不生不滅至完至全

の眞實躰梵天は此の生滅變化不完全の現象とは如何なる關係ありや、何が故に至完至全の梵天は生滅不完全の人生を救護せざる乎、此問題を解釋して印度の哲人は則ち曰く、現象界は一切夢幻なり世界は虛妄なり無明の府なり、故に人は眞に現世の如幻虛假にして吾人轉倒の妄見の作爲せし所のものたるを躰認せば、智眼此に開きて自己の本躰直ちに梵たるとを證悟し、以て初めて眞解脫の究竟に到り安住するとを得るものなりと。

吾人の眼底に横はれる相對差別の世界は一切如幻虛假の倒見の法にして梵天のみ獨り眞實躰なり實相界なり、人若し眞に此理を躰認するの智見を得ばその人は即時眞解脫に至れるものなり、哲人の大觀も亦之れに過ぎず、世に聖賢と稱せらる所のものも一に此理を躰認して元來虛妄の世界人生に對して執着の念を絶ち、超然として是非の外に卓立し、遂に進みて梵の自性に暝合するを期するに外かならずとす、此に於てか婆羅門敎の立脚地を以てするときは世には賞す可きの善も無く厭ふ可きの惡も無く勤む可きの德行も無く撿く可きの非行もあると無し、何んとなれば世界は一切無明煩惱の轉倒より成り、實なる世相一も存すると無けれ

ばなり、果して然らば世豈に又善惡正邪の別なるもの有らんや、此に於てか吾人の眞個に努む可きの道德なるものも又決して有り得可からざるものなり、故に他の敎學に於て振策奬勵するの德行は婆羅門敎に在りては、一切世間愛着の妄見を破する手段たる禁慾主義肉慾勵殺の努めとして存せしに過ぎざりき。

靈魂輪廻の信念は婆羅門敎本來の思想に非ずして當時印度に存在せし民間信仰なり、蓋し最高眞實の實在を梵の本躰に認むるの高尙深遠なる婆羅門哲學は又靈魂輪廻の卑近なるに比す可くも非ず、この兩思想は全然別類の思想なるや明かなりとす、然れど靈魂輪廻の思想は吾人の實際的行爲を導いて善道に皈せしむるには最も都合好き訓育策なりと謂はざる可らず、何んとなれば現在の果は過去に於ける吾人靈魂の所作に基き、而して未來の禍福は吾人現在の行爲如何んに由りて豫定せられ得るものたらば、未來の幸慶福祉を希求せば吾人豈に現在今日に道行を努めざる可けんや、斯くして吾人は寸善を勵み尺惡を避けつゝあるの間、遂に至高至善に到り以て眞解脫を得可しと敎ふるものなればなり。

之れより以後印度の宗敎界には佛敎を外にして、二大思潮の相分れて奔流せるを

見る、則ちその一は有名なる印度六派の哲學にして他の一は通俗の信仰なり、民間信仰に在りては梵天の抽象的に過ぐる到底俗耳に入り難く、從て甚だ世人の渇仰する所とならず、インドラの崇拜亦一歩をヰシュヌに輸すに至り、シヴなる破壞の一新神表はれ來り、以て梵天とヰシュヌとシヴとは印度宗教に於ける三種現躰を形成するに至りぬ、神の人となりて表はれたる化身の思想又起これり、則ちヰシュヌは十個の化身となりて表現しその中クリシュナは最も著名なり、このクリシュナを謳ひし叙事詩は有名なるマハーバーラタなりとす。

第三節　佛教

印度の宗教は佛教に到てその發達の頂點に到達せり、佛教は無神論にして所る可きの神無く事ふ可きの主無く、神人の間を媒介す可きの祭司僧侶なるもの有ると無し、佛教の佛教たる所以はその神學々說にも非ずして祭儀の形式にも非ずして、之れを內にしては道德的情操たる慈悲を以てその內容中心と爲し、之れを外にしては僧伽の教團組織に在りて存するものなり、そは中部印度より興りて實際的に印度の人心を感化して四方の邦國に流布するに至れり、佛教は今日既に自家本來の生

土たる印度に於てはその痕を絕ちしと雖も、廣く全世界に弘布して全世界の宗教中その信者の多き佛教の右に出づるもの蓋し是れ有らざる可し、佛教は耶蘇紀元以後二大分派を生じ、一を南方佛教と謂ひ他を北方佛教と稱せり、南方教とは錫蘭、緬甸、暹羅に行はるゝ所の佛教にして、北方佛教はヲヤヴ、スマトラ、西藏、支那、日本に弘通せし佛教之れを代表す。

佛教の開祖佛は姓を喬答摩と謂ひ幼名を悉達と稱す、滅後の遺弟その德を渴仰して釋迦族の大聖釋迦牟尼世尊と呼べり。釋迦族は耶蘇紀元前五百年頃に於て今日のベナレスー市を距る數日程恒河々畔の北方に住せし一種族なり。悉達の父を淨飯と謂ふ、釋迦種の首長なり、現今のオード附近迦比羅城に都せり、故に佛は元來宗教を掌どる婆羅門の家に生れたるに非ずして武士即刹帝利族に屬す、佛は生れて門地高く安樂榮華の家庭に人と成れり、長じて妻を娶り二十九歲にして一子を擧げ、而て直ちに此の年を以て彼れは世の非常を悟りて發心出家せり。蓋し釋迦は諸般の痛苦人生に纏綿するものあるを見て人生の無常を嘶ち老病死は實に彼をして世間的娛樂の墓かなきを觀破せしめて出家發心の情爵勃として禁ずる能はざ

らしめたりき、釋迦は幾多内外の誘惑たる惡魔に抗して、不撓不屈の大精神を皷舞し、以て畢生の大志願を成就せり、釋迦は先づ當時婆羅門僧の禁慾的哲學者を訪問してその說を叩き解脫涅槃の道を問へり。釋迦は勤苦六年彼れ等の敎ふる所を實行せしも遂にその眞解脫の法門に非ざるとを覺破して禁慾的苦行の無益なるを知り之れを廢して以てその村女の供養を受けて之れを食へり、時に憍陳如等五人の比丘弟子之れを目擊し、以て釋迦の薄志弱行と做し遂にその左右を去れり、釋迦は之れより自ら獨坐思惟して觀察工夫の結果、曉天明星の烱々たるの時菩提樹下に端坐して廓然として大悟し宇宙の眞理に妙契せり、釋迦は事物の眞相に達觀せり、此に於てか乞丐の沙門比丘は直ちに無上正覺の佛陀世尊とは成れり、佛は人生に纏綿せる苦の本源を確認し、拔苦の秘訣は一に煩惱の滅盡に在りて存するを說けり。

釋迦は今や自ら無上正覺の最勝道を大悟して自ら佛陀覺者となれり、而かも未だ俄かに之れを他人に說示せず。此時に當り婆羅門自らも釋迦に請ふに衆の爲めに法藏を開きて廣く功德の至寶を施與す可きを以てせしかば、釋迦則ち決然志を立

てゝ、先づベナレスの鹿野園に至り、嚮者に釋迦の一旦苦行を廢せしを見て、その意志の薄弱なるを疑ひ、そを去りし憍陳如等五比丘を化し、道に跣足の禁慾的修道僧に逢ひ、そが釋迦の光顏巍々たるを見て、その然る所以を問ひしに答へて、釋迦は自ら煩惱を斷絕して涅槃に到達せしを以てせり、鹿野園に於てその初轉法輪の事ありし以來屢々佛は四方に弟子を派遣して佛大悟の正法を布宣したり、佛は機に臨み變に應じて妙法を獅子吼せり、然れどその當初は皈依する者も左程多からざりしが、漸々佛の德風に化せられ遠近なる皆佛弟子となり、出家剃髮三衣一鉢の比丘は至る所に輩出せり、斯くして佛の諸弟子衆比丘は誠意誠心佛敎の弘宣流布に靖献せしを以て佛敎は之れを暫くして印度國内に至大なる信者を得るに至り、摩揭陀の國王頻毘沙羅直ちに佛敎に歸依して佛弟子となり、佛は之れより自己の父王姨母をも化して佛敎に歸せしめたりと云ふ、佛はその敎を施くに當りて毫も他の婆羅門僧等の反對に遭遇せしと無く、最も平和的にその法を弘宣せられたり、唯佛の從弟提婆達多なる者、佛の餘り外形的儀式に重を置かざるに反對して聊か佛敎部内より反抗を試みしの一事あるのみ。

佛は三十五歳にして正覺を生じ壽八十にして涅槃の雲に隱れぬ、佛は聖壽八十の雨期に至るや、色身に微恙を感じ遂に自らその再び起つ可からざるを知りて、諸弟子を召して後事を托し、佛の敎說に從ひ各一致團合して僧伽を守り以て正法を世に弘宣す可きことを訓誨せられたり、佛は一鍛工の懇請して佛前に供養したる豚肉を食して光顏殊に麗はしく、佛亦涅槃の愈々近けるを覺り、弟子のその死を惜みて啼泣嗚咽せる者を慰藉し縱令佛の色身は今現に此世を去るも佛說法の眞理は常住不滅永世彼等を導くの光明となり永く消滅せざる可きを誨ゑ、特に上足の弟子阿難陀に敎へて佛敎を如法に受持す可き所以を諭し、斯くして彼等は修行の功に山りて直に三苦を消滅して佛と同一の涅槃に歸入す可きことを說示せられたり、而て佛は尙その弟子等の心に信仰の疑雲尙ほ霽れやらざるものあらば明かにそを質す可きことを命ぜり、滿坐肅然として一語の以て衆比丘の唇頭に波だつもの無かりき、此に於てか佛陀は世界相無常唯汝が輩勤めて無上菩提を求む可しとの一語を殘して此に無餘涅槃の雲に隱れぬ、時に蘇耶紀元前四百八十二年より四百七十二年迄の間なりと謂ふ。

印度に於ては當時佛敎の勃興と相前後して而かも佛敎と頗る相酷似せる一宗敎の興起せるを見る、之れをワルダマーナの著那敎と爲す、ワルダマーナはその敎徒之れを尊びて大人或は勝者即ち著那と稱す、その敎理は主として佛敎を摸擬せしものなり。

佛は婆羅門敎に對して敢て攻擊的態度に出でしものに非ずして、その佛敎と婆羅門敎との論爭劇甚を致し來りたるには佛滅後の數世紀以後に屬するものなり、又佛は敢て煩瑣的哲學思想を弄せしに非ずして、佛の說法とは寧ろ易簡直截の福音たりしものなりと解するを至當とす。

佛の幼時よりその腦裏に蟠屈して、その解釋に惱ましめたる所のものは、人生の多苦觀なり、曰く吾人々類は何が故に生老病死の苦網に繫縛されざる可からざるかと、此問題や遂に太子悉太をして万乘の王位を捨てゝ出家發心せしめたり、而て勤苦六年の結果は此問題の解答を全うし、吾人々類の苦源を遡りてこは吾人々類の無明に在りて存すと爲し、苦集滅道の四聖諦の理に通曉せざるに在りと說き、以て四諦說を稱道して鹿野園の說法は人生に於ける苦の事實よりして(苦諦)の苦の原

因を探り、(集諦)、說を斷滅せざる可からざるを明かにし(滅諦)以てその滅諦に入る道途方法を明にしき(道諦)。

吾人凡夫の群萌は四諦の理に通曉せず無明の大夜に彷徨するが故に生死の苦海に流轉輪廻するものなり、何にをか四諦の理に通曉せずと謂ふ、曰く拔苦の理を悟らざるに由るなり、何にをか拔苦の理と謂ふ曰く無我觀是れなり、吾人は無我の理を識了躰達せざるが故に此に我態に執着して煩惱の意馬心猿はその暴威を逞ーするに至る、此に於てか煩惱業は吾人をして生死海裏に永く浮沈生滅せしむ、然れど人一たび無我の理を識了躰達して吾人凡夫の目して以て常一主宰の實躰と認むる所の我なるものは、畢竟五蘊假和合の結果に過ぎずして實躰ありて存するに非る所以を大悟せば、又何れの所に向てか我態に執せん、果して斯くの如くんは、又起さす可きの煩惱も無けば相續す可きの行も無く受く可きの苦亦有ると無し、之れを一切の苦を滅盡し一切の煩惱を斷絕したる、不生不滅無爲寂靜の涅槃妙藥の至境と爲し、之れを解脫と云ひ救濟と名く、是れ實に佛敎徒の理想なり目的なり究竟地なりとす、果して然らば吾人は如何にして此涅槃の目的理想に到達するを得

可き乎、曰く他無し四聖諦中の道諦を實踐躬行するに在り、而して佛は此道諦を更らに詳說して八聖道と爲し、そは畢竟吾人の道德實行に在りて存すと敎へたり、此點に於て倫理的原素は充分佛敎上にその勢力を發露せり、是れ佛が順世學派一派の極端なる快樂主義と婆羅門僧の極端なる禁慾主義との中庸に出でられたるに職由す、何にをか八聖道と爲す、曰く、

(一)正信
(二)正思
(三)正語
(四)正業
(五)正命
(六)正精進
(七)正念
(八)正定

是れなり。

佛教道德の根本義はその平等主義に在り、然れど佛教は出家遁世して、三衣一鉢に淨行沙門たる眞の佛弟子と在家に止住して佛教を信ずるの俗人とは、その道德實行上自ら異なるもの無かる可からざるを認めたり、彼の妻子無く家累無きの僧侶と、日々の家業に勤めざる可からざる在俗の人とは、行住坐臥同一の法規を格守する能はず。然れば佛教は在家の俗人に向ひては、之れを出家沙門に課するが如き困難なる戒律を以てせず、唯下の五戒を確守せしむるものとす。五戒とは何ぞや曰く

(一)盡形壽不殺生
(二)盡形壽不盜
(三)盡形壽不婬
(四)盡形壽不妄語
(五)盡形壽不飲酒

是れなり。然れど此外僧伽に入りし者には、以上の五戒の外に、尙下の五戒を加へて十戒を守るを要すとせり、而して彼等勿論男女兩性間の慾を絶たざる可からざるものとす。

(六)盡形壽不著香華鬘不香塗身
(七)盡形壽不歌舞倡妓不往觀聽
(八)盡形壽不坐高廣大床
(九)盡形壽不非時食
(十)盡形壽不捉持生像金銀寶物

吾人は今や佛の教理に筆を擱くに當り、その所謂涅槃とは何ぞやとの問題に解答せざる可からざるに至れり。涅槃とは既に吾人の嚮者に一言せるが如く、生死を度滅せる解脫の至境なり、それは阿羅漢位を得て一切の煩惱を滅盡したる者は既に現世に於て早く涅槃に到達せしものなり、之れを有餘涅槃と謂ふ、之れに反して此煩惱を滅盡したる有餘涅槃は、死後に至りて初てその至完至全に到達するに至るものにして、之れを無餘涅槃と稱す、然れど濫りに無餘涅槃を彼岸に認めて、死期を急くが如きは佛の嚴禁する所にして、阿羅漢が無餘涅槃に入りたるの時は勿論一切の煩惱意慾を斷絶し盡したるの狀態なりと雖も、之れと同時にその意識全躰を

も滅盡するものなるや否やは佛の嘗て斷言せられざる所にして、斯くの如きは寧ろ空理として佛の黙けられたる所のものとす。

以上説明せるが如く、佛の教は純然たる自力教なり、佛は外界に神を頼みて神の他力に乗じて涅槃に到達するを教へざりき、解脱救濟は一に個人々々の自力修行の結果に待たざる可からず、此に於てか佛教には供犠の式を要せず、祭司無く祭儀無く、祈禱せらるゝの神無ければ捧ぐ可きの禱詞も無く、神に對して犯せるの罪惡なるもの絶へて有ると無し、神の存在は佛教徒の道德實行には何等の感化勢力も是れ有ると無かりき、嚮者既に見たるが如く吠陀の多神は婆羅門教に至りて一梵天の一神中に吸收し去られ消滅し了はりぬ、而かもその梵天の唯一神格そのもの迄も佛教は遂に之れを否定し去るに至れり、然れど佛教は敢て傳説上の神々を否定して特と更らに異を立つるとを好まず、強いて供犠の式をも攻擊せざりき、而かも佛陀は一切諸神の上に位しその教訓は神人の等く遵奉す可き所のものたり、雖然佛は若し嚴密に之れを謂へば決して信者崇拜の對象と謂ふ可からず、佛教徒の崇拜す可き對象は因果大法の下に信賞必罰の行はるゝ、一道德法あるのみ、人は唯此

道德の大法に依據し自ら其意を淨うして、以て獨り自ら能く己れを救濟し得るのみ、佛陀と雖も因果大法の世界に於ける道德的秩序を變更改作し得る所のものに非ず、佛は自因自果の到底眞に人類の免る可からざる必然的理法たる所以を教へたり、此間唯獨り他人の爲し得る所のものは、各人をしてその智眼を開きて邪道を去り、眞理の方途に向はしむるとを教訓し、之れに由りて人心を開發して解脱道證に自入自得せしむるの一事あるのみ。

佛教の信仰や單純にして道德的博愛的なる、能く容易に世界的宗教たるに至りたるとは上既に陳べたるが如くなり。然れど同一佛教もその後分布する邦土の異同に由りて頗るその形狀を異にし、大にその本來易簡直截の法門たるの性を失却するに至れり、既に當初より佛教は當時印度の民間信仰たる魔術と相結合し、阿羅漢は從來の婆羅門の如く神人の間を媒介する不思議力を有せるものゝ如く思惟せられ、斯くして延いて佛教本來の特色たる倫理思想を汙瀆するに至れり、元來佛教は無神教にして自力教たりしも、民間信仰と同化せんが爲めには有神教と成り、從て又他力教と化し去るに至れり、然れば印度從來の多神は最早や全然棄却せら

れたるも、佛その人は既に衆に崇拜の對象と爲り、諸種の不思議談は釋迦佛陀の一身を彩色し初めたり、啻に之れのみならず、釋迦以前の過去佛の神格化せられ、インドラさへ之れに附加せられて不可思議なる多神教は再燃し來りぬ、此に於てか佛生誕の靈場初轉法輪の聖地等は皆な一種神秘的の意味を有せる聖地として崇拜せられ、信者の必ず參拜す可き靈場となり、佛の遺物は又崇拜の對象となれり、斯くして佛教に諸種の神話的色彩と魔術の着色とは益々增加し來れり。此傾向は南方佛教よりも北方佛教に特に甚しとす、佛の生誕地印度の本國そのものに於ても、尙ほ佛教は諸般の附加物と著明なる變形とを蒙るに非ずんば、斯教の生々存續を保持する能はざるに至れり、而してその極アールヤ以外の信仰をも混合し來り斯くしてシヴは佛と同一視せられ非シュヌ亦佛に代りて崇拜の對象と成れり、斯くして佛教は漸次退化してその生土印度の地に跡を絕たんとするに至りぬ。特に回々教の印度にその教陣を宣布するに至りしは大に佛教のその本國に殄滅するを輔けたり。彼の佛教が北印度特に西藏に於て喇嘛教として表現するに至りては、その喇嘛法王は死せる佛陀の權化にしてその寺院組織は宛然羅馬教會の出現たるの觀あり、思ひて此に至れば吾人轉た佛教の命運の皈着せる所眞にその奇異なるに慨嘆せずんば非るなり。

之れを要するに原始的佛教即ち佛教の開祖たる佛の精神に於ける佛教は、全然無神論にして自力的なり人生の多苦觀なり、現世的と謂はんよりは寧ろ出世間的なり、斯かる宗教がその教祖の滅後人格的統一を失ふに至りては、忽ち法身佛陀の思想を生じ來り、此に元來無神教なりし佛教も遂に有神教と化し去るに至りたるは又實に免る可からざる自然の結果なりとや謂はん。

第八章　波斯の宗教

彼のアールヤ人の一部が一たび中央亞細亞の高原を離れて印度に入るや、又その一部は信度河畔裏海黑海及び波斯灣の中間イランの高原に入れり、此地は太古アリアナと呼ばれ、彼のアールヤ人種なる名稱も亦實に之れに基いせり。その言語は梵語に類し、その未だアールヤ人が印度及び波斯の兩地方に分離せざる以前に於ては、此兩民族は共に同一の文化を具有しをりしの證、歴然として存在せるを見る。果して然らば印度と波斯との兩人種はその初め同一の宗教を具有しをりし

や明かなり。而してアールヤ人種の一たび印度の地に入るや、その宗教は嬉々たる吠陀の樂天的天然崇拜より、漸次憂鬱たる厭世的悲觀に推移し去れり。之れに反して波斯のアールヤ人種は、印度のアールヤ人種に反して永くその快活健壯の氣質を失はず從て健全なる道德思想に富みしと雖も、印度のアールヤ人種の如く哲學的思辨は寧ろその短所とする所、而してその思想は希臘人を介して夙に歐洲人文の進歩に貢獻せしもの亦決して鮮少ならざりしなり。

以上論明せるが如く波斯印度の兩國はその思想慣例共に同一の根底を具有しをりしと雖も、彼の同一アールヤ人が一は印度に去り一は波斯に入るに及びては、その同一アールヤ人種も、思想慣例を如何に異同するに至りしかを研究するは、頗る重要なる問題なりと謂はざる可からず、デヴ即ち輝くもの、アラス即ち生けるものたる二神は、印度及び波斯の兩國の宗教に通有する所のものなりと雖も、そる特性に至りては二國頗る徑庭せるものありて存し、印度に在りてはデヴは將來永く善神として人民の崇拜至らざる所なかりしも、アスラは惡神として印度人の恐るゝ所となれり、然るに波斯に在りては之れに反して善惡二神はその所を轉倒し、アスラは善神として至上の神位を占め之れに反してデヴは惡鬼と轉化するに至れり、蓋し波斯及び印度の兩國に於て思想變化の此の相異を生ずるに至りたるは、此兩民族の一たび別れて東西に轉住するに至るや、此に諸種の風俗習慣山川氣候の變化せしに起因せずんばあらざるなり。

果して然らば彼の有名なる古代波斯の大宗教家たるツァラツストラは、アフラ神に關する如何なる教理を教へしか、曰く他無し、そは世界の起原を說明するの哲學なり、而かもそは印度の哲學の如く捨家遁世の哲學に非ずして、その教理の認了は直ちに强大なる意志力行を催促し來るの哲學なりとす、ツァラツストラはアフラの救護に由りて國家良民の困難を癒治せんとせしものなり、然れども其思想は決してツァラツストラ獨創の見に出でしに非ずして早く既に當時人民の腦裏中に胚胎し來れるの思想なり、ツァラツストラは唯そを教義的組織の下に發展しその實際的結果を引き來りたるに過ぎず。

ツァラツストラの思想は二元論なり、氏惟へらく世界開闢の當初に於て精神と事物との二大原因あり、此二大原因の協力合同に由りて世界は形成せられたり、此二大

原因は吾人々類の運命を規定し善人には心の樂地即天國を與へ、惡人には至惡の生涯即ち地獄を賜ふ世界の創造以後は此二大原因は各その責を盡してその職を退き、而て善惡の二大原理は各その自己の領域を分治するに至れり、之れよりして世は不斷善人惡人正邪曲直の爭鬪の修羅場と化し去るに至れり、世は實に善神アフラとダエヴの爭鬪なりとす、アフラは元來天の神にして、天光の普曜一切の生類に恩惠を賜ふの神なるが故にそを神化して善神と爲しゝなり、惡神ダエヴは之れに反して人類に一切の災害憂毒を流布するの神格なりとす。

ツァラツストラの教義は元來波斯に存在せし宗教思想を革新せしものなるが故に、その新舊兩思想は未だ全く調和せられずして幾多の矛盾を含有しをるを見る、例へばツァラツストラの思想に依れば、天國とは吾人精神の至善の狀態にして地獄とはその至惡の狀態を指しゝものに過ぎざるに、そは又イランの古代宗教の思想たる、死後の幸不幸死後の樂界苦界の二思想を相混同して表現し來り、キンヴト橋なる語はガタ讃歌中に屢々散見する所、而てそはイランが死者の亡靈その橋を過ぎて彼の世に渡るものなりと想像せし所のものとす、而てその死者にして善人なら

んか、キンヴト橋は彼を安全に彼岸に送りて、善人の樂土なる神聖の山中に至らしむるも若しその人にして惡人ならんか、彼はキンヴト橋の中央より墜落して苦界に墮落するものなりと傳ふ。その他ツァラツストラの宗教思想を世界に弘布せんとするに當りて、惡神の之れを妨害するものなりと想像せられたるが如き、ツァラツストラは神に獻る眞の供犧は獨り淨き人心のみありて存すと敎ふると同時に、諸般の供犧を禁せず、却てその必要を認めしが如き、正善の人は直ちに神の眞性をその心中に寫しゝものと敎ふると同時に、ツァラツストラは神をその外形に求めて、火の崇拜は依然として熱心に保持せられたるが如き是れなり。

ガタの讃歌に表はれたる宗教は、決して當時波斯人の信奉せる宗教に非ず、アエスタの他の部分に於て散見するが如き多神教は、當時人民一般の宗教なりしなり、蓋しアフラ(勿論ツァラツストラ自らもアフラを呼ぶに不朽なる精神の語を以てせしと雖も)の一神を讃美せしは特別の目的を有する讃歌のみに於て之れを見る可く、その他の部分に於てはツァラツストラ自らも他の宗教の開祖と同く强いて從來の民間信仰と爭ふを好まず、唯冥々の裏平和に當時既に時代精神を形成しをりし新

宗教の弘宣に努めしものと謂ふ可きなり。

ツァラツストラは人民をしてその善惡二神を分別し、その一を崇拜して他を極力排斥す可きことを以てせり、是れ實に波斯に於ける太古の宗教上に爲されたる一轉機たるものにして、從來の多神教的思想を排し如何なる神も等しく崇拜す可きものなりとの一般思想に大打擊を與へたるものなり、而かもツァラツストラは道德上よりして善神の拜す可く惡神の拜す可からざるを以てせしなり、ツァラツストラは人をして各自神の特性を與へてその善なるものを崇拜しその惡なるものは之れを黜け、惡神は決して自己の恐怖心よりしてその害を免れんが爲めに禮拜するの必要なきを知らしむるに至れり、又その天國に於ても善惡正邪の兩神は常にその爭鬪を試みつゝあるものにして、人はその神の正善に與みし邪惡なるものを極力排斥す可きものとす。

此に於てか波斯の宗教は全然二元論となれり、善惡の二神はその當初より相對立して世界の創造に與り、延いて世界の秩序中にその勢力を對抗保持しをるものなり、故に波斯の宗教に在りてはその所謂善神なるものも畢竟絕對至上の存在者に

非ずして、常に惡神の爲めにその勢力を制肘せられつゝあるものとす、是れ又波斯の宗教が印度の宗教と同一アールヤ人種の思想中に胚胎し、而かも印度の宗教が一元的傾向に發達進趨し來りしに反して、二元的傾向を執りて特種の發達を成遂せるを敎ふる所以なり。

斯くの如く幾多の諸神は波斯の宗教界に出現し來りしと雖も、アフラマスダの至上最高の神格たるは毫も毀損せられざるものとす、而て波斯に在りては彼のツァラツストラの抽象的思想を改造して、當時東邦諸國に行はれたる社會組織に適合せる幾多の人格的諸神を發現したり。例之ばアングラ、マイニウ即ち惡神アーリマンの出現の如き是れなり、是れ實にツァラツストラの思想中には未だ存在せざりし所の神格にして、實にツァラツストラ以後の發達なり、之れと同時に善神スペンタ、マイニウはその當初アフラと同一視せられず、却てアフラより分出し來りたるものなりと想像せられたり。要之ツァラツストラの惡の大原理なるものは、此に人格を得來りてアーリマンなる惡神と化し、爾來善惡の二元的思想は人事界及び自然界にその人格的發現を見るに至りしものとす。アフラ及びアーリマンの善惡兩

神は、各自善惡二力を代表して世界人生に干渉し、世界人生の何れの部分も皆な善惡二神の爭鬪を以て充塞せらる。アフラは光明なり眞理なり善なり智なり、之れに反してアングラマイニユは暗黑なり虛僞なり逆惡なり無智なりとす。善神の施設企畫する所のものは惡神必ず之れに反對し妨害す、死は生を奪ひ去り人類の罪惡を犯す等、一に皆な惡神が善神の目的を妨害するものたらずんば非ずとす。

波斯のエンヂダドは吾人の尙未論述せざりし宗敎上の新思想を表明せるものなり、そは實に波斯に於ける宗敎聖典中その最も斬新なるものなり、エンヂダドは淸淨潔齋の法則と規律とを信者に强ゆる所の宗敎上の法律にして、その思想猶太敎の敎ふる所に類す、エンヂダドの說く所の潔齋とは衞生上又は道德上の淸淨潔齋を指すものに非ずして、そは一に宗敎上の意味を有するのみ、詳言すれば波斯の信仰を以てしては不潔不淨なるものは惡神にして、惡鬼に關するものは一切不淨不潔なり、ダエヴの觸るゝ所のものは皆な汙瀆と爲るものなりと信ぜり、故に不淨を去りて淸淨潔齋に就くは、掃ひ除けにして惡鬼を放逐するに外ならざるなり、之れと同時にエンヂダドの命ずる所に由れば、地水火の三元素は最も神聖にしてそを

汙瀆するものは非常なる重罪なり、人身は汙穢なるが故に人は口にて神聖の火を吹く可からず、死躰は不潔なるが故に土や火の神聖に接觸せしむ可からず、唯之れを空中の高塔上に暴露し以て禽鳥の喙み盡すに一任す可し、要するにエンヂダドは淸淨潔齋を敎ふる宗敎上の法律なりと謂ふ可きなり。

今此エンヂダドが如何にしてマツダイズムの信仰中に入り來たりたるかを考ふるに、此淸淨潔齋の律法は波斯王ダリオスやアルタクセルクセス王の當時に於ては未だ重要なる位置を占有するに至らず、要するにツァラツストラの宗敎に在りては、淸淨潔齋の法律は決してその主要なるものに非ずして、そがその必要を見るに至りしは後世のマツダイズムに在りて存するものとす。マツダイズムは元來祭司を有せざる宗敎なりしが、そがメヂアに入るに及び祭司的となるに至れり、勿論波斯の宗敎と雖も元來祭司的萠芽を具有しをらざりしに非ず、ツァラツストラ自らも亦一個の祭司に外ならずとす、然れど單に儀式の執行者を以てその終生を了はるが如きはツァラツストラ出世の本懷に非ず、そが祭司的儀式化せしは全くはメヂアの地に入りし後ちに在り。マギの名又元來一種族の名稱なりしも、そはメヂア

に於ては祭司の稱呼となり、マッダイズムの別名とは成れり、實にエンヂダドの清淨潔齋法を設けしは彼のマギに在りて存するものなり、但し死屍を空中に暴露して禽鳥の餌食となすは恐くスキュタイ人の習慣より來りしならんが、此頃よりしてツァラッストラの一身も亦全く聖化せられ、その讃歌はツァラッストラが特に神啓に由りて記錄せしものと考へられ、神はツァラッストラに敎へてツァラッストラをして清淨潔齋の法律を手記せしめたりと傳へらるゝに至れり。

然れどマッダイズムの功果は、千歲磨す可からざる痕跡ありて世界の宗敎史に印せらるゝを記憶せざる可からず、そはマッダイズムが猶太敎に向ひて少からざる同情を有して、猶太の唯一眞敎をして世界的宗敎たらしむるの一轉機を賦與せしめたると是れなり、蓋しマッダイズムそのものも亦自ら世界的宗敎たるの特性を有し、ツァラッストラ亦自らそのイランの全領土内に流布せんとを努めき、然ればそがマギ敎として律法的に化石し去ると無く、能く精神的眞價を發揮するとを得たらんには、そは世界的宗敎として更らに一層廣汎なる天職を盡すを得可かりしならん、而かもアフラは世界人類をして等しくその玉座の下に跪拜せしむるの宗敎

としては、蓋し尙抽象的思想に過ぐるものあらん乎、實に世界的宗敎としてはその神や一層全能にして歷史的現實の人格的基底を要するや明かなりとす。

第九章　イスラエルの宗敎

イスラエルの民族はその當初互に同一の地方に遊牧の生活を營み、戰爭攻伐を事としをりしが、彼等が一たび捕はれて埃及の地に奴隷の生活を送るに至るや、遂に相率ゐて暴主埃及王の苛政を脫してその本國に復歸せし一團の人民より成れるものなり。此時に當りてイスラエル民族の首長は、その人民の宗敎上の口碑傳說に基きて、その敵愾心を鼓舞し、以て埃及を脫走し、茲にシナイ半島に漂泊流離すること數歲遂にヨルダン河畔の豐土を略して、その人民の一部はヨルダン河東に居所を定め、他の一部は更らに進みてヨルダン河を橫斷してカナアン種族の中にその領地を占有し、以て永住の根據地と爲すに至れり。

此に於てかその國民の成立と宗敎の組織とは同時に生成し來れり。各種族は各種族に特有なる神を崇拜し各自固有の宗敎上の儀式を有し、而して各種族の中又その家族の異なるに從て各家族に特有の祭儀を有しをりしと雖も、今や之等の各

種族各家族にのみ特有なる宗教心は次第に薄弱となり來りて、彼等をして據りて以て國民全團として動作せしめ、攻守利害を等うせしむるの關係益々その強大なるに至れり。モーゼが彼等共同の君主として彼等の中に鼓吹せしの神は非常なる狂熱と勇氣とを彼等の中に惹起せしむるに至れり。不知モーゼがイスラエル人に敬へし神とは如何に。曰く、ヤーヱー是れなり。ヤーヱーはモーゼが彼等小部族團結の首長として、部族共同の保護神として、彼等に附與せしの神格なり。蓋しヤーヱー即ちエホヴとは各種族の神々中、特に最も有力なる神格にして、シナイ山に其居を占めて風雨雷霆に駕して空中を飛翔するの神なり。シナイ山は各部族がその部族會議を開くの聖地にして、ヤーヱーは常に彼等と共にその會議に降臨す、是れ實に後世イスラエル人の間に重大なる事件ある時は、ヤーヱーがシナイ山より降臨し閃と雲との中に出現せる所以にして、その聲は雷と嵐との中に聞かると考へられたる所以なり。ヤーヱーは強大にして能く戰ふ、常に戰陣に出現してイスラエル人を援く。然れど之れと同時にヤーヱーは又イスラエル人の社會的道德的生活に重大なる關係を保有し、ヤーヱーの代表者はヤーヱーの神命を受

け、ヤーヱーの意を體して軍國の事大小となく之れを決す。斯くの如くヤーヱーは行住坐臥常にイスラエル人と共に在る所の守護神なるが故に、ヤーヱーとイスラエル民族とは他の神々に於ては嘗て見ることを得ざる一種獨特の密接なる親交を生じ來るを見るに至れり。

イスラエル人は今や移りてカナアンの土地に來るや、既に發達せるカナアンの宗教を採り來りて、以て自家宗教の不足を補はんと欲するの情、懇勃としてその胸頭を衝いて至るものあり。彼のカナアンの尊崇厚かりし古聖地の如き、イスラエル人の最も熱心にその崇拜を採用せし所のもの、蓋しイスラエル人の一朝移りてカナアンの土地に入り、以て遊牧の生涯を罷めて農耕の業に從事するや、彼等にして斯かる生活期に入りしにも係はらず、尙その農耕上經驗に基けるカナアン人の祭祀を奉ぜず、獨り依然として漠地の荒野に羊を牧ひ牛を放ちつゝありし時代の舊宗教を保持しをらんか、そは寧ろ怪しむ可き事と爲す。イスラエル人は今やカナアン人が、祭りて以て地に豊饒を施くの神とせるバアルを崇拜するに至りしは自然の理なり、然れど之れと同時に本來イスラエル人の守護神なるヤーヱーの崇拜

を等閑に附し去ることゝ能はざりき、イスラエル人はベアルを拜するに直立石マツセバを以てし又は之れが爲めに樹幹アシエラを用ゐたるが如く、ヤーエーに對しても亦その偶像を製作し石像を建てゝ之れを崇拜せり。即ちヤーエーは或は蛇形若くは牡牛の形を以て現はさる神の厨子即ちアルクはその最も尊崇せらるゝ所のものにして、之れを擔ひて戰場に臨めば神親ら戰陣に臨御して、イスラエル人を援くと思惟せり。即ちアルクはその中にヤーエーの在るあり、從てアルクと共にヤーエーの戰に臨みてその神力能くイスラエル人を援くと思惟せしなり。その他ヤーエーの像を祀れる宮には神籤に由りて神意に伺を立つるの事亦行はれたり。

然れどヤーエーに對する這種の崇拜は、そが元來イスラエルの宗教固有のものに非ずして他國の宗教より假り來りし所のものなるが故に、イスラエル人民中最も嚴密にその國神を信ずるの徒は、斯くの如き崇拜を以て眞にヤーエーに事ふるの道に非ずと爲し、且つや今や外國の土地に移住してその中に散在し外人中に雜居せるイスラエル人が、斯く外國思想に影響せらるゝこと甚しく、自國本來の古宗教

より遠かり行くことは、遂にはイスラエル人民の本來の國性を忘失しその國家の獨立を危うするの基なりと考ふるに至りてや、宗教上に關するイスラエル人間の爭論はこゝにその端緒を開くに至れり。此に於てかイスラエル人中二三達識具眼の士と一般輿衆もの間に意見の衝突を見るに至り、前者は宗教上寸毫も他國の要素を雜へずして、純粹にヤーエー一神の崇拜に熱衷し、以てそを其極度に至る迄發達進歩せしめんと努むるもの、後者はヤーエーに奉事するに他國の宗教上の儀式を採用し、若くはヤーエーと相并びて他國の神々を崇拜するも、毫も不可無しと主張するものなり。此兩思想の衝突論爭は永く彼の舊約書の上に於て、イスラエル人種がそのヤーエーの古宗教を全然忘失して、バアル神に泥酔し去りたるが如く記述せられたる所のものにして、而かも吾人の見る所を以てしては、元來イスラエル人とヤーエーとの關係に見るが如き、その國民獨立の保護神にして、軍國の大事一に必ずヤーエーの聲を以て裁決するが如き國民に在りては、その國家的宗教たるヤーエーの崇拜は苟もイスラエル人が他民族中に介在して生存しをる以上は、到底之れを忘れんと欲するも亦その忘る能はざる彼等自然の感情たらずんば

非ざるものとす。

先是イスラエル國は一定の國王無く唯師士と稱する各時代々々の勢力ある、武夫に由りて統括せられをりしが、今や國家的生存競爭の必須的結果遂に國王なるものゝ成立を見るに至れり。何んとなれば斯かる一定の國王を奉戴するに非ずんば、國權の伸張國民の獨立を得て期す可からざればなり、イスラエル人は一定の王を戴きて、その指令統御の下にヤーエーの人民としてその國力の增進强大を企劃し、之れに由りて以て外侮を防き國家の安寧を維持するの必要日一日切迫し來るに至れり。此に於てか國王は生ぜり。斯くイスラエルに王ありて定まりしより、爾來ヤーエーの宗教は又その國教と爲り、而してその祭典儀式頗る盛んなるものあるを見るに至れり。斯くして一世紀の年月を經ざるに、イスラエル人民の國力は旭日昇天の勢を以て、宗教的に又國民的に國家の勢力を增進し來れり。イスラエル人の發達や、今や曩の遊牧時代を脫して强大なる國家を組織形成し、代々の國王上に在りて下人民を統一し、政府國家の機關は著るしく整頓し來れり。此に於てか國家政治の發達と共に彼等の守護神たるヤーエー亦その性質を發達進化し

來らざる可からず。ヤーエーは今や宏大なる神と爲れり、そは勢力ある國王なり、正明なる判官なり、寛量なる保護者なり、熱心なる僚侶なり。そのヤーエーの行爲や人力を以て揣摩す可からず、そは亦實に不可思議なりとす。ヤーエーはイスラエル人を以て特に撰びて自己の人民と指定し、その不思議の神力に依りてイスラエル人を導き、イスラエル國民の存續を謀り、將來益々イスラエル國の繁榮を企畫する守護者とは爲れり。斯かる神力の不思議に擁護せらるゝイスラエル民族が將來無限にその國家の發達長榮を增進す可きは、固より當さに然る可きの事に屬す、何んとなればヤーエーの神力の至大なる、イスラエル國民の爲めに謀る所のものは何事も成らざる無ければなり。

此時に當りて從來よりイスラエル國に存在せし預言者の朴素的形式中よりイスラエルの大預言者なるものはその呱々の初聲を擧げたり。元來イスラエル人はヤーエーの憑格して、神意を其人物の口を藉りて一般人民に告示するものなるを信じ、而て斯かる豫言者中には聰明熱誠の士輩出せり。ヤーエーは斯かる人士の口を藉りて神意を表白し、豫言者は心の正態を失はず醒覺中に神夢に接し、能く他人

の聽く能はざる所のものを機微隱約の間に聽くを得て、諸の出來事を未前に語るを得るものなり。その豫言の事件や主として軍國の大事に關し、イスラエル國民の運命を豫言するものなり。例えばサムエルの預言に由りて初めてサウルを國王に奉戴しアビヤーはイスラエル王國の分散を預言し、エリア、エリシア、亦オムリ家の亡滅を預言したり。故に預言者は國家重要の事項に關して大勢力を有し、イスラエル國民の歷史上の危期に立ちて至大なる天職を負へるものなり。預言者は或は國民の意向に反對して神意を忌憚なく表白し、或は一般國民に同情して神意の在る所を告示す。斯くして陰に陽に預言者の言はイスラエル國に重きを爲し、究極その實行を見るに至れるものとす。換言すれば預言者の聲は、一世紀若くは半世紀毎に一度イスラエル國民の惰眠を醒起攪破する破天荒の警鐘なりとす。要するにイスラエルの預言者なるものはイスラエル國民の先覺者なり、國民精神の樞軸を爲せるものなり。イスラエルの宗教をしてモーゼ相傳の粹を保存してバアルの宗教に併呑せられざらしめんことに極力努めたるの人なり。然れど彼の聖書中にその遺書を有せる、幾多有名なる大預言者に至りてはそは、單にイスラ

エルの古代宗教をそのまゝに保存持續しゆくめみを以て、唯一の目的と爲しゝものに非ずして、又實にイスラエル人の思想界に一轉新を來たせり。新宗教と新神格とは預言者の腦裏に隱見せり。而かも彼れ等自らは敢て新宗教を主張するものなりと聲言せず、又敢て自ら新神の信仰を得たりとも自覺しをらず、而かも彼等の稱導する所は一に新宗教にして一大眞神の新信仰ならずんば非ず。

預言者はイスラエルの國步艱難の時に際し、ヤーヱーを觀ずるに倫理的道德的なりしこと遙に一般人民に勝さり而かも一般人民の低き程度の智識を以て之れを見る時は、預言者の進步なる思想は宛も神に反き國に背けるが如かりき。而かもその實先覺者を以て自ら任ぜる預言者たるもの、國運の將來に對して感ずることは深かりしと遙に一般人民に勝される者あり。預言者アモスはイスラエル人の遂に外人の手に捕へられて他國に流離す可き所以を預言し、イサヤー亦同く之れを預言して、その逃れて歸るもの僅に少數なる可きことを道破せり。然れど何が故にヤーヱーの寵民たるイスラエル人は斯かる辛苦艱難に網繆せられざる可からざるか、預言者は如何に此事實を說明せんとするか。預言者の先覺者を以て自ら任

ぜる、ヤーヱーを觀ずる一層進歩せる思想を以て之れを解釋し、今やイスラエル人が斯く外國の侮蔑を蒙るに到りしは、全くイスラエル人が神の命令を遵奉せず、神意を蔑視せしの致す所にして、ヤーヱーの嚴肅正明にして大義公道を重んぜる、たとへその自己と特別密着の關係あるイスラエル人と雖も、苟もそが神命に悖り神意に逆ふの行爲あるに於てはヤーヱーたるもの之れを假借するに私情を以てし、その懲罰を赦免するが如きこと寸毫も是れあるとなし。例之ば今此に一夫妻ありその夫たるもの若し妻の不心得の行爲あるに逢へば、そを赦すに當り、先づ豫めその將來を誡むるに相當の懲罰を以てせざる可からざると一般なりとす。是れ蓋し預言者の思想を以てすれば、ヤーヱーは正義の神にして正義の眼前には又敢てイスラエル人なると他國人たるとの別無ければなり。ホセア既に之れを言へり、イスラエル國民は既にヤーヱーに對して神意に逆ふの故を以て罪を犯せり、神は先づその罰をイスラエル人に徵せざる可からず。彼のイスラエル人のヤーヱー崇拜の道は、眞にヤーヱーに事ふるの所以に非ずして全然その方法を誤れり、何んとなれば彼等は他國の神を拜し偶像を製して以てヤーヱーを崇拜するを以てなり。預言者の眼を以てすればイスラエル國民のヤーヱー崇拜は決して適當なるものと謂ふ可からず、そは彼の偶像を以てヤーヱーを崇拜し邪教の神を禮するが如きは却てヤーヱーの神意を汚瀆する所のものなればなり。

預言者が重んぜし所のものは精神に在りて外形の儀式に非ざりしや勿論なりと雖、預言者も亦未だ絶對的に儀式を排斥したるに非ず、唯その排斥したる所のものは不適當なる儀式にして、その痛擊せし所のものはヤーヱー以外の他神の崇拜に在り。預言者と雖若し眞に神に事ふるの意を致してその祭儀を執行せんか、何ぞ斯かる祭儀迄も絶對的に擯斥し去らんや。然れど預言者は當時の人民が神に事ふるの道は、單に外形の虛式にのみ流れてその眞意を誤解しをりしが故に、斯かる動機より發せる供犧を排し儀禮を斥けしに在るのみ。故に曰く神に事ふるの道は犧牲に非ずして慈惠に在り、正義に在り、敬虔に在りて存すと。特に預言者は富者の貧者を壓し外形の虛式に泥着して信仰の本義眞理の本旨を侮蔑するを慨せり。壓逆、苞苴、暴飲、荒食は又預言者の大に誡むる所たり。然れどイスラエル人は今や舉世斯かる罪惡を犯して醜として慙ぢざるの時に會せり。正義と慈惠とを

愛せるヤーヱーが斯かる不正無慈のイスラエル人をして自己の寵民と呼ぶことを肯ぜず、彼等に相當の天罰を課し尙その改めざるに於ては、遂にそを罰するに彼等の殄滅を以て擬する、固よりその所なりと謂はざるべからざるなり。是れ預言者が倫理的に寫象せしヤーヱーの本性たるや固より至當の事と爲す。

斯かる神の觀念はイスラエル人の從來思惟せし所のものとは大にその有樣を異にし、一種斬新なる思想を以てヤーヱーを寫象せるものと謂はざる可からず、ヤーヱーはその人民の善惡正邪に關はらず、私情能く自己の人民たるイスラエル人を庇護するの神に非ずして、不偏不黨正義と至善との面前には、又敢てイスラエルと雖も寸歩も假借せざる公道の神たりしものなり。イスラエルの人民がヤーヱーの特に撰拔せし寵民たるは疑ふ可からざるの事實たりと雖、そがヤーヱーの寵民たりとの故を以て不正不義を肆にするも、ヤーヱーはその寵民たるの故を以て、之れを看過特遇するが如きものに非らずして、却てそを嚴重に所罰し、以てその自ら將來を誡飭せしむる所あらんとす。然り而してその誡飭や遂にイスラエル民族の殄滅に終はるやも未だ俄かに豫知し得可からざるものなり。正善の前には又

イスラエル人と他國人との區別あることなし。此に於てかイスラエルの國民的宗教はヤーヱーの正義慈惠の理想化と共に、世界的普遍的宗教に進化し去るに至れり。此に於てか初めてイスラエル國民の宗教上に普遍主義の發露し來るを見ぬ。

從來イスラエルの國民は想へり。ヤーヱーはイスラエル人の守護神にしてイスラエル國民はヤーヱーの寵民なりと。預言者は惟へらくヤーヱーがイスラエル人を守護するは、イスラエル人がヤーヱーの如く正善の人民たるが故なり、若しイスラエル人にして、一朝不義不正公義人道に背反するの行爲あらんか、斯かるイスラエル人は最早やヤーヱーの寵民たるの資格なきもの、ヤーヱーの眞宗教はかゝる人民の手を藉らず、又たそを藉るを要せずして存續し得べきものなりと。此に於てか預言者の宗教は國民的宗教の圈套を脫して世界的となり、イスラエルてふ偏狹なる差別主義を離れて普遍的平等の性質を帶び來れり。ヤーヱーの眞精神は單にイスラエルの如き小民族の中に踉蹌しをるものに非ずして一に眞理に在りて存しイスラエル人の所謂主の日なるものは斯かる眞理の光明に由りて正邪

善惡の審判を蒙り、以て眞に正善なる人榮へて邪惡者滅ぶるの日なりとす。此に到りて預言者の思想は普遍的にして、從てヤーヱーは一國の主に非ずして全世界の神たり支配者たり、創造者たるものと謂はざる可からず。全世界を通じて眞の主は唯一ヤーヱーあるのみ。ヤーヱーは世界唯一の神なりとす。此に於て預言者の唯一神敎は生じ來れり。勿論預言者と雖もその初期の者に在りては彼等自らは獨りヤーヱーの唯一崇拜に止り、敢て他國人の神々の存在迄も否定せざりしと雖も、漸次その思想は發達進步し來りて、一切餘他の神々をも排斥し去り、以てヤーヱーの唯一神敎を樹立せんと企劃するに至れりしものとす。

前既に一言せるが如く、ヤーヱーの唯一神敎は敢て突爾として成來せしものに非ずして、預言者の漸次此思想に到達するに到りしものなり。故にアモスとエレミアとの間には著大なる思想の徑庭ありて存せしは疑ふ可からざる事實なり。而して預言者の一たび唯一神敎の思想に到達するに至りしは、印度や希臘に於けるが如く哲學的思辨の結果然かりしに非ずして、預言者の倫理思想之れをして此に至らしめたるものとす。蓋しヤーヱーは正義の神にして而して道德的理想なり。

而かも道德上の理想は一にして二ある可からざるものなるが故に、換言すれば道德上の理想は唯一たる可きが故に、其正義の神吾人道德上の理想の神たるヤーヱーも又唯一にして二ある可からず、是れ預言者がヤーヱーは唯一にしてヤーヱー以外又何等の神格ありて存するを許るさゞりし所以なり。ヤーヱーが吾人に要求する所のものは正善にして眞の供犧とは牛や羊の有形上の祭肉に非ずして、誠意や正行の無形的精神に在りて存す。神人の關係は恐怖に在らずして愛に在り、神は高く神は聖く神は義なりと雖、而も神は又愛を容る。人は神を崇拜するに盛大なる供犧を以てするを要せず、そは一に誠心誠意の供犧に在りて存するものとす。神人の關係は恰も慈父の愛兒に於けるが如く、其間峻嚴なる律法ありて存するに非ず、神人を融合する聯鎖は愛情の一羈約あるのみなりとす。

以上論明せるが如く預言者の宗敎的意識はヤーヱーを寫象するに全然道德的眼光を以てせり、神と人との關係は恰も父と子との如く夫の婦に於けるが如く然り。換言すれば今や神人の關係は從來の如く國民全團を以て神に對せしものに非ずして、各個人皆なその心の淸き事をのみ致さば、以て能く各自に神に交はるを得可

きものとす。此に於てか從來イスラエルの宗教が國民全部を擧げて神に事へしに反して、個人と神との關係を生じ來り、宗教上の個人主義は初めてイスラエル國民の思想上に表現し來るに至れり。而して神を觀するに敢て哲學の空理に由らず、そを以て倫理道德の理想と爲し、之れを正義と愛とを以て寫象せし豫言者の思想は實にセム民族思想の特性なりとす。

是れより後ち猶太人の一たび捕はれてバビロニアに在り、久しくオイフラテス河畔の月に胡角斷砧斷腸思鄕の至情慰むるに所なきの夜深く唯一眞神の啓示を覺悟し、以て宗教上に於ける猶太民族の使命を自覺せり。此に於てか猶太人が一旦許るされてその本國パレスチナに復歸するや、大にバビロニアに在りて養成し來りし神の觀念を實現せんと務め、先つ神殿をエルサレムに再建し以て唯一眞神ヤーヱーに奉事せり、此に於て彼等はその口碑傳說を參酌して諸般宗教上の制度儀式を改定せり。是れ實に學僧エッラの事業なり。時に紀元前四百四十四年なりとす。エッラはバビロニアより携へ還へりし所の律法と申命記とを合せ稱して以て之れを僧法と呼べり。世に所謂モーゼの五書なるもの是れなり

僧法の判定はイスラエルの宗教史上に一大時期を劃し、從てイスラエルの宗教史は之れをバビロニア追放前後に由りて區別するを得可く、前者は之れをイスラエルの宗教史と稱し、後者は之れを猶太の宗教史と稱す。請ふ吾人は左に猶太の宗教に表現し來りし新事實を摘撮要述して以て本章を終へん。

猶太人は今や日に敵國外患の爲めに厄難困苦の深淵に墜落しつゝあるに至れり、此に於てか豫言者が曾て彼等に敎へたる、所謂主の日なるものゝ來る可き希望は愈〻增進し來るに至れり。是れ猶太人の現實界がその意を滿足するもの益々減少するに至るや、その抱負希望を未來理想の世界に持續するに至るは自然の數なればなり。實に猶太人は曾て豫言者の彼等に敎へたるが如く、主の末日審判の日來ること又遠からずして、神は全世界の人民を審判してイスラエルの敵を殄滅し、イスラエル人は神の懷裏に攝取せられて神人の融和此に成り、イスラエルは全世界に於ける宗教上の首都を成し、人事界は平和泰穩に歸すると同時に自然界も亦笑ひてイスラエル人を歡迎し、猛獸狂れ毒蛇親み天災地妖亦全くその跡を收め、世は天國樂土と化成するに至ると思惟しをりしなり。故に彼等の天國樂土は未來死

後の世界に非ずして、現在の世界に在りとす。而して此思想を巧に描出して大成せしものを豫言者以後に出でたるダニエルの如きアポカリプセ書の記者と爲す。猶太人が永く外敵の侵害殘毒に耐へたる所以のものは、一に此將來の希望一閃、彼等の將來に輝きしものありしを認め居たるに由る、而して此思想の趨歸する所遂に末日審判に先ちて、神が救主を降してイスラエル人を塗炭に援ふ可しとの、メッシアの思想を醞釀し來れり。然り而して此思想が如何に當時の猶太人中にその高潮を呈し、而して耶蘇基督の降誕が如何に猶太人の豫想せし救主の理想を滿足せざりしかは新約全書を一讀するものゝ何人も想見するに難からざる著明の事實ならずんば非ず。

古代の猶太人中には來世の思想甚不明瞭にして、人々その死後の存在は恰も幻影の朦朧たるが如く之れを生前の存在に比すれば、殆んどその實在性を有せざるものと考へたり。その所謂シェオルとは下界にして、死者の來り至る所なりと思惟せらるゝ雖、シェオルに於ける死者の存在は、此世に於けるが如く有力なる生存に非ず。猶太人中には死者の靈を再びシェオルより呼び出し來りて、その生前の經歷を語

らしむるの習慣ありしが、そは古代に於て疾く嚴禁せられき。人がその死後存續を信ずるとも亦詩篇には痛く之れを嚴禁せり。故に猶太教の舊約書に於ける宗教なるものは、主として現世主義にして、未來の觀念は頗る不完全不確實なりしなり。未來神の賞罰も人の死後に獲來るに非ずして、人一たび死して棺を覆ふに至れば、萬事全く休し神の寵惠に沐浴すること復能はず。天國とは畢竟死後に來る可きものに非ずして、現世に在りて存し、エルサレムは單に現世に於ける未來天國の首都を爲すものとす。然れどその後ち猶太人の死後に關する思想は漸次變形し來りて、人は凡てその死後再び蘇生するものたることを確信するに至れり。人或は猶太人の死後再生の思想は波斯より輸入せし者なりと說けども、必ずしもそは獨り外國思想の影響とのみ見る可からず、ヨブの如き正直純潔の士が、此世に於てその報償に與かること無くして、遂に死に至りしかば、ヨブは死後必ず再生して神のヨブに幸することあるを信じダニエル亦善人の再生して天國の福樂を享け、惡人の再生は疾苦の罪罰に遇ふ可きことを說けり、從ひて彼の神の道を宣傳するが爲に殉死せる豫言者なるものも、亦必ず再生し來りて神の寵惠に沐浴す可き

ものと信せり。

之れを要するに猶太人の宗教は、今や頗る矛盾せる思想の幾多その間に併立するを見る。エルサレムに於ける祭儀主義の猶太教と、人々教會堂に相遇ひて聖書を誦せる精神的猶太教とは頗る相背戻し、而して猶太人が獨り自ら眞神の教を全世界に弘布するの天職を擔へるものなりと自任しをるにも關らず、而かもその偏狹にして驕慢なる、多く他人種の惡む所と爲り、却て自家本來の宗教的天職を全うすること能はず、遂に律法的猶太教は博愛的基督教に待たざるに臻りて止みぬ。

第十章　回々教

回々教は佛教基督教に後れて起こり、實に耶蘇紀元を距る六世紀の後なりき。從てその中には基督教の思想の竄入しをるもの亦鮮からず。その特性は全然セム民族の宗教にして、曾て猶太教がセム民族の宗教より起こり世界の宗教たるの使命を果たす能はず、之れを基督教に讓りし所以のものを以て回々教は自らその任と爲し、セム民族の宗教上の偏狹主義を變ぜず、而かも國民的宗教を脱して世界的宗教たるの位置に到達するに至れり。

回々教の弘通は頗る迅速なるものありて存せしは、吾人の驚嘆に堪へざる所なり。回々教は一切の宗教を全然掃蕩し去りて、宗教上に一大新時期を劃出せり。故に亞拉比亞人は回々教の勃興以前を以て蒙昧期と稱し、以て之れを回々教以後の時期に峻別し、回々教は恰も忽地の神賜に出づるが如く誇ると雖、近世亞拉比亞古學の研究は、不完全ながらも吾人をして回々教の歴史的發達の狀態を測知せしむるに至れり。

馬合默は耶蘇紀元五百七十年メッカに生れシリアに通商せる隊商コライシュ族に屬す。此部族は亞剌比亞の宗教上重大なる聖地の守護職を奉ぜしものなり、是れ馬合默が早く生れて亞剌比亞の宗教に親炙せし所以なりとす。馬合默は夙に兩親を失ひその親戚に養はる、その親戚の家甚貧なりと雖亦能く馬合默を遇せり。馬合默は幼にして野に牧羊の事に從ひ、その間獨り沈思瞑想を專らにすることを得たり。壯年の頃一富豪の寡婦カヂヤの爲めにその家政に與り、シリア、パレスチナに旅行し、此に馬合默は猶太教基督教の思想に親炙するに至れり。二十五歳にしてカヂヤと婚し多くの兒子を擧げたり、カヂヤ時に四十歳なりき。馬合默は身

幹その中を得、面白く、容貌快濶甚人に愛せらる、特に商業に精はし、然るに馬合默は結婚の後數年にして深く思を宗教上の事項に潛め、ハニフの一人となり、大に進歩したる宗教を要求しつゝありき。馬合默の期する所は唯一神教に在りしも、人種的關係を過重する猶太教を好まず、又天父と神子とを併立する基督教を以て滿足せざりき、然ど唯一眞神の崇拜は又馬合默の理想なり、唯一眞神に服從するは馬合默の目的なりき。蓋し回々教即ちィスラムとは神に服從するの義にして回々教徒即ちモスレムとは神に服從する信者を意味するものなり。當時ハニフは末日審判の基督教的信仰を有し、この故を以て時々世間的生活を離れて出世間的苦行を實踐せしものなり。

馬合默亦宗教の沈想思惟を目的として一時世を遁れたり。思ふに當時ハニフの信ぜるアルラーの唯一神教と、馬合默の生地メッカに行はれる無意義の形式的祭儀にのみ拘泥せる民間信仰とは實に雲泥の懸隔ありて存するものなり。此時に當り馬合默は自らハニフと爲れり、居ること數年、馬合默は一日廓然大悟、自己のアルラーの道を敎へて一般人類を救濟す可きの天職を負擔するものたるとを

明かに躰認せり、蓋し馬合默は資性癲癇ヒステリーの病患とも見る可き、一種の激發感動し易き病的本性あり、遂に此性質の向ふ所、自ら天使の來りて神の福音を口づから告げたるを確信するに至れり。

馬合默は齡四十にしてその思想漸く醇熟し來れり、馬合默は此思想を天啓として享受せり。一夜馬合默はヒラ山上に眠りし時忽ち天使の來りてその目前に現はるゝあり一卷の書を携へ來りて馬合默にそを讀めと命ぜり。馬合默之れを辭すれども聽れず、遂にそを開きて之れを誦せり、コーランの初節即ち是れなり。

馬合默惟へらく人は何人もアルラーの命に服從せざる可からずと、是れ馬合默が先づ第一に天啓としてその國人に告白せし所のものなり。アルラーは今や此理を世界人類に告示せんが爲めに、その天啓を馬合默に下だせり、故に馬合默は豫言者なりとす。尤も此等の天啓は必しも馬合默のみに特有なるものに非ずして、猶太教、基督教皆な然らざるはなし、斯くして數年の後ち馬合默は再び天啓を得て、自らその主アルラーの豫言者たることを自覺し、そは眞に唯一眞神アルラーの天啓なりと確信せり。然れども人皆な馬合默を嘲りて狂となし妖魔の魅入りしもの

なりとせり。

馬合默は直ちにその神に受けたる天啓の眞理を、其自己と最も親密なるものゝ間に布敎せり、然れどその天啓や決して新奇なる眞理に非ずして、古の道なり、そはアブラハムの宗敎なり、猶太敎基督の奉ぜる眞理に外ならず。否な馬合默自らも自己の發見せし所を以て敢て斬新なる新宗敎なりと思考せざりしなり。馬合默は先づ自己の親戚家庭に向ひて、至上の主正義の判官たるアルラーの前に拜跪す可きことを諄々として敎誡せり、彼等は邪敎を去りてアルラーの正道に歸依し、豫め報酬を冀待して人に恩惠を施すと無く能く節制を守るべきことを敎誡せり。然れどメッカの人民は何ぞ能く馬合默の言に服ぜん、此に於てか馬合默は奮然蹶起して、從來亞剌比亞の信仰を誤まれる所以を指摘し毫も假借する所無かりき。馬合默に對する世人の攻擊は一層その火の手を高め來れり。馬合默の說法に由れば、今や亞剌比亞人の祖先は皆な地獄に墮つ可き大罪人なり。現在に於ける一切の亞剌比亞人はアルラーの責を免る能はざる者なりとす。斯かる宗敎は何ぞ能く時人の尊信を受けんや、馬合默の迫害せられたる又實に所以なきに非るなり。馬

合默は他の豫言者の如く又世間より誤解せられ嘲笑せられ、迫害せられたり。而かも馬合默の思想は蟠根錯節に逢ひて益々其利器を見るに至り、馬合默は時々天より來る神の默示に向上一路の光明を認めて勇往直進したり、而かも此等諸般の迫害は馬合默をして、多少時世と折り合を附けんかとの思想を起こさしめたり。馬合默はアルラーの三女神なりと傳承せるメッカ人の信ずる所の神々を全然拒否することを止めたり。是れ大にメッカ人の悅ぶ所となりしも、馬合默は天使ガブリエルが馬合默の此行爲を非難するの聲を聞き、翻然として直ちにそを取消したり。此に於てか馬合默とその敎徒とは從來より一層劇甚なる迫害に遭遇せり、彼等は國人一般よりその交際を絕たれたり。而かも馬合默は一層そのアルラーの唯一神敎を鼓吹し、偶像崇拜を罵倒し去れり。然れどメッカの人民は馬合默の未來死後の世界を信ずるを嘲笑し復活の信仰を罵詈し去るに至れり。

哈蘭を繙く者は何人も馬合默の宗敎狂なりしことを想見するに難からざる可し、而かも馬合默は單に宗敎狂なりしに非ずして、幾多の信者は敬虔の心を以て馬合默に服從しをりしものなり。馬合默は奴隸が馬合默の敎を奉ぜるものゝその主

人の虐遇を憂慮して、馬合默は彼等に彼等が馬合默の信者たることを公言す可からざることを注告せりと云ふ、又以て氏の本性の那邊に在りて存せしかを察知するに足る。是れ當時氏が敬虔誠實なる信者を得たる所以なりとす。

此時に當りて馬合默はその妻カヂヤを喪へりメッカ人の迫害は日に劇甚を致し來れり。此に於てか馬合默は暫くその布教の地を他に更へんことを企圖し、偶々タイフ人の馬合默の來りてその教を布かんことを請ふに任かせて、彼の地に趣きしも、遂に反對に逢ひてメッカに復歸せり。時にメヂナは夙に猶太思想に熟し偶々巡拜者のメヂナより來りて馬合默にその地に布教せんことを請ふものありしかば、馬合默はメヂナに新教田を開墾せばやと思ひしも、尙心に深く慮りて姑く決せざりしが、元來メヂナ人は猶太人の救世主メッシアの出世を稱道するを聞き、斯かる救主のその同一種中より出でんことを希待し、而かも馬合默は實にメッシア其人ならんと信ずるに至り、遂にメヂナの信者は馬合默に誓ふにアルラーの一神の外、如何なる神をも信ぜず、偷盜を愼み、私通を止め、幼兒を殺害せず、惡口を禁じ、天使の命を奉ず可きことを以てせしかば、馬合默は遂にメヂナにその教陣を移すの決心を固

うするに至れり。然れど馬合默の全然メヂナに逃走を企てしは實にその敎敵の馬合默を暗殺せんと企つるに至りし時に在りて存せしものにして、馬合默のメッカよりメヂナに遁逃せしは實に紀元六百二十二年六月十六日なりき、是れ實に回々敎徒の紀元とする所なり、何んとなれば此日や實に又回々敎の勝利の濫觴なればなり。而してメヂナ人の馬合默に失ひし所の誓約は實に馬合默が實地亞剌比亞の宗敎上に試爲したる革新の第一歩なりと謂ふ可きなり。

メヂナに來りし以後馬合默の境遇事情は俄然一變せり。メッカに在りては迫害窘窮至らざること無かりき、馬合默は茲に漸く斯敎を布宣するの手掛を得て、頗る有望なる將來を彼岸に瞥見するを得たり。崇拜上の儀式を組織し、私鬪を嚴禁して自ら獄訟を裁斷し、人心をして一にアルラーの一神に葵向せしめたり。此に於て純乎たる神政々府はメヂナに起り、馬合默は實にその首長となれり。斯くして馬合默は政治宗敎共にメヂナ人民に適合する樣そを改造變作せしを以て、大に時人の尊信を博するに至りぬ。

馬合默のメヂナに遷るや、宗敎の儀式を組織制定せんとするに在り。此に於て回

々教の教會は猶太教會又は基督教會を參酌して建設せられたり。回々教の教會は最早や供犧以て神に事ふるの禮拜所に非ずして、諸人をして宗教的情操を修養せしめんとするの會堂なりき。メヂナの禮拜堂に於ては、馬合默自ら宗教上の儀式をその信者に傳へ、嚴肅なる修行を以て彼等を訓練せり。

此に於てか從來は血統上の關係に由りて成立せし宗教上の團合は、今や宗教上の信仰に由りて生成せらるゝに至り、回々教の各信者は縱令その人種を異にするも皆な一樣に同一信者同朋なるとを信じ、互にその親交を厚うせり。今や宗教上の信仰は風俗習慣を一變せり、メヂナ人は馬合默の教に從て酒を禁じ、美術を愛玩することを罷め、回々教を信ずるの婦人は凡て面紗を用うるに至れり。要するに回々教徒は一切從來の社會を離れ、未信者の團體以外に別天地あることを信ぜり。信者は未信者に對して有らん限りその勢力を盡して抗爭す可きを以てその義務と爲せり、是れ實に回々教の夙に遍ねく天下に弘布せらるゝに至りたる因由なりとす。信者は異教徒と戰ひ勝てば如何なるものを掠奪するも不可なること無く、若し不幸戰沒するに至るも、神は信者の靈を導きて直ちに天國樂園に赴かしむる

ものなりとの信仰は、回々教徒の信念を鼓舞策勵せり。此に於てか古代亞剌比亞の風習が休戰を主張せし聖日に戰ふもそが苟も神の爲めに未信者を降服するの戰爭なれば毫も不可なること無く、勇往奮進身命を屠して爭ひ、その一國同朋と雖も、回々教徒たらざるの徒に對しては、寸毫も遲疑すること無く、干戈を交へ、その捕虜は一人も殘すことなく悉く鏖殺し、敵に與みせる部落は容赦無く敵陣陷落の後に於て殺戮するに至るものとす。

斯くして馬合默は自己の宗教の漸く實際上の勢力となるに至るや、他宗教のその自己宗教に不利なるものは着々そを彈劾するに至れり。然れどその當初に於ては馬合默と雖も斯くの如く激烈慘酷の手段を取りたるものに非ず、猶太教、基督教共にその自己所信の宗教と全然その本質本體に於ては同一なるとを主張せり。哈蘭は他の宗教の聖典と同しく神の啓示せるものにして、猶太教、基督教を繼承してその同一眞理の開顯せられたるものに過ぎず。馬合默自らも亦實に猶太の各豫言者や基督の後繼者たるに外かならずと說けり。馬合默も亦他宗教の開祖と同しく、强いて自ら新宗教を創設するものなりと公言せず、唯在來の信仰を一般世

人に明示せんが爲めに出現せしに過ぎずと主張せり。是れ當初に於ては馬合默の猶太教及び基督教に對して、特に好情を表せし所以なりとす。特に馬合默のメヂナに遷つるや、猶太教徒に對しては最も親密なる同情を表しをりしなり。然るにその後ち新キブラーは布告せられ、回々教徒は最早やエルサルムを以て中心とせず、メッカを以て中心とす可きことを宣告せられ、爾來その信者のエルサレムに向ひて神を拜せず、メッカに面してその神を拜す可きことを以てしたり。之れよりして回々教徒猶太教徒と鬪諍絶えて止む時なく、その勢益〻激烈となり、遂ににメヂナに於ける猶太人の勢力の全滅を以て終はれり。馬合默は又回々教を以て基督教と全然相異なる所以を明にし、三位一體說を排斥し、耶蘇神子說を打擊し、基督教の勢力を亞剌比亞以外に放逐するに至れり。然れど馬合默の私行は馬合默のメヂナに來りし以後頗る修まらざるものあり、その妻の如きも同時に二人以上を有し、一見吾人をして嘔吐を催さしむるものあり。而かも馬合默は名を天啓の命ずる所に藉りて斯かる非行を實踐し、靦として少しも耻づるの色無かりしは實に喫驚の外か無きの事實なりとす。

今やメッカは回々教の中心點となれり、メッカは眞宗教の靈場と成れり。六百三十一年には馬合默は自らメッカに參拜し、一切巡拜者の模範的祭儀の式典を制定せり。その祭儀の詳細なるものは、十九世紀に至り彼のバートン氏自ら巡拜者の一人として、親しく其の祭儀の式に臨みたる記事に就いて知る可し。カアバの堂壁上に在る黑石を接吻し、ツェニム、ツェム井に掬して殿堂を七廻し、小兵に競走し、七石塊を投じ、山間に犧牲を屠る等は一に皆な是れ回々教の祭儀法式ならざるは無し。今此祭儀の起因は詳ならずと雖とも恐らく亞剌比亞の口碑的宗教上の祭儀に基き、之を改良して以て馬合默が回々教の儀式に制定したるものたるや疑ふ可からず、然れば此點に於て馬合默は亦古代宗教の改革者たらずんば非ず。回々教はメッカの宗教的祭儀を順用せり、是れ回々教の亞剌比亞國の國教を爲しゝ所以なり、今やカアバの主神たるフバル神はその跡を藏くしてアルラーの一神之れに代はれり。然れど馬合默はカアバはアブラハムの教へし所のものにして、回々教に先ちて一神を吾人々類に告知せし所のもの、そは實に回々教に先ちて存せるの回々教なりと主張し、以て回々教に歷史的尊嚴の旨趣を寄與して、偶像崇拜を誡めたり。是れ

恰も使徒保羅がアブラハムを以て基督以前の基督にして、基督に先ちて一神の道を說きしものなりと主張せしとその軌を一にせるものと謂ふべきか。

馬合默は回々敎が亞剌比亞全國の宗敎と認容せられたる後ち、久しからずして病歿せり。時に紀元六百三十二年六月八日なりき。馬合默は早く既に回々敎の亞剌比亞一國に限ぎれる、の宗敎に非ざるを知り、劍と火とを以てそを他の國民に傳道す可しとの後事をその遺弟に托せり。馬合默は回々敎のみ獨り能く眞宗敎なりし所以を覺悟しそを宣傳するの使命を自覺せり。此に於てか馬合默はメヂナより使を遣して羅馬東帝ヘラクリウスを初め、波斯王、埃及王に說きて回々敎に歸依す可きことを勸告せり。使者その功を奏せざりしかば馬合默は今や兵力を以て眞信仰を弘通宣布せんとを企圖し、馬合默は遠征諸將士に向ひ、惠みの神アルラーは眞信仰反對者に對しては、その生命を屠り財產を奪ひ婦女を姦するも尙可なるを許るせりと說きたり。此に於てか馬合默の死と共に希臘遠征は回々敎徒の間に企畫せられたり、是れ實に回々敎の世界的普遍的宗敎として、世界の舞臺上に表現して、その世界的活動を將來に豫期せし濫觴なりとす。

等十一章　基督敎

吾人は今や本章に於て基督敎の發達を叙述せざる可からざるに至れり、然れば吾人は學者の位置に立ち、宗敎的信仰を外にして、純乎たる科學的眼光の下に基督敎を論明せんと欲す。

吾人はイスラエルに於ける預言者がそのバビロニアの追放に前後して、各イスラエル人の偏狹なる從來の宗敎心を排斥し、供犧に由りて神を喜ばしめんとせし習慣を打破し道德上神人の新關係を樹立するの萠芽を開けるを說けり。換言すれば從來イスラエル人の國民的宗敎を變じて、世界的宗敎たらしめ、その神人の關係は從來より一層親密に、神は人世を治むるに法律を以てせずして神啓を以てし、エルサレムは單に猶太人の信仰中心府たるのみならず、又世界萬國の民をして、等しくその宗敎上の中心點として、エルサレムに葵向せしめんとせしものなり。

雖然惜む可しイスラエルの宗敎は、斯かる普遍的特性を充分開發する能はずして、猶太人はバビロニア追放以後は層一層從來の偏狹主義に陷りその自家の双肩に擔へる偉大なる天職を忘却したるものゝ如し。猶太敎は縱令その心髓核實に於

ては預言者の思想に外かならざりしにもせよ、而かもそは今や虚式的外儀の末に齷齪せる化石的宗教に墮落し去れり。猶太人の偏狹にして驕慢なる、宗教は恰かも自家一種族の獨占物なるが如く思惟し、世界萬國の人民をして等しく同一宗教の慈光に沐浴せしむるを欲せざるの有樣を呈しき。猶太人の偏狹的隔在主義は猶太のマッカベウス王朝の當時、一時希臘主義が滔々として猶太人の思想界を風靡席卷せしに抗して、大にその國性を維持するの上に與りて功ありし所のものなりと雖、之れが爲め猶太教は自家の世界的宗教たるの使命を全うする能はざりしは、頗る遺憾の極となす、矧んやその後ち猶太人の宗教も漸次その神の理想を失墜し來るに至りたるをや。祭司や學僧はその勢力を社會に肆にし、傳說を重んじ口碑を尊び、外儀の末に狂奔して道德の大本を忘れ、遍一切處たる唯一眞神は漸次その光を收め、て幽鬼の信仰は獨りその宗教に横行し、人心は益々安心立命の礎地を失ひ、加ふるに政治上猶太人の獨立を喪ふに至りては、國步又艱難、世路の辛酸頗る甚しく不幸の深淵に沈淪して僅に思を過去の回顧と將來の空想とに馳せ、以て僅にその希望を持續しつゝありしものとす。

此時に當りて耶蘇はバレスチの地に生れたり。是れ基督教がその當初に在りては、先づその活動の地を猶太教中に求めし所以にして、而して時機の順熟を待ちて衝を世界の中源に爭はんとするに至りたる所以なりとす。

基督は惟へらく嚮者に彼の預言者の說ける神の御國天國なるものは、當時普通猶太人の想像せし如き遠き未來に求むべきものに非ずして、バプテズマのヨハネが既に謂へりしが如く、そは邇きあたりに迄接近し來りをれるものなり、換言すれば神の御國は遠き將來に求むるに及ばず、近き現在に在りて存すと。然り神と人との親交は今現に成立し居れるものなり、蓋し神は天父にして人はその兒子なり、神人の關係は父子の如く親接せるものにして、人の務めとする所は自ら能く神人の眞に父子たる所以を躰認するに在り。故に宗教の要は實に此神人の父子たるを實現せんと努むるに外ならず。父子の關係ある神人の間を媒介するものは父の慈愛と子の信賴と是れなり。愛と信との外には又何等の外的虚式虚禮もその必要を認むる能はざるものなり。神の崇拜は必ずしもエルサレムに於てするを須るず、隨時隨所にそを成遂し得可きものなり、そは畢竟外形上の交はりに非ずして

精神的鎖鑰の結合なり。神とは既にその兒子の請はざるに與ふるの慈父なり。人とは父の請はざるに與ふるを知るも、而かも所禱に由りてその慈愛に沐浴せんと務むるの從順なる愛子なり。故に神人の關係は全く純道德的なり。神人の間を結合するものは人種の異同に由るに非ず、外形の儀式に依るに非ず、神人の間を結合する所のものは父子天眞の愛に外ならず、信仰に由りて人心の奥底に得たるの幸福は一切の恐れを排絶したるの愛なり。故にそは又自由に個人本來の勢力勇氣を開顯發露せしめて、寸毫の遺憾無からしむ。人は自ら能く自己の天職を覺知し自己の理想を實現するの新勢力を體認するものなり、神は人世に來迎して人はその靈光中に攝取せられ、極まりなき無限の神力は人心中に臻り來りてその活潑々地の活動を演ずるものとす。

基督教の特色とする所のものは、神の現實の勢力にして哲學者の謂へるが如き空漠たる思想にも非ず、又猶太人の古來思惟せるが如き峻嚴酷烈なる專政國の君主の如きものにも非ずして神は愛なり。而かもその愛や牺牲の愛に非ずして、眞正の慈愛なり。故に神は愛なりと謂ふも、そは神の正義の思想と撞着するものに非

ず、その愛や又正義の思想と裕に相容るものなり。斯く神人の間を考察する、是れ實に基督の掬思特見に出づる所のものゝ第一なり。基督の所謂神は捨家棄慾世を厭離して初めて之れに事へ得可きものに非ず、又慘酷なる供犧の血に由りて神意を喜ばしむ可きものに非ずして、神に事ふるの道は人々個々にその自己を實現するに在り、人間たるの常道を如實に修行するに在り、宗教信者の本務なるものも、是れより以外又何等他の異あること無し。是れ蓋し基督が神人を觀ずるに父子の關係を以てせし根本義より推演せられ來りしの結果なり。從て又基督教信者の道德と謂ふも、別に他の不思議なる仔細あること無く、そは一に皆な人世の常事人生の本務を實行するに外かならざるものとす。是れ基督の掬思特見に出づるものゝ第二なりとす。

基督彼自身にありては固より敢て新信仰を皷吹し新宗教を建設せんと擬せしものに非ずして、舊宗教中に於ける垢汚を洗滌してその眞意義に親炙せんと欲せしに在り。基督は神人の關係を觀ずるに父子を以てせしものなるが故にその關係や實に人性自然の天眞に出づるもの、之れより以外又更らに他の外形的虛儀ある

を要せざりしなり。此故に基督は敢て自ら八ヶ間敷儀式作法を設けず。故に基督教の教義儀式の煩雜を致し來りたるは一に後世の發達に係るものと謂ふ可きなり。

斯くの如く基督の宗教的意識は父子の相愛上に成立しをるが故に、何等の外的拘束羈約あること無く愛の宗教は又實に人心の自由を擴充して毫末の遺憾無きものとす。

雖然基督の思想は全然新奇にして、單に基督の捌思特見にのみ是れ由るものと謂ふ可からず、そは寧ろイスラエルの代々預言者の稱道せし所の思想を、少しく改良進歩せしめたるものに外かならず。唯その斬新なる所のものは一に基督の人格に在り、基督の宗教はその人格の上に完全なる實現を見るを得たり、基督の口に說法せし所のものは基督がその身に實踐せし所の行爲なり。基督は既に自ら天國に入り、而して尙未だ天國に至らざるの迷羊を喚び來るを以て自ら任ぜり、基督は身親ら能く神と人との關係に父子の親あることを體認して、之れを一切の人々に宣傳せり。その云ふ所その行ふ所は一に基督自家の內心の經驗より滾々湧出し

來れるものなり。基督は先づ自ら神人の關係親交を體認して、そを他人に敎示せり。基督は獨り先づ自ら神を知りて而して後ち他人をも天國に引入せんと努めたり。斯かる先覺者たる基督が、遂にその信者の渴仰を得て、道弟信念の歸托は遂に彼れ等を驅りて、敎祖の一身を神視するに至りしは、亦實に偶然に非るなり。基督の敎は救主基督の人格を離れては全くその旨趣を失却するに至る可きものとす。

基督は世界の救主なり、何んとなれば基督は凡て勞かれたる者、凡て惱める者を救はんとの至情のその中心に烈火の如く燃へたるものあるを以てなり。基督の天職は單に敎理を說くの敎師たるに非ずして病める者を救はんとするの仁醫なり。迷へる羊を憐むの牧者なり。轗軻不遇の徒を愍み、哀別離苦の人を慰め、彼等が失望落膽悲嘆愁傷の深淵に陷れるを救濟せんと期するに在り。是れ實に基督の自ら天職として深くその心に確信せし所のものとす。蓋し基督の斯く同情の熱涙に富みし所以のものは、元來基督が理想とせる神は吾人々類に對して父子の關係を有せるものにして、父子の親、父子の愛は、基督の理想なり目的なり。然るに今基

督は斯かる同感愛情を以て、世の貧窮者に向ひ落魄者に接す、又何ぞ矜哀の至情に堪へんや。されば基督の全人格が博愛の至情に由りて動き同感の熱火を以て燃へたる又實に偶然に非るなり。果して然らば基督の理想たる神は天父の博愛を以て群生を哀む何の不幸か何の哀傷か慰治せられざらん。然れば基督の眼を以てすれば、世には到底救治し得られざるの害惡なるもの有ること無し、何んとなれば神の愛は全能なるを以てなり。而して基督は此害惡の救治は一に全能なる天父の信頼に在りて存すと爲し、基督自らも此旨を體し此福音を一切の衆生に宣傳して、その救濟主メッシアを以て自ら任ぜり。是れ又基督の所謂救濟主なるものが、當時猶太人の思惟したりし如きメッシアと其旨趣を同うせざる所以猶太人が基督を理會せざりし又實に此に存す。故に吾人にして一たび天父たる神を信じ神に事ふるの至情を有せば、そは一切の害惡を消滅し去るの根本的湯藥なり。一たび天父の慈愛中に懷抱せられたる人は、又秋毫の悲愁嘆傷なるものあること無し、何んとなれば全能博愛なる神の靈光海裏には、害惡の慘風悲雨の怒濤激浪吹き荒むを得ざればなり。人一たび此境遇に體達して大安慰に達せば、是れ實に天國

をその一身に實現せしものと謂ふ可きなり。

以上論ずる所之れを要するに、基督教は愛の根本義に立てる自由自在の解脱的宗教にして、外的虛式の末を離れて神人の同交に基いする吾人の精神的內容の動機を重んずるの宗教なり。而してそは一に基督の人格に由りて完全なる實現を得、基督の人格を俟ちてのみ初めてその眞顯現を得たるもの基督は先づ自ら神人の同交を父子慈愛の關係上に體認し、而してそを未だ知らざるの人に敎へて同行同伴相共に天國の實現を期し、之れを以て自己の天職と感じ、一切衆生の救主を以て自ら任じ、一つの羊群一つの牧者を以て自ら擬せしものと謂ふ可きなり。

基督教を論ずるに當りて、特に吾人の注意を要す可きは、その普遍主義なり。されど基督自身に在りては、必ずしも世界全般の人類を以て、直接その對機とせしに非ずして、寧ろその國人の信仰界の刷新を企圖せんが爲めに蹶起せしに過ぎず。猶太教の儀式主義を補ふに精神的道德主義を以てし、斯くして自己の周圍に僅少の弟子を集めて、師弟相共にその主義を如實に躬行せんと擬せしものなり。故に斯かる團體よりして後世の教會なるものは起こり來りしが、基督は特別に自己の宗

教には斯く〳〵の儀式を要し、斯く〳〵の祭儀を執行せよと教へしものに非ず。又猶太人に非ずんば遂に天國に入るを得ずと說きしものにも非ず、否な寧ろ世界萬國の民は何人に限らず、苟も主の道をだに奉ぜるものたらば、皆な等しく天國に生るゝを得可きものと說けり。此に於てか使徒保羅が猶太國外に主の福音を宣傳せんとするに至るや、玆に基督教の普遍主義は表現し來らざる可からず、曰く基督の中には猶太人も無く、希臘人もなきなりと。此に於てか數年を出でずして基督の福音は世界萬國の民の中に宣傳するを得るに至れり。保羅の宗教は基督自身の信仰と著るしき相異無く、神人の關係を父子の關係に觀ぜしと雖、獨り保羅が基督の死、基督の磔殺を觀ずるや頗る重大にして、保羅の特色亦實に玆に存す。則ち、保羅は觀ぜり、基督のゴルゴタ山上の磔刑は吾人々類に代りてその罪を救るさんが爲めの贖償に出でしものなりと、換言すれば基督の磔刑は、一切衆生の原罪を贖償せんが爲めの義舉にして、身を殺して仁を爲すの最高至極の理想的標本なりと。此に於てか保羅の基督教に在りては、基督の死は遂に基督教信仰の中心核實を形成するに至れり。

羅馬帝國は今や天下を統一して全世界の主權を確立せり。換言すれば羅馬は全世界統一の主權者なり。此に於てかその帝國の要する宗教なるものは又世界宗教たり、個々の國民を離れたる宗教上の普遍主義なりとす。而して基督教は自ら進みて今や羅馬帝國の此一大需要に應ぜんとするに至れり。而かも基督教は又全世界思潮の集注府たる、羅馬帝國内に入るに及びては從來單に猶太思想の繼承たりしに反して、諸多の外國思想に鑄鎔陶冶せられて、漸々その發達進化を成遂し、以て世界的宗教の使命を全うするに至れり。

是れより先き希臘哲學は、基督教以前に在りて早く既にその宗教的思潮の前驅を爲せり。希臘思潮はアリストテレース以後神を以てそを哲學思辨の中心點と爲し、神人の關係を說定して人類の倫理道德上の理想を與へたり。啻に之れのみならず、希臘の哲學々派なるものは、之れを近世の哲學々派に比するに頗る實際的宗教的たるものありて存し、而てそは吾人外界の儀式を重んぜずして、その心靈界道德界に重きを置きしは、恰も基督教が猶太教の虛式外儀を排斥して、その內界精神の動機を重んぜしと一般なりとす。然れば希臘哲學と基督教とが、その間打ち離

す可からざる內的連鎖を以て精神的締盟を形成しをりしの狀又察知するに餘りありとす。

斯くして希臘思潮と基督敎との締盟全く成りしは紀元第二世紀の終に在り、此に至りて基督敎の敎理儀式の完成共にその緒に就き敎會組織全く成りて基督敎所依の聖典亦その確立を見るに至れり。是れ實に彼の所謂羅馬敎會なるものにして、羅馬敎會なるもの興隆して玆に法王の中心主義敎會の體統主義を醞釀するに至りてや、再び外形上虛式の妖雲は基督敎部內に搖曳し來り、煩鎖なる敎義の表現は、活潑々地生氣あり活力ある原始的基督敎の核實眞髓を沒去し去るに至れり。今や彼の基督がその弟子と共に實踐躬行せし、易簡直截なる神の道敎主の眞精神より、滾々として迸流し來たれる信仰の活泉は果して、那邊にか之れを求む可き。羅馬敎會は之を內にしては形而上學的敎理の桎梏を以てし、之れを外にしては虛式外儀の株守盲從を以て一般信者を束縛するに至れり。

基督敎が歐洲諸國に流布するに至るや、基督敎は歐洲諸國中その古來より既存せる風俗習慣道德宗敎と互に相ひ順應同化して、同一基督敎と雖も諸般の特性異色

を發するに至れり。故に以太利に於ては以太利固有の羅馬の古宗敎と同化して、聖母マドンナや聖徒の崇拜は基督敎內に盛んとなり、之れに反して和蘭に在りては基督敎なるものは、神の道を敎ふる說法に止れり。その他の諸國亦その基督敎中に、彼等諸國の古來相傳の信仰儀式を混同し居れり。此に於てか現今歐洲に於ける基督敎なるものゝ多種異樣なる、吾人をして殆ど之れをしも尙同一基督敎と稱し得可きかを疑はしむるものありて存するを見るに至れり。而かも能くその各國宗敎の眞精神眞旨趣に想ひ到る時は、何れも皆な基督の根本思想のその中に由りて以て存せざる所のものあること無し。今日と雖も歐洲諸國の人民は、皆な基督の敎を以て根本義と爲し、以てその精神上の安慰救濟に接しつゝあるものなり。彼等の道德に活潑々地の自由なる生氣を賦與する所のものは、又基督の嘗て敎へし所のものより一條の脈絡を傳へて、滾々として洩發し來れる所の末派深流にして、そは一に基督の愛神愛人の思想を以て根本的源泉と爲さゝるもの一も是れあらざるものとす。

宗敎學終

14
229

파T77